

ドラゴンボールスーパー

DRAGON BALL SUPER

スーパーヒーロー

SUPER HERO

映画ノバライズ みらい文庫版

鳥山 明・

原作・脚本
キャラクターデザイン

小川 慧・著

集英社みらい文庫

集英社eみらい文庫

ドラゴンボール超 スーパーヒーロー

映画ノバライズ みらい文庫版

原作・脚本・キャラクターデザイン 鳥山 明

著 小川 慧



この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。





孫悟飯
Son Gohan

悟空の長男。ものすごい潜在能力を秘めるが、闘いは好まない。現在は学者で、研究に熱中している。

登場人物紹介
CHARACTER

パン
Pan

悟飯とビーデルの娘。まだ3歳の幼稚園児だが、ピッコロのもとで修業している。

孫悟空
Son Goku

地球育ちのサイヤ人。闘うことが好きで、さらに強くなるために修業を続けている。

ベジータ
Vegeta

誇り高きサイヤ人の王子。ブルマの夫で、トランクス之父。悟空にライバル心を持つ。

ピッコロ
Piccolo

地球で暮らすナメック星人。かつては悟空の宿敵だった。悟飯の師匠であり、現在はパンに修業をつける。





孫悟天
Son Gohan

悟空の次男。マイペースだが、兄の血脈と同じく高い潜在能力を持つ。



トランクス
Trunks

ベジータとブルマの息子。幼い頃から父にきかえあげられている。



ブルマ
Bulma

地球人。ベジータの妻でトランクスの母。科学者としては天才。



人造人間18号
Android 18

Dr. グロに作られた人型人造人。現在はクリリンの妻で、娘がいる。



クリリン
Krillin

地球人。悟空の子供のころからの親友。現在は警官として活躍。



ブロリー
Broly

宇宙の片断で生きのこっていたサイヤ人。怒ると手がつけられない。



ウイス
Whis

ビルの付き人の天使。おいしいものが大好き。



ビルス
Beerus

第7宇宙の破壊神。おいしいものが大好き。



チライ
Cheerai

フリーザ軍の元隊員。盗みが得意。



カリン様
Karin

カリン塔に住む仙猫。仙豆を育てている。



デンデ
Dende

ナメック星人。地球の神様をしている。



レモ
Lemo

フリーザ軍の元参謀。料理が得意。

★ DRAGON BALL SUPER ★

みなさんは「**レッドリボン軍**」という名前をごぞんじだろうか？
かつて**レッド総帥**という男が率いた、**世界最悪の軍隊**である。

世界征服をたくらむ**レッドリボン軍**は、
各地で悪のかぎりをつくして、人々におそれられていた。
だがその**野望の道半ば**で、
たったひとりの**孫悟空**という少年に壊滅させられてしまう。

しかし、生きのこった者たちがいた。
ひとり、**人造人間**という兵器を開発していた**天才科学者**、**ドクター・ゲロ**。
もうひとり、**レッド総帥の息子**、**マゼンタ**である。

マゼンタは、**レッドリボン軍の表の顔**である**レッド製薬会社**の**莫大な資金**で、

SUPER HERO

★ DRAGON BALL SUPER ★

ドクター・ゲロへの支援を続け、ひそかに軍の復活をねらっていた。

孫悟空への復讐に燃えて人造人間の開発を続けたドクター・ゲロは、自らを人造人間に改造してまで悟空たちを倒そうとするが、自身の創った人造人間17号によって命を落とした。

そして、ドクター・ゲロが開発途中であつた究極の生物兵器「セル」は、さらに悟空たちを追いつめるが、悟空の息子である孫悟飯に敗れ去った。

この敗北でレッドリボン軍の復活をあきらめたかに見えたマゼンタだったが、亡きドクター・ゲロの孫、ドクター・ヘドが祖父にも勝る天才だと知る。その才能を利用して、悟空たちへの復讐と世界征服の野望をはたそうと、マゼンタはまたも暗躍しだすのだった。

SUPER HERO

Contents もくじ

てん さい
天才 ドクター・ヘド

そう にん びん しゅうらい
造人間の襲来

ぐん せい せん
ッドリボン軍の作戦

せい たたか
レス星の闘い

シェン ロン
でよ神龍

ゆう かい
ン誘拐される

てき
すべき敵はだれた

き かい ぶつ
覚める怪物

じ どう げき
死の突撃

い こ ほん ほん どう ちから
悟飯の本当の力

あした
れそれぞれの明日

その
★1

超天才
ちようてんざい

ドクター・ヘド



こう だい せい やく しき ち だい くるま すす
広大なレッド製薬の敷地を、1台のグレーの車が進んでいく。

おか さき た えん どう けい ほん しゃ
むかう丘の先に建っているのは、円筒形のりっぱな本社ビルだ。

げん かん まえ どう ちゃく くるま じょう ぶ びき と
玄関前に到着した車の上部には、いつのまにか1匹のハチがのぞきこむように飛んでいた。

「……………」

くるま お おお おとこ め うつ
車から降りた大男を、ハチの目が映しだす。

うえ おお あたま あか は で
くると上に大きくあがったリーゼント頭に、赤の派手なスーツ。

いろ ひ にく ぐち もと
色つきメガネをかけ、皮肉げにゆがんだ口元。

め おとこ かお こま ぶん せき じょう ほう て
ハチの目が男の顔のパーツを細かく分析し、あらゆる情報データベースと照らしあわせる。

おとこ な まえ
みちびきだされた男の名前は、カーマイン。

せい やく かん ぶ
レッド製薬の幹部だ。

じ まん な あし ど しゃ ない すす
自慢のリーゼントをクシでとかしながら、慣れた足取りで社内を進む。

しゃ ちょう じつ はい おく おとこ すう まい しゃ しん
社長室に入ると、奥のデスクでふんぞりかえっている男へ、数枚の写真をわたした。

「ふ〜ん……」

しゃ しん み おとこ せい やく しゃ ちょう
まじまじと写真を見つめるこの男は、レッド製薬社長のマゼンタだ。

たい かく ぐち きん いろ
がっしりとした体格で口ひげをたくわえ、金色のネックレスをつけている。

「これがドクター・ゲロの孫か……？」

は まき まゆ
葉巻をふかしながら、マゼンタが眉をひそめる。

しゃ しん うつ せ ひく こ ぶと わか もの
写真に写っているのは、背の低い小太りの若者だった。

かみ たい わり あい き せ お
髪を7対3の割合でびたりとなでつけ、パーカーを着て、リュックを背負っている。

かい さん か しゃ しん
どうやら、ヒーローショーのサイン会に参加しているときの写真のようだ。

み
まるでただのヒーローオタクにしか見えない。

りょう て く し せい しず
けれど、カーマインは両手をうしろに組んだ姿勢で静かにうなずいた。

「ドクター・ヘッド。24歳です」



「こいつも博士^{はかせ}なのか。それとも医者^{いしゃ}か」

「どちらの資格^{し かく も}も持っています。ごらんください」

そう^い言って、カーマインがリモコン^{そう さ}を操作^{かべ}すると、壁^{かた}のリボン^{きょう だい}の形^{かたち}をした巨大^{きょ だい}なモニター^{もん い ー}に、レッドリボン軍^{ぐん}のロゴ^{えい が}が映画^{えい が}のオープニング^{おー ぴー なる い}のように投影^{とう えい}される。

同時^{どう じ}に、軽快^{けい かい}な音楽^{おん がく}と、「カーマインプレゼンツ^{おん せい なが}」という音声^{おん せい}が流れた。

「おまえ^{つく}が作ったのか？」

「ハイ」

カーマインが少し^{すこ}だけ得意^{とく い}げな顔^{かお}で、にやりとうなずく。

それからピツとリモコン^おを押し、モニター^おにヘドの家系^{か けい}図^ずと写真^{しゃ しん}を映^{うつ}しだした。

「父親^{ちち おや}はドクター・ゲロ^{せん さい}の先妻^{し ねん}の次男^{しやう がく せい}で、ヘド^{りやう しん}が小学生^{じ こ た かい}のときに両親^{こ ども}はそろって事故^{じ こ}で他界^{た かい}。ヘド^{こ ども}は子供^{こ ども}にもかかわらず、その遺産^{い さん}でひとり暮らし^ぐ。14歳^{さい}で博士号^{はく し ぐう}を取る^とほどの天才^{てん さい}ですが、そのあとは、クセ^{つよ}の強い性格^{せい かく}のせい^かか、どこの研究室^{けん きゆう しつ}にもなじめず」

モニター^{もん い ー}では、あと^{わら}けなく笑^{そつ ぎやう しき}う卒業式^{しや しん}のヘド^{けん きゆう しつ}の写真^{じ だい}が、研究室時代^{けん きゆう しつ}のひねくれた表情^{ひやうじやう}の写真^{しゃ しん}に変わ^かっていく。

「のこされたわずかな遺産^{い さん}で、独自^{どく じ}に研究^{けん きゆう}を続^{つづ}けているようです」

「それは好都合^{こう っ ぐう}じゃないか。さっそ^とここちら^とに取りこむんだ」

マゼンタ^{ま ぜん た}はニヤリ^{にや}と笑^{わら}って、かきまぜていたコーヒー^{こー ひー}をすすった。

「うげっ！」

どうやらシナモンパウダー^いを入れすぎ^いたらしい。

思わず^{おも}ベツ^{した}と舌^{した}をだし、すぐ^よにデスク^よの呼びだしボタ^おンを押^おす。

「お茶^{ちや}を持^もってきてくれ」

「カシコマリマシタ」

おてつだいロボット^{じゆ わ き}が受話器^{じゆ わ き}ごしにこたえたのとほとんど同時^{どう じ}に、カーマイン^いが言^いった。

「3ヶ月^{か げつ ま}お待ち^{まち}ください」

「お茶^{ちや}をか？」

「ちがいます。ドクター・ヘド^{げん ざい}は、現在^{けい む}、刑務所^{しよ}に服役^{ふく えき ちゆう}中です」

「シツレイシマス」

説明^{せつ めい}のあいだに、おてつだいロボット^{あたら}が新^{あたら}しいお茶^{ちや}とせんべい^もを持^もってくる。



「服^{ふく}役^{えき}中^{ちゆう}？ なにをしたんだ？」

「それが」

カーマインがリモコンを押すと、コンビニの監視^{かんし}カメラ映像^{えいぞう}にきりかわった。

顔色^{かおいろ}の悪いツギハギだらけの男^{おとこ}たちが、コンビニでレジ^うを打っている。

その不気味^{ふきみ}さに驚^{おどろ}いた客^{きやく}が、あわてて逃げだす様子^{ようす}が映^{うつ}っていた。

「霊安所^{れいあんじょ}にしのびこんで、死体^{したい}を3体盗^{たいぬす}み、簡単^{かんたん}な人造人間^{じんぞうにんげん}加工^{かこう}をして、コンビニで働^{はたら}かせて資金^{しきん}を得^えていたようです」

「ものすごい天才^{てんさい}のような、そうでもないような……」

人造人間^{じんぞうにんげん}に強盗^{ごうとう}でもやらせたほうが、てっとり早くかせげるだろう。

それを、まじめに働^{はたら}かせて捕^{つか}まえたようだ。まったく意味^{いみ}がわからない。

天才^{てんさい}となんとかは紙一重^{かみひとえ}というやつなのか。

けれど、利用価値^{りようかち}はある。

「どちらにしても、ドクター・ゲロと同じく、人造人間^{じんぞうにんげん}の技術^{ぎじゆつ}は卓越^{たくえつ}していそうだ——」

そう言ってイスから降りたマゼンタは、机^いから頭^おがかるうじて見えるくらいの身長^{しんちよう}の低^{ひく}さだ。

窓^{まど}の外^{そと}を見^みながら、かじったせんべいをお茶^{ちゃ}で流^{なが}しこもうとすると、お茶^{ちゃ}が気管^{きかん}に入^{はい}って、マゼンタは盛大^{せいだい}にむせた。

「グフッ、ゴフツゴフツ！ エゲエッ！」

「……………」

「とっ、とにかく、ヤツの能力^{のうりよく}はレッドリボン軍^{ぐん}の復活^{ふっかつ}に不可欠^{ふかけつ}だ！」

気まずさをごまかすように、いさましく言^いいはなったマゼンタだが——

「あちっ！」

お茶^{ちゃ}を腕^{うで}にこぼしてしまい、その熱^{あつ}さにとびはねたのだった。



それから3ヶ月後——

『PRISON 8』刑務所からドクター・ヘッドが出所する日がやってきた。

重々しい扉から、ため息をついてでてきたヘッドは、紫色のヒーローコスチュームに身をつつんでいた。胸には「H」のマークがついている。

そんなヘッドに、刑務所の中から囚人たちのヤジが飛んだ。

「二度とくるんじゃねー！」「バカヤロー！」

「うんこたれー！」「早くあっちいけー！」

ヘッドにむかって、囚人たちからボールやトマトが投げられる。

ヘッドはギリギリと刑務所をにらみつけると、スーツケースをあさりはじめた。

そして取りだした手りゅう弾のピンを抜いて、無造作にポイッと刑務所へ投げ入れる。

なにがともなかつたかのように歩きはじめた数秒後。

うしろでドカンッ！ と大爆発が起こった。



マントをなびかせ歩く姿は、まるで、ヘドの大好きなスーパーヒーローのようだ。

「へっへっへっ……」

自分の演出に満足しながら歩くヘドのうしろから、車が1台やってきた。

「ドクター・ヘドだね。待っていたよ」

ゆっくりと横に並走した車から、いかにも親しげに声をかけてきたのはマゼンタだ。

運転席では、カーマインがヘドの様子を値踏みするようにうかがっている。

無言のまま歩みを止めないヘドに、マゼンタは愛想よく言葉を続けた。

「これは失礼。私は——」

「レッド製薬の社長だろ」

「！」

とつぜんマゼンタの正体を言いあてられて、カーマインは思わずアクセルを踏みこんだ。

なにもかもを見透かしたようなヘドの薄ら笑いに、言いようのない危機感を覚えたのだ。

「オイッ！」

けれどマゼンタからシートを強く蹴られて、しかたなく、ヘドの横につけなおす。

「なぜ私のことがわかったのかね？」

マゼンタの質問に、ヘドはにやりと笑った。

「……調べたんだよ」

「調べたとは？」

「運転しているあんた。この前、刑務所の運動場にいたとき、ボクのことを偵察してたよね？ あやしいと思ってあとをつけさせたんだ」

「……どうやって……」

指摘されたカーマインが眉をよせる。

細心の注意をはらったはずだ。尾行だってされていない。

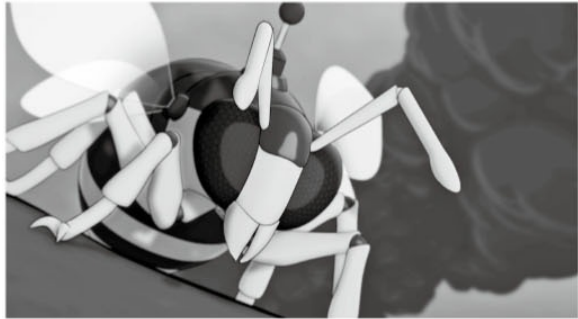
くやしそうなカーマインをしりめに、ヘドはとつぜんバツと左手を前につきだした。

スツとひじを曲げ、グローブにしこんだ端末にむかって話しかける。

「ハチ丸！ おいで！」

どこからともなく、ブーンという特徴のある羽音が聞こえてきた。

マゼンタたちの目の前で、1匹のハチが、ヘドの肩におとなしく止まる。



ヘドが得意げな笑みを浮かべて、手の甲を押すと、グローブが変形してモニターがでた。

その画面には、3ヶ月前のマゼンタとカーマインの様子が映しだされている。

「へへへ……ハチを改造して創った、サイボーグエージェントだよ」

ハチ——ハチ丸がこたえるようにピロピロと鳴き声のような音をだした。

ヘドがナノテクノロジーで開発した偵察機らしい。

「あんたをつけていったら、レッド製薬会社の社長室に入り、ボクのことを報告した」

「驚いたな……でもキミを調べていた理由まではわからないだろう？」

「だいたい理想はつくかな……ちょっと聞きとりにくかったけど、かすかに『レッドリボン』って聞こえていたからね」

マゼンタがぴくりと肩をゆらした。

そこまで知られているのなら、いまさらごまかしきることはむずかしい。

「まあ、とりあえず車に乗りたまえ。好物はいろいろ調べてあるんだよ」

「！」

言いながらジュースを見せると、ヘドの目がきらりと光り、のどがごくりと鳴った。

刑務所にいたヘドにとって、ジュースやお菓子はひさしぶりだ。

「ちょっと奥にいってくれる？」

あっさりと乗りこんできたヘドに場所をあげ、マゼンタはやさしく話しかけた。

「刑務所暮らしはどうだったかね？ ほかの囚人にいじめられたりしなかったか？」

「入ったころはそんなヤツもいたけど、みんななぜかナゾの死をとげていなくなったよ……ひひひ」

「そっ、そうか……」

不気味に笑うヘドのとなりで、マゼンタは気持ちを落ちつかせようと葉巻を取りだす。

本題はここからだ。

ジュースをおいしそうに飲むヘドに、同情するような視線をむける。

「おじいさんのドクター・ゲロは残念だった」

「正直、どうでもいいね。ボクはまだ子供だったし、なんで死んだのかもわからないし。会ったことさえなかったんだ」

本当に興味がなさそうだ。飲み終わったジュースのフタをあげ、のこった氷をガリガリと食べはじめる。

なかなか火のつかない葉巻をあきらめ、マゼンタは言った。

「しかし、奇遇なことに、キミもおじいさんと同じく人造人間の研究に熱心なようだね」

「最強の人造人間の研究をね」

「ハハハ！ すばらしい、それこそ私が望むものだ。天才を失ったのは痛手だったよ……父のレッドがなくなったあと、私が研究資金をだしていたんだがね」

「なるほど。天才ドクター・ゲロにかわって、今度は超天才のドクター・ヘドを見つけたってわけだ」

「そういうこと……」

わら 　 まど 　 した 　 お
ふっと笑ったヘドに、マゼンタは窓の下のボタンを押した。

　 ひら
アームレストがカパリと開く。

なか
中からバニラクリームをはさんだココアクッキーがあらわれた。

「どうかね、手を貸してくれないか？ けんきゅう ひ よう せつ び のぞ ほうしゅう たい おく
研究費用や設備はキミの望みのまま。報酬は1体につき三億はらおう！」

い 　 まい 　 み
言いながら、マゼンタはクッキーを3枚とって見せる。

　 こま
だがヘドは「うーん……困ったな……」とつぶやいて、かつ て まい
勝手にクッキーを1枚とった。

「おや？ 　 こま
なにが困るんだね」

「世間には知られていないけど、レッド製薬会社はレッドリボン軍の表の顔であり、資金源だったでしょ？ まだ子供だったころ、レッドリボン軍の影響を受けた祖父のことを、両親は嫌っていたからね」

「ほう、そこまで知っているとは思わなかったな……」

つぎ 　 つぎ 　 　 くち 　 い 　 たん たん 　 つづ
次から次へとクッキーを口に入れながら、ヘドは淡々と続ける。

「それにボクは、強くてカッコいいスーパーヒーローのマニアなんだ。レッドリボン軍の目的が昔と同じく世界征服だとしたら、スーパーヒーローは宿敵同士じゃないか」

「ハッハハハッ、おもしろい男だ。おとこ せ かい せい ふく み わたし しん もく てき き けん れんちゅう れんちゅう いっ そう
世界征服に見えるかもしれんが……私の真の目的は、危険な連中やたてつく連中を一掃し、社会に忠実で平和な世界を築きあげることだよ。ある意味、正義の味方だ」

り ゆう 　 こえ あか
いかにもな理由をならべたてるマゼンタの声は明るい。

　 ゆうしゅう 　 ず のう 　 ほん しつ 　 み ぬ
けれどヘドは優秀な頭脳で、あっさりとは本質を見抜いてしまった。

「ようするに、ちから ちゆうじつ へい わ せ かい きず い み せい ぎ み かた
力ずくで自分の思いどおりの世界にしたいってことかなあ。まあ、権力に興味のないボクにとって、研究以外はど

うでもいいことなんだけどね」
しん そこ 　 い 　 つぎ 　 て の
心底どうでもいいと言いたげに、次のクッキーに手を伸ばす。

が、クッキーはのこっていないかった。

マゼンタはすかさず新しいクッキーを10枚追加して、ヘドに見せる。

「あまり気が進まないんだったら、1体につき——たい じゅうおく
十億というのはどうかね？」

　 し せん 　 つい か 　 くぎ
ヘドの視線は追加のクッキーに釘づけた。

「ことわれないよね～」

　 い かた 　 うん てん せき 　 じゅうこう
その言い方に、運転席のカーマインがヘドに銃口をむけた。

「じゃあ、まあ、しょうがないか」

「そう。それがキミにとってもさい ぜん ほう ほう
最善の方法だよ」

　 て 　 じゅう 　 めい 　 はな 　 た 　 い
手で銃をおろすよう命じながら話すマゼンタに、ヘドはクッキーを食べながら言った。

「言っておくけど、じゅう ひ ふ てい ど しょうげき た とく しゅ ぐすり ちゅうしゃ
銃でおどされたからじゃないよ。ボクの皮膚はある程度の衝撃に耐えられるように特殊な薬を注射してあるからね。それに……」



ニヤツと笑った視線の先には、いつのまにかカーマインの横を飛ぶハチ丸の姿が。

「このハチ丸の毒針はおそろしいよー。たとえ人造人間でも、人間の部分がのこっていたらイチコロじゃないかな」
「！」

キラリと針を光らせるハチ丸に、カーマインはあわてた。

手ではらおうとしたいきおいで、ハンドル操作をあやまり、車が激しく回転する。

「——っ！ ボクが協力する気になったのは、莫大な予算を使って史上最高の人造人間を創りだすことに魅力を感じたからさ！」

ぐるぐるとまわる車の中で、シートにしがみついたヘッドが言う。

「もう一度言っておくけどッ、マゼンタ社長の野望には興味がない。い、いいね！」

手玉に取ってうまく丸めこんでやろうと思っていたが、一筋縄ではいかないらしい。

さすがは天才ドクター・ヘッド。まわる車の中でも主張は曲げないようだ。

けれど、研究をなによりも優先させたい科学者気質は、マゼンタにとって好都合でもある。

「……けっこうだ！」

マゼンタもシートにへばりつくようにして答える。

ひとまず、契約成立だ。車はまたまっすぐに走りだした。

「——で、最大の敵の目標は？」

あとはこの頭でっかちのヒーローオタクに、話をあわせてやればいい。

マゼンタはニヤリと笑ってヘッドを見た。

「セルを倒した連中だ」

「それって、ミスター・サタンじゃ……」

「いや、ちがう。ヤツも一味だが、我々の調査ではカプセルコーポレーションのブルマを軸にしたおそろしい秘密組織だよ」

「カプセルコーポレーション？ 世界一の富豪の？ 悪いウワサなんて全然聞かないけど」

不審そうな声をあげたヘッドに、マゼンタは身を乗りだして真剣な顔を試みせた。

「イヤイヤ。カプセルコーポレーションの本社に空を飛ぶ人間が出入りしてるという目撃者は何人もいる。我々の調査では、おそらく宇宙人だよ……」

「宇宙人!？」

ヘッドの目が大きく見開かれ、クッキーを食べる手が止まった。

「ああ。考えてもみたまえ。あの画期的なカプセルシステムや宇宙船なんて、宇宙人の技術なしではできたと思うかね？ 宇宙人がカプセルコーポレーションを利用して、地球を乗っ取ろうとたくらんでいるんだ」

「……突拍子もない話だな」

「そう言うと思ったよ。これを見たまえ。数年前のものだ」

マゼンタは胸ポケットからスマホをだした。

スーパーサイヤ人になったトランクスが、最強の敵であったフリーザを背中 of 剣で細切れにし、消し飛ばすシーンが映っている。

かつておとずれた地球の危機は、トランクスが救ってくれた。

けれどそんな事情など、ヘドが知るはずもない。

「こんなヤツがいると思うかね？ 宇宙人だよ。宇宙人同士が、この地球で鬭っていたんだ。おそらく地球の取りあいだね……このときはブルマの組織が勝利したようだ」

「だが……そうだとしたら、なんでブルマの一味は武力で一氣に地球を乗っ取ろうとしないんだ？」

「当然、地球人を労働力として取りこみたいからだよ。地球を完全な樂園にしあげたら、一氣に人間をかたづけて仲間の宇宙人を呼びよせるつもりなんだ」

マゼンタがもっともらしくたたみかける。

「セルはキミの祖父が創りだした最高傑作だ。宇宙人の秘密組織を使い、世界中の富をほしいままにするカプセルコーポレーションに一矢報いようとセルを送りこんだのだが、返り討ちにあってしまったんだ……そして人造人間17号と18号にも裏切られ、ヤツらに取りこまれてしまった……」

無念さをにじませるマゼンタに、ヘドは考えこむように腕を組んだ。

シートに深く腰をあずける。

「敵はかなり手ごわそうだな……」

「ああ、組織の中にはあのおそろしい魔人ブウやピッコロ大魔王もいる」

「有名なブルマ博士も宇宙人なのか？」

「……おそらく」

真剣な表情でクッキーを食べるマゼンタに、ヘドもクッキーを手にとった。車内には、カーマインがかけたレッドリボン軍の壮大なテーマソングがひびいている。

クッキーをふたつに割って、クリームをすくってかじったヘドは、表情を引きしめて言った。

「ヒーローの出番だな」



「そういうことだ……ヤツらを倒せるような人造人間を創りだす自信はあるかね？」

あおるように、カーマインがボリュームをあげる。

「くだらない質問だな。たったいま、ボクが目指すのは、宇宙で最強の人造人間に変わったんだよ」

言いながら、ヘドはフードをぐいっとかぶった。

頭からつま先まで、完全に変身ヒーローのようなかっこうになる。

しかし、小太りのヘドにはまるで似合っていなかった。

「カッコイイだろ」

「あつ、ああ……」

だがヘドは得意げだ。ここで気分を害してはいけない。

バックミラー越しに鼻で笑うカーマインのうしろで、マゼンタは盛りあげるように拳をにぎる。

「よし！ レッドリボン軍の復活は近いぞ！」

「おー！」

その気になったヘドも、マゼンタといっしょに高々と拳をつきあげたのだった。

その
2

じんぞうにんげん
人造人間の襲来



こ　　び　　なか　みずうみ　たき　なが　おと
木もれ日の中、湖から滝が流れる音がする。

しず　　そう　ちよう
静かでおだやかな早朝だ。

「……………」

はい　ご　かん　　け　はい
ピッコロは背後に感じる気配をうかがっていた。



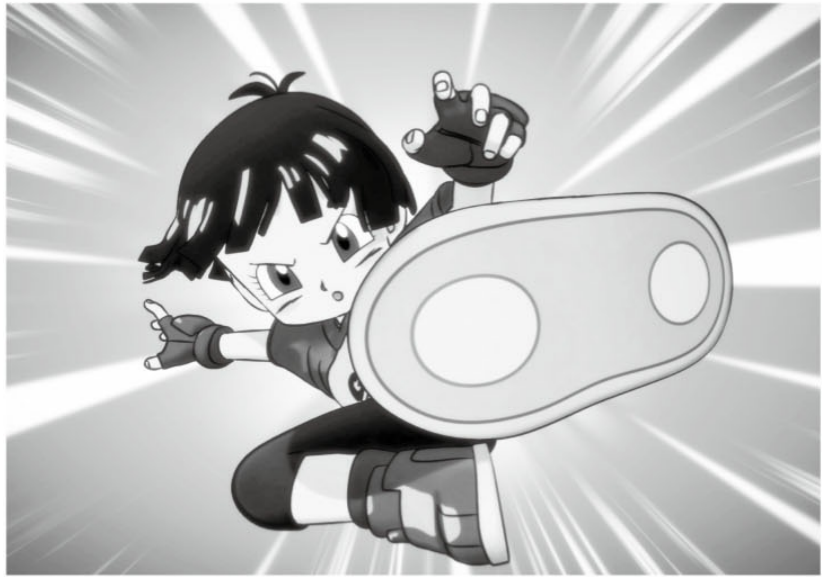
パンヤン——

みずうみ きょ だい ぎょ おお おと た と しゅん かん
湖で、巨大魚が大きな音を立てて飛びはねた瞬間。

もう か あたま ちい しょう じょ
猛スピードで駆けだしたのは、おかっぱ頭の小さな少女。

ご はん むすめ
——悟飯の娘、パンだ。

さい み がる どう さ じ めん りょう て
まだ3歳だというのに、身軽な動作で地面に両手をつき、ばねのようにくるとまわる。



そのいきおいでピッコロを飛びこえ、木々につっこみ姿をかくす。

「……………」

ザザ、ザザザ、と鳴る葉の音は、木から木へと移動しているのだろう。

ピッコロは腕を組んだまま、しっかりとその気配を目で追った。

太い幹を蹴ったパンは、地面に降りていきおいをつけ、ピッコロの横に飛びだしていく。

「————」

すかさずくりだされたピッコロのまわし蹴りを、パンはニッと笑って両手でつかんだ。そのままくりとまわり、顔面めがけてすかさずキック！

「！」

スキをつかれたピッコロは、組んでいた腕をあわてて解くと、返す動きでパンをはじいた。

ガンッ！

吹っ飛ばされたパンが岩にぶちあたる音がある。

とっさとはいえ、子供相手に少し力を入れすぎてしまった。

「いった～……」

土煙の中から起きあがったパンの頭には、大きなガレキがのっていた。

「……だいじょうぶか？」

「へいきへいき！」

心配するピッコロに、パンはガレキを持ちあげてニカッと笑った。

大きなケガはないようだ。

「よし。今日はここまでだ」

岩に座ったピッコロに、パンは自分のリュックからミネラルウォーターを取りだして、「ハイ」と笑顔でさしだした。自分用とピッコロ用のふたつを用意していたらしい。

空に野鳥の声を聞きながら、二人ならんで水を飲む。

「なかなかいいぞ。悟飯……というか、おまえの父親よりもスジがいいくらいだ」

「だったらそろそろ——」

修業の感想を伝えるピッコロに、パンは岩からびよんと降りた。

両手をつきだし、かめはめ波のようなポーズをきめる。

「手からとびだす気功波とかおしえてよ。悟天くんやトランクスくんみたいに」

「言ったはずだ。そういうのは基本が完ぺきにできてからだと。まだ空も飛べんくせに」

ため息をつきながらそう言われて、パンはしゅんと肩を落とした。

「むずかしんだよ～」

「むずかしいのは当然だ。やってみろ」

あれだけ軽快に動くことのできるパンだが、気をコントロールするのはへたくそだ。

ピッコロに^い言われてむくれながらも、パンは^{こぶし}拳をにぎって^め目を^と閉じる。



あご^ひを引いて集中すると、パンの足元^{しゅうちゅう}で葉^{あし}が浮きあがり、パン^はを中心^うにまわりはじめた。^{ちゅうしん}

「力^{りき}むな。願^{ねが}え。そうすれば気^きがコントロールしてくれる」

かかとが少し^{すこ}だけ浮いた^う気がする。^き

——が、それだけだった。

「はあ……、だめだー」

「ふん。いそぐこともないだろう。まだ3歳^{さい}だ。時間^じはたっぷりある。それにおまえにもサイヤ人^{じん}の血^ちが流^{なが}れている。一度^{いち}コツをつかんでしまえば簡単^{かんたん}だ」

肩^{かた}を落^おとし、トボトボともどってきたパンがピッコロ^みを見あげる。

「……ねえ、ピッコロさん」

「なんだ？」

「パパってその気^きになったらジイちゃんよりつよってホント？」

「ジイちゃん？ ……悟空^{ごくう}のことか。ああホントだ。いまはどうかわからんがな」

その昔^{むかし}、まだ悟飯^{ごはん}が子供^{こども}だったころ、修業^{しゅぎょう}をつけたのはピッコロだ。

潜在能力^{せんざいのうりょく}はあの悟空^{ごくう}をも超^こえていたとピッコロは思っている。その後も、魔人^{まじん}ブウやセルなどといった強敵^{きょうてき}と闘^{たたか}うたびに、悟飯^{ごはん}の能力開花^{のうりょくかい}は目^めをみはるものがあった。

けれど、そんな父^{ちち}の姿^{すがた}をパンは知^しらない。

「パパがたたかっていると見た^みことないけど」

「闘^{たたか}う必要^{ひつよう}がないからだろう。そのときがくれれば闘^{たたか}うさ」

「ふーん」

パンは、よくわからないとでもいうように、クルリとその場^ばでターンした。

「もう帰^{かえ}れ。遅刻^{ちこく}するぞ」

パンはニコツと笑^{わら}ってピッコロを見^みあげた。

「じゃ、幼稚園^{ようちえん}がおわったらまたね」

うなずくピッコロに満足^{まんぞく}して、ヨーイ、ドン、とばかりに地面^{じめん}を蹴^ける。

まるでロケットスタートだ。

あたりに土^{つち}ぼこりが舞^まって、パンの姿^{すがた}はあっというまに見^みえなくなった。



パンを見^みお^みく^みつ^みてから、しばらくあと。

ピッコロはいつものように、巨大な岩^{きょだい いわ}の上^{うえ}で瞑想^{めいそう}の修業^{しゅぎょう}をしていた。

と、その耳^{みみ}に、ブブブ、というパイプ^{おと}の音^きが聞こえてきた。

感^{かん}覚^{かく}をすませば、どうやら家^{いえ}のテ-ブル^{うえ}の上^おに置^ないてきたスマホが鳴^なっているようだ。

「……………」

ピッコロのスマホを鳴^ならすのは、これを持^もたせた悟飯^{ごはん}の妻^{つま}のビーデルか、はたまたブルマくらいだろう。

しかたなしに飛^とんで帰^{かえ}れば、やはりそれはビーデルからの電^{でん}話^わだった。ペンギンのようなネコのようなかわいいキャラクター、ペネコのケー^{はい}スに入^なったスマホが鳴^なり続^{つづ}けている。



な うご つう わ お
慣れない動きでスマホをつまみあげ、通話ボタンを押す。

「なんだ、ビーデル」

「あっ、ピッコロさん！ おはよう！ あのさあ、ピッコロさんて午後からヒマってあります？」

あたりにひびくほど大きな声がとびこんできて、ピッコロはスマホから顔ををはなした。

「午後？ 修業でいそがしいといえはいそがしいが。なんだ？」

「私 今日、教えている格闘技教室の大会があつてね。パンの幼稚園のお迎えに行けないの。それでもしよかったら、ピッコロさんに迎えに行ってもらえないかなあ、と思って」

「悟飯はどうした？」

こういうたのみごとは初めてじゃない。

むしろそのためにスマホを持たされたのかと思うくらいだ。

ピッコロは修業用のターバンとマントを気で消すと、イスに座って、本来迎えに行くべき父親の名前を口にだした。

「それが悟飯くん、今度発表する研究レポート作りでいそがしいって、何日も部屋にこもってるのよ」

「あのバカ……またか」

思わず舌打ちがでてしまう。

悟飯はいわゆる研究バカだ。修業のスイッチは入らないくせに、研究者のスイッチが入ってしまうと、まわりのことが見えなくなる。

「ピッコロさん、お願い」

「……わかった」

画面いっぱいに映ったビーデルにしぶしぶなずく。

「ありがとう！ 助かったわ！ じゃあ午後1時にね。おいしいおみやげ買ってくるから」

「オレは水しか飲まんと言っただろ！」

「あっ、そうか！ じゃあまたかわいいヌイグルミでも買ってくるわ」

そう言って、ビーデルは一方的に通信をきった。

「な、なぜヌイグルミ……」

ほしいと言ったことも、もらってうれしいと言ったこともない。

それなのに、ビーデルはなぜかいつもペネンコのヌイグルミを買ってくる。

すでに山となっている大小さまざまなペネンコたちを見て、ピッコロは顔をしかめた。

「……………」

このいらだちは、元凶にひとこと言ってやらねば気がすまない。



すぐさま悟飯の家へと飛んだピッコロは、玄関を素通りして庭にむかった。

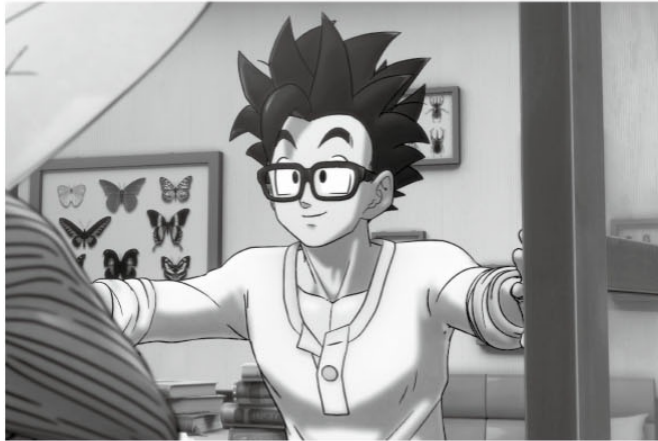
研究に集中した悟飯は、玄関のチャイムを鳴らしても気づかないことのほうが多い。

かわりに窓ガラスを爪でキッとひっかくのが、来訪の合図だった。

「あっ、ピッコロさん！」

ピッコロに気づいた悟飯が、うれしそうに窓をあけて出迎える。

部屋の壁には、たくさんの虫の標本がかかっていた。



「すいません。またパンの迎えをたのんじやったみたいで……」

「ふざけるな！ キサマいったいなにをやっているんだ！」

凄むピッコロに悟飯は一瞬きょんととして、それからすぐにノートパソコンを開いて見せた。

「虫のレポートを……この前南の島ですごいアリを発見しちゃって。そのアリ、危険がせまるとちよっと光って変身するんです。」

スーパー
超サイヤ人みたいでしょ!？」

「そんなことを聞いているんじゃない！ 子供の迎えに行けないくらい研究が大事かって聞いているんだ！」

興奮してまくしたてる悟飯に、ピッコロはこめかみを引きつらせながら怒鳴りつけた。

「あ、いえ……でも、ピッコロさんが行ってくれるんでしょ？」

ピッコロの口から、思わずふーっとため息がこぼれる。

「だいたい少しはトレーニングぐらいしたらどうなんだ！ いつ危険が襲ってくるかもわからないんだぞ」

子供
子供のころからやさしすぎてたよりない性格だとは思っていたが、家族を持ってもう少し修業に身を入れるかと思ったら、研究ばかりだ。

これまでだって、あらゆる強敵との闘いがあった。

これが最後だと思っても、かならず次の強敵があらわれてきたのだ。

だというのに、悟飯は「えー？」と緊張感のない声をだす。

「そんなことまだありますか。それにもしあったとしても、お父さんやベジータさんが——」

その言葉が終わる前に、ピッコロはすばやくひじをくりだした！

が、悟飯はノートパソコンを守るように左腕でガードする。

「へへ～、まだまだにぶっちゃいませんよ——ングッ！」

が、やはりその言葉が終わる前に、ピッコロは腹に拳を入れてやった。

うずくまる悟飯の服を、一瞬で自分と同じ道着に変える。



「あっ！ お、^{おも}重い……」

「どうだ、なつかしいかっこうだろ」

^{どう} 着と^{おも} 重たい^{かた} 肩あてのついたマントは、^{しゅぎょう} 修業の^き ときに着せていたものだ。

^ご 飯は^{はん} ひざに^て 手をついて^{おも} 重さに^た 耐えながら、^{わら} ニヤリと^み 笑うピッコロを見あげた。

「これじゃ、^{しごと} 仕事やりにくいですよ……」

「^{もん} 文句を^く 言うな。^い パンの^{むか} 迎えは^い 行ってやる……^{じぶん} たく。自分の^こ 子だろ……」

^{もん} ぶつぶつと^く 文句を^い 言いながらもどるピッコロに、^ご 飯は^{はん} あわてて^{まど} 窓から^み 身を^の 乗りだした。

「ホントすいません。^{こんど} 今度またヌイグルミをプレゼントしますから」

「いらん！ ^す いつオレがそんなものを^い 好きだなんて言った！」

けれどもすかさずするとくつつこまれて、^ご 飯は^{はん} はたと^{くび} 首をかしげる。

「^{きげん} 機嫌がわるいなあ、ピッコロさん……」

それでも^{むか} パンの^い 迎えに行ってくれるのは、ありがたい。

^と 飛び去る^さ ピッコロを見^み 見おくれた^ご 飯は、^{はや} 早く^{どう} レポートをしあげようと、^ぎ 道着のままでパソコンにむかったのだった。



山^{やま}にもどったピッコロは、ふたたび瞑想^{めい そう しゅ ぎょう}の修業^{はじ}を始めた。

パン^{むか}の迎えまで、まだ時間^{じ かん}はある。

気^きをコントロールして集中^{しゅうちゅう}し、浮か^うせた巨大^{きょだい}な岩^{いわ}の上^{うえ}で目^めを閉^とじる。

と、その空^{そら}から、とつじょ光^{ひかり}の玉^{たま}があらわれた。

光^{ひかり}の玉^{たま}は爆散^{ばくさん}し、レーザーのように降^ふりそそぐ。

「！」

ピッコロが目^めを開^{ひら}いた瞬間^{しゅんかん}、岩^{いわ}にあたった光弾^{こうだん}が爆発^{ばくはつ}し、あたり一^{いち}面^{めん}、煙^{けむり}とガレキだらけになる。

「……オレ^{しゅ ぎょう}の修業^{じや ま}の邪魔^{じゃま}をしたな」

ピッコロは怒^{いか}りの表情^{ひょうじょう}で空^{そら}を見^みあげた。

視線^{し せん}の先^{さき}にはひとりのおとこ^{おとこ}の男^とが飛^とんでいる。

黄色^{き いろ}い軍服^{ぐんふく}のような上^{じょう}下^げに青^{あお}いマント。頭^{あたま}の上^{うえ}には、トサカのようなもの^{ひか}がふたつ、にぶく光^{むな もと}っている。胸元^{むねもと}には『2』という数字^{すう じ}が書^かかれていた。

男^{おとこ}は手^てにした銃^{じゅう}を器用^{きよう}にクルクルとまわしてから、腰^{こし}のホルダーにカチリとはめる。

「フン、ピッコロ大魔王^{だい ま おう}だな」

「残念^{ざん ねん}。オレはただのピッコロだ」

「どういことだ？」

いきなり攻撃^{こう げき}をしかけるようなヤツに教^{おし}えてやるいわれはない。

「いろいろ複雑^{ふく ざつ}なんだ。で、古^{ふる}くさいヒーローのようなおまえは？」

逆^{ぎやく}にそう問^といかけると、男^{おとこ}は少しムツとしてから、また、フン、と鼻^{はな}を鳴^ならした。

「せめてレトロ^いと言ってほしいね。残念^{ざん ねん}ながら、ボク^{しょうたい}の正体^{しょうたい}は——」

言^いいながら、男^{おとこ}はスツと両腕^{りょううで}を左^{ひだり}に流^{なが}し、それから上^{うへ}に持^もちあげる。

最後^{さい ご}に親指^{おや ゆび}、小指^{こ ゆび}、人差し指^{ひと さし ゆび}をピツと立^たて、奇妙^{き みょう}なポーズをきめると——

B_ボ
O
K_カ
A
A_ィ
A_ン
M
!

男おとこのうしろで爆発ばくはつが起おこり、文字もじが浮うかんだ。その文字もじを背せに、男おとこが叫さけぶ。
「まだヒミツだ！」



ピッコロは「ぐう」と低く^{ひく}なった。

まるでヒーローアニメの登場^{とうじょう}シーンのような演出^{えんしゅつ}だが、意図^{い と}がまったくわからない。

と、男^{おとこ}の肩^{かた}に、赤い^{あか}リボンのようなマークがついているのが見えた。

白字^{しろ じ}で『RR』と書^かいてある。

「そのマーク……神^{かみ}だったときに見覚え^{み おぼ}がある。たしか、レッドリボン軍^{ぐん}……」

ピッコロの言葉^{こと ば}に男^{おとこ}は驚^{おどろ}いた顔^{かお}をして、片手^{かた て}でびしゃりと額^{ひたい}をおおった。

「え……？ あちゃー、こいつはしくじったな。ところで、神^{かみ}だったとき、というのは？」

「ふん、リサーチ不足^{ぶ そく}だな。教^{おし}えてやるもんか」

「ケチだなー」

男^{おとこ}はぷいっとむくれたように文句^{もん く い}を言^いった。

どこまで真剣^{しん けん}なのか、いまいちつかめない言^いい方^{かた}だ。

ピッコロはじっと男^{おとこ}を見つめながら顔^{かお}をしかめた。

「レッドリボン軍^{ぐん}は、とっくの昔^{むかし}に壊滅^{かい めつ}した。そしてのこった科学者^{か がく しゃ}のドクター・ゲロの野望^{や ぼう}もそのあとに消え去^{き さ}ったはずだ……セルもふくめて……」

そのレッドリボン軍^{ぐん}とこの男^{おとこ}に、どんな関係^{かん けい}があるのだろう。

どういつもりか知らないが、ひとまずピッコロは静^しかに気^きをさぐってみる。

男^{おとこ}は空^{くう}を見つめ、それからしかたないとばかりに肩^{かた}をすくめた。

「今日はただの腕^{きょう}だめしのつもりだったんだけど……そうはいかなくなったらしい」

「……気^きが感じられない。ロボッとか人^{じん}造^{ぞう}人間^{にん げん}だな。創^{つく}ったのはだれだ？」

そう聞^きくと、男^{おとこ}は素直^{す なお}に驚^{おどろ}いたように目^めを見開^{み ひら}いた。

「そんなことまでわかるのか？ さすがだな。しかしそれも、ヒミツ、さ」

人^{じん}造^{ぞう}人間^{にん げん}だとあっさり^{みと}と認^めめる。

おどけたような軽^{かる}い調子^{ちょう し}でそう言^いわれ、ピッコロは意図^{い と}がますますわからなくなった。

どこまでもみょうな相手^{あい て}だ。

「……ふん。ところでまさか、このオレと闘^{たたか}うつもりなのか？」

「正解^{せい かい}」

男^{おとこ}は左^{ひだり}手を腰^{こし}にあてると、右^{みぎ}手でピッコロを指^{ゆび}さしてニヤリと笑^{わら}う。

「そして死^しんでもらうことに計^{けい}画^{かく}を変^{へん}更^{こう}したよ。悪^{わる}く思^{おも}わないでくれ。そういう命^{めい}令^{れい}だ」

「フフン。じゃあ、さっさと終^おわらせよう」

かまえるピッコロと対峙^{たい じ}して、男^{おとこ}がクツとあごを引^ひき、一^{いつ}氣^きに間^ま合^あいをつめてきた。

くりだされた拳^{こぶし}をよけて、腹^{はら}に最^{さい}初^{しよ}のパンチをきめたのはピッコロだ。

つづ^{つづ}け^けふ^ふと^と男^{おとこ}だが、まるでなにごともなかったかのように空^{くう}中^{ちゆう}で止^とまると、スピードをあげてまたむかってきた。

おどろ
驚くピッコロの腹に、今度は男のパンチがきまる。

D^ド
O
K^カ
A
!

しょうげき
衝撃とともに、すぐそばにポップな文字がでた。

「……なに??」

とまどうピッコロへ、すばやい動きで男がせまる。

!!-H-S-B^ビ

も　じ　き　と
文字に氣を取られたピッコロの頭に、男の強烈なかかと落としが炸裂した。



「ぐわあーっ！」

^{いわ} ^{やま} 岩山をけずりながら、^じ ^{めん} ^{はげ} 地面に激しくつきおとされる。

「くっ……なぜ、^も ^じ 文字がでる……」

よろよろと起きあがったピッコロに、^お ^{おとこ} 男はやれやれというように、^{かた} ^て ^{かる} 片手を軽くあげてみせた。

^{うご} ^{おお} 動きがいちいち大げさだ。

「ちょっとガッカリだな。もっとすご^{おも}いって思ってたのに」

そう言われ、ピッコロは^い ^{ちょうじゅうりょう} 超重量のマントとターバンを^ぬ ^す 脱ぎ捨てた。

「うおおおお！」

^{いっ} ^き ^{かる} 一気に軽くなった身で、スピードをあげて^{おとこ} 男にむかう。

が、ピッコロのつきは、^{おとこ} 男にかわされた。

G
A
!!

かわりにひざ蹴^げりをあごにきめられる。

なが^{なが}流^{なが}れるような動^{どう}作^さで、男^{おとこ}はさらにピッコロのみぞおちにひじ^いを入れた。

DOOG!

そして、いちいち文字^{も　じ}がでる。

「はあっ！」

ピッコロはおかえしとばかりに両腕^{りょう　うで}で男^{おとこ}を殴^{なぐ}り倒^{たお}すと、返^{かえ}す動き^{うご}で蹴^けり飛^とばした。

しかしダメージはまったくないようだ。

くると身軽^{み　がる　ちやく　ち}に着地^{おとこ}した男^{おとこ}へ、ピッコロは手^てをつきだした。

「ハア〜ッ！」

気功波^{き　こう　は}の連打^{れん　だ}をみまてやる。

が、すさまじい量^{りょう}の気功波^{き　こう　は}を、男^{おとこ}はすべてよけてしまった。

そのまま上空^{じょう　くう}へ飛びだすと、眼下^とにいるピッコロへと銃^{がん　か}をむける。

「終わりだ」

銃口^{じゅう　こう}から、ものすごい熱量^{ねつりょう}が放出^{ほうしゅつ}される！

激しい爆音^{はげ　ばく　おん}があたりの空気^{くう　き}をふるわせた。

岩山^{いわ　やま}にめりこんだ光球^{こう　きゅう}が、大爆発^{だい　ばく　はつ}を巻きおこしたのだ。

上空^{じょう　くう}から爆炎^{ばく　えん}を見おろす男^みの目^めが、すばやくあたりのデータ^{おとこ　め}を読みこむ。

ピッコロがいた場所^{ば　しょ}からは、なんの生命^{せい　めい}反応^{はん　のう}もない。

「……あれ？　こっぴみじんか……？　死^しに顔^{がお}を確認^{かく　にん}したかったな」

ふん、と鼻^{はな}で笑^{わら}った男^{おとこ}は、そのままどこかへと移動^{い　どう}を開始^{かい　し}した。

その様子^{よう　す}を、ピッコロははるか上空^{じょう　くう}から気配^{け　はい}をころして見つめていた。

爆発^{ばく　はつ}にまぎれて、姿^{すがた}をかくしていたのだ。

「……こいつはほうっておけんな」

正体^{しょう　たい}も目的^{もく　てき}もわからないが、調べ^{しら}たほうがよさそうだ。

雲^{くも}を引^ひいて飛び去^とる男^{おとこ}のあとを、きづかれないうに低く飛^{ひく}んで追^おいかける。

森^{もり}を抜^ぬけ、林^{はやし}をわたり、どこまで行くのかとピッコロが思いはじめたとき。

ゴツゴツとした岩山^{いわ　やま}のようなものがあらわれた。頂上^{ちようじょう}にはひょうたんのような形^{かたち}の湖^{みずうみ}がある。

その山^{やま}のふもととはトンネルのように掘^ほられていて、入り口^{い　ぐち}の上^{うえ}にはレッドリボン軍^{ぐん}のマークがかかげられていた。

トンネルの奥^{おく}にはいくつか建物^{たて　もの}があり、男^{おとこ}はそこへ入^{はい}っていく。

「なんだ、あの建物^{たて　もの}は……」

ピッコロは思わず顔^{おも　かお}をしかめて、つぶやいた。

その



レッドリボン軍ぐんの作戦さくせん



トンネルの中では、まるで工場のようにたくさんのロボットや重機が動いていた。

ピッコロは気づかれないように距離をとりながら、男のあとをつけていく。

「あっ！ ガンマさん」

奥へと進む男に、兵士が気づいて声をかけた。

（ガンマ……？）

親しげに手をふられた男——ガンマが片手をあげてそれにこたえる。

「おつかれさまです」「おかえりなさい」

「おう！」

ほかの兵士たちも、ガンマに気づくと次々に気さくに声をかけて敬礼をする。

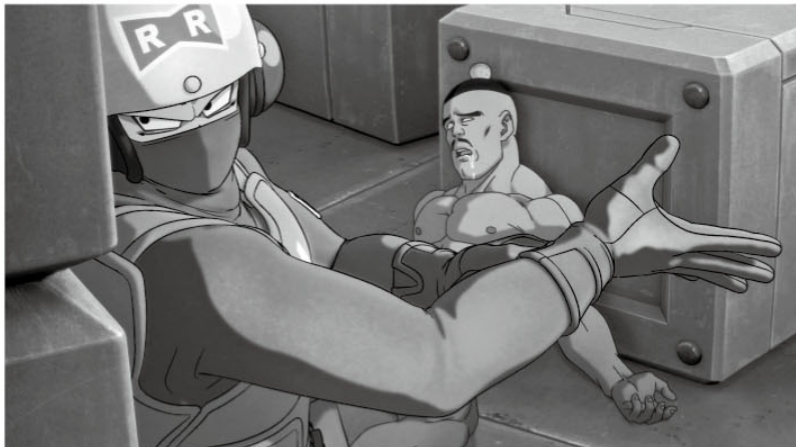
ピッコロは手近にいた兵士にしのびよると、ものかげに引っぱりこんだ。

「ぐあっ！」

気絶させたその兵士から軍服をはぎとり、さっさと着こむ。

軍服の胸には『94』という数字が書かれていた。

潜入のための完ぺきな変装をして、ガンマのゆくえを視線で追う。



と、トンネルの奥に進んでいたガンマの姿が、とつぜんかき消えた。

「消えた……？」

警戒しながら、ピッコロも奥へと進んでいく。

ガンマが消えた場所になると、ヴン……とノイズが走って、別の光景がひろがった。

どうやらカムフラージュがほどこされていたようだ。

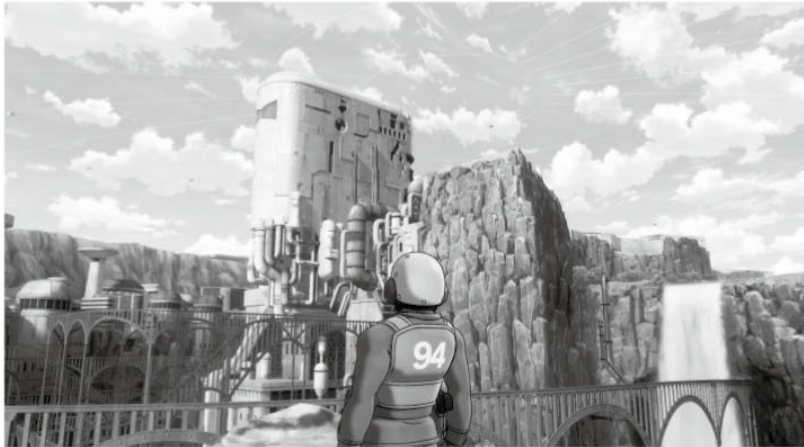
「おおお……」

目の前にあらわれた風景に、ピッコロは感嘆の声をあげた。

工場から一転、壮大に整備された巨大都市のような施設がひろがっていた。

ここが総本部のようなものだろうか。

滝が深い谷へと流れこみ、数本のモノレールが複雑に走っている。



じょう ぐう お ひ こう き み
上空からヘリポートへ降りたつ飛行機も見える。

かお たて なが じょう そう ぶ と はい すがた
ふと顔をあげると、縦に長いメインタワーの上層部へと飛んで入るガンマの姿があった。

「あそこか……」

お へい し あか こえ
あわてて追いかけていけば、またまた兵士がガンマに明るく声をかけていた。

「あ！ ガンマさん、おかえりなさい！」

「おう、ただいま！ ババン！」

ゆび じゅう う き おく すず
ガンマは指で銃を撃つようなしぐさをしながら、気さくにこたえて奥へと進む。

つづ へい し なか
あとに続いた兵士たちにまぎれて、ピッコロもメインタワーの中についていくことにした。

おく いっ しつ せ かい ち ず かざ かべ へい し れつ
奥のひろい一室につくと、世界地図が飾られた壁ぞいに、兵士たちが一列にならんでいた。

むね すう じ じゅん
どうやら胸の数字順にならべばいいようだ。

いち ばん ちゅう おう し せん
一番うしろにならんだピッコロは、中央のくぼみにおかれたソファにチラリと視線をやった。

えん けい こし ふたり
円形のソファにふかふかと腰をおろしているのは、二人。

はく い き こ ぶと せい ねん きん じ しん まん まん かお ちゅう ねん こ おとこ
白衣を着た小太りの青年と、金ネックレスをした自信満々な顔の中年の小男。

ふたり はい ご た おお おとこ
二人の背後にひかえるように立っているのは、リーゼントの大男。

ヘド、マゼンタ、それにカーマインである。

「さすがだったな、ガンマ2号。すべておまえの目をとおして見ていたぞ」

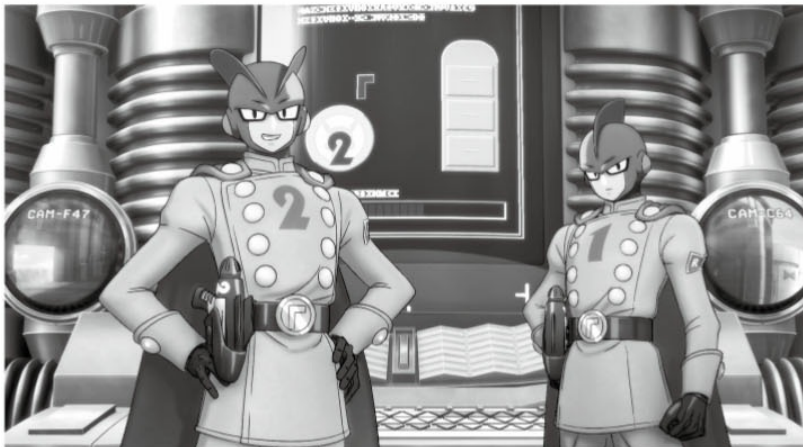
ぎゅうにゅう た こえ
クッキーを牛乳にひたして食べながら、ヘドはもどってきたガンマにやさしく声をかけた。

「ありがとうございます、ヘド博士！ でもテストにしてはちょっとやりすぎだったかも」

ほこ むね み め み
誇らしげに胸をはるガンマのとなりを見て、ピッコロは目を見はった。

に あか じん ぞう にん げん たい
似たようなフォルムで、赤いマントをつけた人造人間がもう1体いるではないか。

あたま むね か すう じ
頭のトサカのようなものはひとつ。胸に書かれた数字は『1』だ。



「なにつ……もう1体^{たい}いるのか！」

ヘドの呼び方^{よ かた}からして、ピッコロを襲^{おそ}ってきたのは『ガンマ2号』、もう1体^{たい}が『ガンマ1号』ということらしい。

驚^{おどろ}きに声^{こえ}をあげたピッコロを、となりの兵士^{へい し}が不思議^{ふ し ぎ}そうな顔^{かお}で見る。

あわててヘルメットのアイシールドをさげてごまかすと、ヘドが続^{つづ}けた。

「いいや、いい判断^{はん だん}だった。それよりせめて、登場^{とう じょう}シーンとフィニッシュくらいはポーズがあってもいいかもな」

じゅうぶん奇妙^{き みょう}なポーズをしていたと思う^{おも}が、あれはヘドのこだわりだったようだ。

そんなヘドを無視^{む し}して、マゼンタは葉巻^{は まき}をふかしながら眉^{まゆ}をよせた。

「まさか正体^{しょう たい}がバレるとはな……」

「ふん。あんたがレッドリボンのマークをつけるなんて言う^いからじゃないか」

たしかにそうだ。

あれがなければ、正体^{しょう たい}の目星^{め ぼし}はつけられていなかったかもしれない。

と、ガンマ2号^{ごう}にガンマ1号^{ごう こえ}が声^{こえ}をかけた。

「死体^{し たい}は確認^{かく にん}したか？」

「死体^{し たい}？ いや、バラバラでそんな必要^{ひつ よう}もなかったよ」

「慎重^{しん ちよう}さが足りないな」

「あれで助^{たす}かるわけないさ。見て^みただろ」

ガンマ1号^{ごう}の冷静^{れい せい}な指摘^{し てき}に、ガンマ2号^{ごう}が両手^{りょう て}を腰^{こし}にあてて言^いいかえす。

だが、ガンマ1号^{ごう}はモニターにむきなおると、すばやくキーボード^{そ う さ}を操作^{そ う さ}しはじめた。

ガンマ2号^{ごう}のめ^め目^めをとおして記録^{き ろく}された、ピッコロとの戦闘^{せん とう}映像^{えい ぞう}が表示^{ひょう じ}される。

「ここを見^みろ」

最後^{さい ご}に銃^{じゅう}で岩山^{いわ やま}ごと爆発^{ばく はつ}させたときの映像^{えい ぞう}を巻^まきもどし、ピット一時停止^{いち じ てい し}して、ズームアップする。

なにかが猛^{もう}スピードで上空^{じょう ぐう}に移動^{い どう}した残像^{ざん ぞう}が映^{うつ}っている——ように見えなくもない。

「えっ。微妙^{び みょう}だな……」

「ピッコロだとしたら、敵^{てき}の組織^{そ しき}にバレてしまった可能性^{か のう せい}もある」

懸念^{け ねん}を口^{くち}にしたガンマ1号^{ごう}と顔^{かお}を見あわせて、ガンマ2号^{ごう}は明^{あか}るい声^{こえ}をだした。

「だいじょうぶ。少なくともこんな場所^{すく}の秘密^{ひ ゃく}基地^{き ち}は見^みつからないさ。仮^{かり}にここがバレたとしても、そのとき組織^{そ しき}ごと倒^{たお}せばいいだけのことじゃないか。お堅^{かた}いなー、1号^{ごう}は。ふう～」

「おまえが軽率^{けい そつ}すぎるんだ」

すがた^{すがた}たちはよく似^にているが、性格^{せい かく}はだいぶちがうようだ。



そ しき
(組織.....?)

かい わ はなし み
けれどいまの会話だけでは、まだ話が見えてこない。

む し えい ぞう
そんなガンマたちのやりとりを無視して、カーマインがモニター映像をきりかえた。

けい かい おん がく おん せい なが
軽快な音楽と、「カーマインプレゼンツ」という音声流れる。

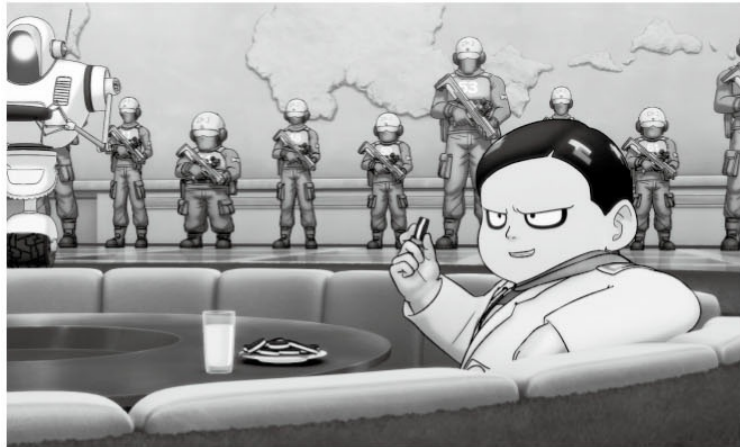
てき ちゅう おも そん ご ぐう きょうてき ま じん ふ き み
「敵の中ボスと思われる孫悟空やベジータというヤツは、かなり強敵そうだ。おそろしい魔人ブウもいる。さらに不気味なミスター・サタンの実力はまだ見えてこない」

お こと ば ご ぐう ま じん
くいつとメガネを押しあげるカーマインの言葉にあわせて、モニターに、悟空、ベジータ、魔人ブウ、それからミスター・サタンの
しょうかい どう が じん うつ
紹介動画が順に映しだされる。

わら ご ぐう ひょうじょう あく やく
ニヤリと笑った悟空たちの表情は、まるでとんでもない悪役のようだ。

くち い
けれどヘドは、クッキーを口にほおばりながら「だいじょうぶ」とあっさり言った。

さい こう けつ さく じっ せん しょうめい
「これでボクの最高傑作であるガンマの実戦でのすごさは証明されたからね」



自信満々のヘドのうしろで、ガンマ2号はなにやら不思議な動きをくりかえしていた。

どうやらヘドの言っていた登場とフィニッシュのポーズを一生懸命考えているらしい。

ビシッとポーズを取ってみせるガンマ2号に、ガンマ1号は「いまいちな」と首を横にふった。

そんな二人をふりかえると、ヘドはガンマ2号に声をかけた。

「ピッコロ大魔王は楽勝だったろ？ ガンマ」

「ええ！ ガツカリするほどにね」

きめポーズのまま明るく答えるガンマ2号に、ピッコロは内心で舌打ちした。

カーマインが、ニヤリといやみたらしく笑いながらメガネを押しあげる。

「さすが天才ドクター・ゲロのお孫さんですな」

「ふふん。ボクは超天才だけどね」

「ふん。その超天才のせいでピッコロを逃したのであれば、作戦を早めねばならなくなったな」

マゼンタがさらにいやみを言うが、ヘドは平然と立ちあがった。

「ご心配なく。ガンマの実力は立証できた。このデータを使えば、たいした時間もかからずガンマのコピーが何体もできる。ブルマをはじめとする邪悪で強力な秘密組織さえ一掃してしまえば、ヤツらの手先とも思える軍や警察などは、取るに足らぬ存在。あつというまに、この腐った世界を制圧できますよ」

自信たっぷりに説明されて、マゼンタはいらだたしげに声をあららげた。

「そんなことより、ドクター・ヘド。セルマックスはいつになったら完成するんだ」

（……セルマックス!?!）

聞き捨てならない不穏な単語だ。

ピッコロの胸がひそかにはねる。

「ご心配なく。ガンマたちがいれば、セルマックスなんて必要ない」

「いつかと聞いたんだ」

ヘドは考えるように、片手を自分の頬にあてて首をひねる。

「いつか……そうだな……こっちはもう少しかかりそうだ」

「ほとんどできていると言ったはずだぞ」

モニターの前に立ったマゼンタがパネルを操作すると、大きな培養カプセルが映しだされた。



べつ　ば　しょ　つく　じん　そう　にん　げん　けんきゅうしつ
別の場所に作られた人造人間の研究室のようだ。

「セルマックス自体はとっくに完成しているが、脳のコントロールプログラムに時間がかかるんだよ」

ま　なか　まる　まど　ぶ　き　み　かお　おお　うつ
真ん中にある丸い窓にズームすると、モニターに不気味な顔が大写しになった。

め　と　ねむ　も　よう　こん　ちゅう　すがた　み　おぼ
目は閉じられて、まだ眠っているようだが、まだら模様の昆虫のような姿には見覚えがある。

——まちがいなく、セルだ。

「ぬおっ！」

きょう　がく　め　み　ひら　へい　し　かん　たん　こえ
驚愕に目を見開くピッコロのとなりで、兵士たちのあいだからは感嘆の声がもれた。

けれどマゼンタのイライラはなおらなかったようだ。

「どれだけ待ったと思っているんだ」

「お言葉ですがマゼンタ総帥。少しくらい時間がかかっても、とにかく想像を超えた強さに……なんて注文したのはあんただ」

「……どうやらキミはセルマックスが気に入らないようだな」

「スーパーヒーローには見えないからね」

ヘドはおもしろくなさそうにそう言って、ふんとあごをしゃくる。

「それに、ベースがドクター・ゲロのデータというのも気に入らない」

はな　はな　れん　しゅう　つづ
そう話すヘドのうしろでは、ガンマたちがポーズ練習のやりとりを続けていた。

「ねえ、肩を貸してよ。カッコつけようよ、いっしょに」

かた　か　かた　ごう　てい　あん　ごう　む　し
肩によりかかり、ポーズをきめたいガンマ2号の提案を、ガンマ1号は無視していた。

それでも2号はしつこくたのみこんでいる。

そんなやりとりにいらいしながら、マゼンタはうしろで手を組み、ヘドをにらんだ。

「セルのすごさは実証済みだ。キミも当時のニュースで見ただろう。しかし、データが複雑すぎて我々だけでは再現不可能だった。キミならさらにパワーアップしてよみがえらせることもできると思ったんだ」

「もちろんたやすいことでしたよ。時間は無駄にかかるけどね」

「ふん。キミがセルマックスよりガンマに夢中になっていなければ、とっくに完成していたんじゃないのか？」

あん　しよく　む　たい　まん
暗に、職務怠慢をついてやる。

な　まえ　ごう　き　れん　しゅう　つづ
名前をだされたガンマ2号は、まったく気にせずポーズ練習を続けていた。

「もたれかからせて、ぜったいカッコいいから、ね？」

「イヤだ。だめだと言っている」

ごう　し　てき　じゅう　よう
2号にとっては、ヘドに指摘されたカッコいいポーズをきめるほうが重要なようだ。

そんなガンマたちを横目に、ヘドは胸をはって鼻を鳴らした。

「セルは特殊な細胞を少しずつ増やして、成長させるタイプだから、待っている時間が長いのは当然だ。むしろその時間を有効に使ってガンマを開発したことをほめてほしいね」

「もういい！　かまわんからセルマックスを起動してしまえ！」

おも　は　りよう　て　さけ
思いどおりにいかない歯がゆさに、マゼンタは両手をつきあげて叫んだ。



「早ま^{はや}ってはいけないな、マゼン^{そう すい}タ総帥^{か こ}。こいつは過去^{かい ぶつ}のセルをはるかにしのぐおそろしい怪物だよ」

が、ヘドに冷静^{れい せい}にたしなめられて、あげた手^てがだんだん恥^はずかしくなってくる。

そと手^てをもどしながら、マゼン^{こと ば つづ}タはごまかすように言葉^{こと ば}を続^{つづ}けた。

「レ、レッドリボン^{ちから み}の力^{ちから}を見せつけるには最高^{さい こう}の役者^{やく しゃ}だ」

「しかし、いまの状態^{じょうたい}で起動^{き どう}して世^よにだしてしまえば、とんでもないことになるよ」

「なんだ……」

ヘドはもったいぶって、セルマックスの培養^{ばい よう}カプセル^{うっ}が映^みるモニター^みをじっと見あげる。

「制御^{せい ぎょ}がきかず、あんたが支配^{し はい}したがっている世^よの中^{なか}そのものがなくなってもいいのか？」

「ぐ……」

「セルマックスなんて使^{つか}わなくても、やっかいな連中^{れん ちゆう}はガンマ^{き どう}がかたづけてくれるさ。そのあとでセルマックス^よを起動^{き どう}して、世の中^よにあんたの力^{ちから}を見せつければいい」

したり顔^{がお}でそう言うヘドに、マゼン^いタは苦^{にが}い表情^{ひようじよう}になる。

「……その言葉^{こと ば}、信^{しん}じていいんだろうな」

「もちろんさ」

にたりと笑^{わら}ったヘドのうしろで、ピッコロ^{あと}はゆっくりと後^{あと}ずさった。

（こっ、こいつはまずいぞ……）

潜^{せん に ゆう}入^{ゆう}はいったんここまでだ。

ピッコロは、だれにも気づ^きかれないうメイン^{そと}タワー^{そと}の外^{そと}にでた。

庭^{にわ}の生^いけ垣^{がき}の茂^{しげ}みにかくれて、すぐさまブルマ^{つう しん}に通信^{つう しん}をつなげる。

数^{すう かい}回のコール音^{おん}のあと、つながったブルマは「なあにい？」とのんびりした声^{こえ}をだした。

「めずらしいわね。あなたから電話^{でん わ}なんて」

「ブルマ、ベジータ^{こ ごえ はな}はいるか？」

つまんだスマホ^{かお ちか}に顔^{かお}を近づ^{ちか}げ小^こ声^{こえ}で話^{はな}す。

「いないわよ。例^{れい}によって、ビルス^{しゅう かん}さまのところ。もう3週間^{しゅう かん}になるかしら」

「悟空^{こ ぐう}もか？」

「当然^{とう ぜん}よ」

悟^{こ ぐう}空^{くう}とベジータ^{すこ まえ}は、少し前^{すこ まえ}にであったブローリー^{たたか}との闘^はいのあと、破壊^は神^{かい しん}ビルス^{ほし}の星^{しゅう ぎょう}で修業^{しゅう ぎょう}をすることが多^{おほ}くなった。おそらくブローリー^{おほ}もいっしょなのだろう。

パワーのありすぎる三人^{にん}が修業^{しゅう ぎょう}をするには、場所^{ば しょ}がなかなかむずかしいのだ。

だがいまは、タイミ^{わる}ングがすこぶる悪い。

「おまえ、たしかウイス^{れん らく}さまと連絡^{そう ち}する装置^もを持^もっていただろ。すぐ^{ふたり}に二人^{かえ}に帰^{つた}ってこいと伝えてくれ」

「なあに？ なにかあったの？」

「ああ。いまくわしく話^{はな}せないが、とんでもないことになりそうなんだ」

「ふーん、わかった。^{れん らく}連絡してみるわ」

^{ひっ し ひょうじょう つた}必死の表情で伝えるピッコロに、^{かる い つう しん}ブルマは軽く言って通信をきった。

^{ご ぐ}あとは悟空たちに^{れん らく}連絡をつけてくれるのを待つしかない。

「とりあえず、いまのうちに早くなんとかしないと……そうだ！ ^{せん ず}仙豆がいるかもしれんな」

^{たたか}闘いにそなえて、ピッコロもできることをしなければ。

^{おも}思いたち、^{てい えん と}庭園を飛びたつたピッコロの^{がん か きょ だい}眼下に、巨大なレッドリボン軍の^{ぐん み}マークが見える。

^{じょう ぐう}さらに上空へとあがると、^{はし き ち}ヴン……とノイズが走り、基地のかわりに^{こ めん}湖面があらわれた。

^{ひ みつ き ち ぜん たい みずうみ}どうやらこの秘密基地全体は、湖にカムフラージュされているらしい。

「……………」

^{ぐん わる}レッドリボン軍の悪だくみは、^{ち きゅう}地球にとって^{さい あく}最悪な事態を引き起こしかねない。

^{ひょうじょう}きびしい表情でふりかえると、ピッコロは^{もう}猛スピードで^{とう}カリン塔へと^と飛びたっていった。

その

★
4

ビルス星^{せい}の闘^{たたか}い



ピッコロが地球にせまる脅威に気づき、考えをめぐらせていたころ。

遠くはなれたビルス星では、悟空がブロリーを相手に激しい組み手をしているところだった。

感情のコントロールが苦手なブロリーが、キレずに闘うことができるようにと、自分のトレーニングも兼ねた悟空が胸を貸すようになっただいぶたつ。

単純な腕力ではブロリーが上だ。が、くりだされる攻撃を、悟空はうまくいなしていた。

なかなか思いどおりに攻撃ができず、ブロリーのイライラが高まってくる。

「——う！」

そのイラだけで、ブロリーのオーラがどんどんとふくれあがってきた。

「!？」

「う！ うかが……!!」

ブロリーがキレかかっている証拠だ。

悟空はあわてて待ったをかけた。

「ま、待った！ 待った待った!!」

顔の前で両手をぶんぶんふって見せる。

ブロリーはハッとするようにオーラを消した。

あらくなった息をととのえながら、悟空はしゅんと肩を落とすブロリーをしかる。

「おめえ、またキレかかてるじゃねえか～。そいつをおさえろって何度も言ってるだろ？」

「すまない、つい……」

自分でもままならない性格に、ブロリーはじゅうぶん反省している。

悟空は、やれやれと息をつくと、矛先を変えた。

岩の上に、ずっとだまって座っているベジータの前へとやってくる。

「おめえさ、いいかげんにしろよ。そんなに長いあいだ動かねえと、なまっちまうぞ」

悟空は前のめりに顔を近づけ、ぴしっと人差し指を立てた。



ビルス星^{せい}にきてからというもの、ベジータはまったく組み手^{く て}に参加^{さん か}していない。

じっと瞑想^{めい そう}を続けているのだ。

「世^よの中には、ジレンとか、このブロリーとか、すごいヤツらがいっぱいいるってわかっただろ」

けれどベジータはやはり動か^{うご}ず、目^めをつむったまま淡々^{たん たん}と答^{こた}える。

「うるさい、邪魔^{じゃ ま}をするな。これもトレーニングだ……」

「ウソ言^いうなよ。そんなのトレーニングなわけねえじゃん」

「きさまは、なにもわかっていない……」

「なにが」

そう言^いわれて、悟空^{ご ぐう}はムツとして首^{くび}をひねった。

けれど、やはり目^めを閉^とじたまま、ベジータは静^{しず}かに続^{つづ}ける。

「あの圧倒^{あつ どう てき}的に強^{つよ}かったジレン……じつは力^{ちから}そのものは、オレたちとそれほど大きな差^{おお さ}はない」

「え？」

ベジータの言葉^{こと ば}を、悟空^{ご ぐう}にはわかには信^{しん}じられなかった。

地球^{ち きゅう}の属^{ぞく}する第7宇宙^{だい う ちゅう}の存亡^{そん ぼう}をかけた『力^{ちから}の大会^{たい かい}』で、圧倒^{あつ どう てき}的な強^{つよ}さを見^みせたジレンと自分^{じ ぶん}たちに、力^{ちから}の差^さがないとは思^{おも}えない。

「パワーの使^{つか}い方にムダがまったくないんだ……気づ^きいたか？」

目^めを開^{ひら}いたベジータは、ゆっくり顔^{かお}をあげて悟空^{ご ぐう}を見^みた。

「あいつは闘^{たたか}いの途^と中^{ちゅう}でも、一瞬^{いつ しゅん}の攻^{こう}撃^{げき}をするとき以外^{い がい}は体^{からだ}も精^{せい}神^{しん}もリラックスさせている」

「ホントかあ？」

あの極限^{きょく げん}の中で、そんなことができるのか。

疑^{うたが}いの目^めをむける悟空^{ご ぐう}にベジータが続^{つづ}ける。

「ゼロからの攻^{こう}撃^{げき}は相^{あい}手^てに動^{うご}きを読^よませないし、瞬発^{しゅんぱつ}力^{りき}も大^{おお}きい。そして、スタミナも温存^{おん ぞん}できるんだ」

「そうかなあ……」

「ジレンはおそらく本^{ほん}能^{のう}でそれができると。だから、それができないオレは、まず頭^{あたま}の中^{なか}でトレーニングしている……」

ふたたび目^めを閉^とじてしまったベジータに、悟空^{ご ぐう}はうーんと首^{くび}をひねった。

やはり、にわかには信^{しん}じられない。

ジレンは圧倒^{あつ どう てき}的に強^{つよ}かった。宇宙^{う ちゅう}にはまだまだ強^{つよ}いヤツがたくさんいる。

だからもっと修業^{しゅ ぎょう}をつんで、強^{つよ}くなりたいと思うのに――

そう思^{おも}っていると、どこからかパチパチパチと拍手^{はく しゅ}の音^{おと}が聞^きこえてきた。

あたりを見^みまわすと、破壊^{は かい}神^{しん}ビルスの付^つき人^{ひと}、ウイスが上^{じょう}空^{くう}からゆっくり降^おりてくる。

「すばらしい。すばらしいですよ、ベジータさん！ よくそのことに気づ^きかれましたね」

ウイスはベジータの前^{まえ}にくると、ニッコリと笑^え顔^{がお}をむけた。

「そのとおり！ バカ^{からだ}みたいに体^{からだ}をきたえることだけがトレーニングではないんですよ」

「ふふん」

ほめられたベジータが、どうだと言わ^いんばかりに鼻^{はな}を鳴^ならす。

「気づ^きくのおそいんですけどね」

が、すかさずそうつこまれて、苦虫^{にがむし}をかみつ^かぶしたような顔^{かお}になる。

「悟空^{ごくう}さんはまだピンときてないみたいですネえ」

「う〜ん……」とうなる悟空^{ごくう}に、ウイスが「そうだ！」と笑顔^{えがお}で手^てを打^うった。

「た^おめしに御三方^{さんかた}で試合^{しあい}をやってみましょうか」

けれどその提案^{ていあん}に真^まっ先^{さき}に反対^{はんたい}したのはベジータだ。

「ブロリーもふくめてか!? ジョーダンじゃない！」

「ちっとはよくなったけど、まだときどきヤバいんだよこいつ。キレたら、こんなちっこい星^{ほし}なんてなくなっちゃうぞ」

悟空^{ごくう}もそれには同意^{どういけん}見^{けん}だ。

ウイスはちろりとブロリーを見ると、「たしかに」とうなずいた。

「では、悟空^{ごくう}さんとベジータさんだけで。ブロリーさんは、キレてはいけ^しない試合^{あい}というものがどうい^{けん}うものか見^{がく}学^{がく}してくださ
い」

「わかった」

大き^{おお}くうなずいたブロリーに、ウイスがにっこり^{わら}と笑^{わら}ったときだ。

「ふあああゝゝあ……ウイス！ オレ^{ひるね}が昼寝^{ひるね}をしてどれぐらいだ？」

うしろから大きなあくびとともに、ビルス^{おお}がや^おってきた。

「おはようございます。そうですね。地球^{ちきゅう}の時^じ間^{かん}でい^かえ^{げつ}ば、4ヶ月^{かげつ}ほどでしょうか」



「……なんだ。思ったより早く目が覚めちゃったな。やかましいし、いい匂いがしたんで」

言いながら鼻をヒクヒクと動かしていたビルスの目が、プロリーにとまる。

「だれだ、あいつ」

「プロリーさんですよ」

あっさり^つと告げられた名前^な前に、ビルス^{おお}が大きな声^{こえ}をだした。

「プロリー!? なんでそんなヤツがここにいるんだ！」

少し^{すこ}前^{まえ}、フリーザ^ちにかつがれ地球^{きゅう}で大暴れ^{おお}したことは知^しっている。

怒鳴^どるビルスに、悟空^ごが、まあまあと軽い^{かる}口調^くであいだに入^{はい}る。

「ここならぜったいにフリーザはこないだろ？ 安心^{あん}だから連れ^{しん}てきたんだ」

「勝手に連れてくるんじゃない！ ここはホテルじゃないんだ！ ……ん!?」

ふたたび大声^{おお}で怒鳴^{ごえ}ったビルスの鼻^どが、くんくん^{はな}と動いた。

ただよってきたいいい匂い^{にお}に、思わず意識^{おも}を持^いっていかれる。

ふりむくと、フライパン^もを持った小柄^こな男^{がら}が、ビクッ^{おとこ}と動きを止^{うご}めてビルス^とを見ていた。

ウイス^{おとこ}が男^{こえ}に声をかける。

「きましたね。ごあいさつなさい」

「あ……あの……、お世話^せになります」

おそろおそろおじぎをする男^{おとこ}に、ビルスはイヤそうに顔^{かお}をしかめた。

「……チツ。おまえもか——ってだれだ？」

「レモといいます。元フリーザ^{もと}軍^{ぐん}でして……」

ビクつきながら自己紹介^じをするレモ^この手元^{しょう}から、おいしそうな匂い^{かい}がただよってくる。

ビルスはごくりとツバ^のを飲^のみこんだ。

「……いい匂い^{にお}の元^{もと}はそいつか。ちょっとこい」

不安げな顔^ふでやってきたレモ^{あん}が手^{かお}にしたフライパン^ての中身^{なか}を、ビルスはさっとお玉^{たま}ですくって口^{くち}に入^いれた。

「ほう！ うまいじゃないか。おまえ、フリーザ^{ぐん}軍^{ぐん}ではなにをやったんだ？」

ビルスに料理^{りょう}を絶賛^りされたレモ^{ぜっ}は、おずおずと言葉^{こと}をつなぐ。

「雑用係^{ざつ}でしたが、ときには調理^{よう}も……」

「……よし。おまえはいてもいい」

ビルス^{まん}が満足^{ぞく}げにそう言^いったとき。

「なんだよ、ひろいだけで——おー、元氣^{げん}そうじゃん！」

プロリー^{あか}に明るく声^{こえ}をかけたのは、パンパン^{あか}にふくれた袋^{ふくろ}をかかえて歩^{ある}く、元フリーザ^{もと}軍^{ぐん}のチライ^{ぐん}だった。

袋^{ふくろ}の中^{なか}には、ビルス^{せい}星^{めす}で盗^{しな}んだたくさんの品物^{もの}がつめられている。

あまりにたくさんつめこんだせいで、前^{まえ}が見^みえていないようだ。

悟空^ごが「よう！」と声^{こえ}をかけて、プロリー^い以外^{がい}もいることに気^きがついたらしい。

「あんたたちもいたんだ。ここ、思ったよりカネ目のものがないじゃないか、ガッカリだよ！」

「チ、チライ！　だまれ……！」

あわてたレモがわって入る。

「？」

かかえた袋を横によけてチラッと見ると、知らないだれかがいることに気づいた。

むらさきいろ　からだ　た　おお　みみ　なが
紫　色　の　体　に、　ピンと　立　っ　た　大　き　な　耳。　長　い　シ　ッ　ポ　が　ゆ　れ　て　い　る。

「……………」

じっとこちらを見つめる姿に、チライはハッとした。

に　も　つ
荷　物　に　か　く　れ　る　よ　う　に　う　し　ろ　を　む　く。

「うあ！　あ、あの……その、ちょっと掃除を……」

こ　ん　ど　な　に　も　の
「今　度　は　何　者　だ」

と　ふ　く　ろ　も　て　ち　か　ら　こ
す　ど　く　問　わ　れ、　チ　ラ　イ　は　袋　を　持　つ　手　に　力　を　込　め　た。

ほ　し　ほ　し　き　し
こ　の　星　が　だ　れ　の　星　か　と　い　う　こ　と　は、　ウ　イ　ス　か　ら　聞　い　て　知　っ　て　い　た。

「チ、チライです……！　あの、あんた……いや、あなたが破壊神ビルス……さま？」

か　お
う　し　ろ　を　む　い　た　ま　ま　の　チ　ラ　イ　に、　ビ　ル　ス　は　ム　ッ　と　顔　を　し　か　め　た。

か　っ　て　ひ　と　ほ　し　か　お　み　せ　は　な　ど　き　ょう
勝　手　に　人　の　星　に　や　っ　て　き　て、　顔　も　見　せ　ず　に　背　を　む　け　て　話　す　と　は　い　い　度　胸　だ。

「そうだ」

う　ち　ゅう　も　つ　と
「宇　宙　で　最　も　お　そ　ろ　し　い　と　い　う　……」

こ　う　て　い
う　な　る　よ　う　に　肯　定　さ　れ　て、　チ　ラ　イ　は　お　そ　る　お　そ　る　ふ　り　か　え　る。

か　お　め　う　つ　た　ま　お
そ　の　顔　が　ビ　ル　ス　の　目　に　映　っ　た　と　た　ん、　ビ　ル　ス　は　お　玉　を　落　と　し　て　し　ま　っ　た。

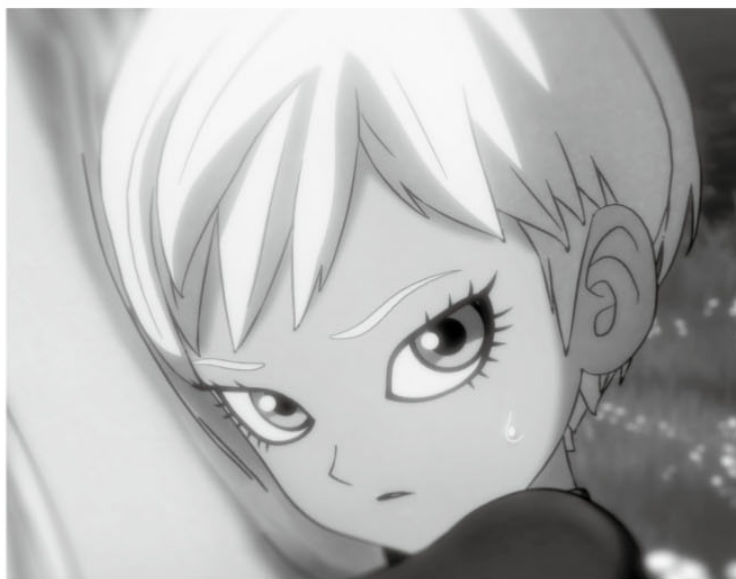
ふ　し　ぎ　か　お
ウ　イ　ス　と　レ　モ　に　不　思　議　そ　う　な　顔　を　さ　れ　る　が、　ビ　ル　ス　は　そ　れ　ど　こ　ろ　で　は　な　い。

「んが……」

ぜ　ん　し　ん　で　ん　き　は　し　ぬ
全　身　に　ビ　リ　ビ　リ　と　電　気　が　走　り、　あ　ご　が　ポ　カ　ー　ン　と　抜　け　て　し　ま　う。

ふ　し　ん　あ　と
チ　ラ　イ　が　不　審　げ　に　後　ず　さ　る。

お　お　ひ　と　み　ふ　あ　ん　み
そ　の　大　き　な　瞳　が、　不　安　そ　う　に　ビ　ル　ス　を　見　て　い　る。



が、そんな態度もなにもかも全部——

「.....かわいいな」

「「「「!?」」」」

つぶやかれた小さな台詞に、プロロー以外の全員が思わずビルスを見た。

「好きなだけいいぞ」



ビルスは、きまった、とばかりにそう^い言^{あつ}って、ふ^しと熱^{せん}い視線^{おく}をチライに送る。

「な、なんだ……あれ……」

さすがの悟空^{ご ぐう おどろ}も驚^{おどろ}きをかくせない。

なが^{なが}いつきあいのあるウイスもびっくりだ。

「……ビルスさまの^{この}好^いみ^{がい}って、意^い外^{がい}にベタ^べだ^だった^たん^んです^すねえ」

だが、あいさつと紹^{しょう}介^{かい}はひとまず^{まず}す^すんだ。

ウイスは胸^{むな}元^{もと}でパンツと手^てを打^うつと、悟^ご空^{くう}たちのほうへとむきな^きな^なお^おった。

「はいっ！ さあさあ、そんなことより、試^し合^{あい}を始^{はじ}め^めましょ！」

その宣^{せん}言^{げん}に、ビルスがつまらな^はな^なそうに鼻^{はな}を鳴^ならす。ま^まっ^きた^きく興^き味^うは^みない^いよう^うだ。

逆^{ぎやく}にうれし^{たの}そう^のな^なのはブ^ぶロ^ろリー^りだ^だった。楽^{たの}しみ^{しみ}でしか^{しか}た^たない^いと^とい^いった^た様^{よう}子^すは、おも^{おも}ち^ちや^やを前^{まえ}に^にした^{した}子^こ供^{ども}その^{その}もの。

半^{はん}面^{めん}、仏^{ぶつ}頂^{ちょう}面^{づら}だ^だがうれ^{うれ}し^しさを^をに^にじ^じま^ませ^せて^てい^いる^るの^のはベ^ベジ^ジー^ータ^タだ^だ。

悟^ご空^{くう}もわ^わく^くわ^わく^くと^とした^{した}顔^{かお}で、ベ^ベジ^ジー^ータ^タを^を見^みる。

「最^{さい}後^ごま^まで立^たっ^かて^{へん}い^{しん}ら^はれた^はほう^との^と勝^{どう}ち^ぐ。変^{へん}身^{しん}や^やか^かめ^めは^はめ^め波^なな^なの^の飛^とび^と道^{どう}具^ぐは^はな^なし^しで^です^すよ^よ。い^いい^いで^です^すね^ね」

ル^るール^るを^を説^{せつ}明^{めい}した^{した}ウ^ウイス^{イス}が^がく^くる^るり^りと^とみ^みん^んな^なを^を見^みま^まわ^わした^{した}。

い^いい^いよ^よ勝^{しょう}負^ふの^の始^{はじ}まり^りだ^だ。そ^そう^う思^{おも}った^たと^とき^き——

ぐ^ぐう^うう^うう^う……

悟^ご空^{くう}の^の腹^{はら}が^が盛^{せい}大^{だい}に^に鳴^なった^た。

「ま^まず^ずメ^めシ^しを^を食^くわ^わせ^せて^てく^くれ^れよ^よ。腹^{はら}ペ^ペツ^ツコ^コペ^ペコ^コだ^だ」

あ^あま^まり^りの^のタイ^{たい}ミ^みン^んグ^ぐに^に、チ^ちライ^{らい}と^とレ^れモ^もが^がず^ずっ^っこ^こけ^ける^る。

「や^やれ^れや^やれ^れ……サイ^{さい}ヤ^や人^{じん}っ^って^て……」

ウ^ウイス^{イス}は^は肩^{かた}を^をす^すく^くめ^めて^て息^{いき}を^をつ^つい^いた^たの^のだ^だった^た。



そのころブルマは、一生懸命に通信機をさがしていた。

「あれ～……通信機、通信機……」

自室も研究所も、どこをさがしても見あたらない。

机の下に頭をつっこみいろいろさがすが、でてくるのは関係ない資料やアイテムばかりだ。

「いたっ！ もう、どこだっけなあ……」

机に頭をぶつけながら、部屋中に散乱するアイテムを見て、ブルマは首をかしげていた。



「ベジータさんに持ってきていただいた美味しい地球の食料がなくなりましたので、味の保証はできませんが、こちらで^{よう}ご用意
させていただきます。さあ、いただきましょう」

そのころ悟空^{ご ぐう}たちは、目の前の料理^{め まえ りょう り}を手あたり次第^{て し だい}にほおばっていた。

なじみのない色^{いろ}や形^{かたち}をした食材^{しょくざい}を調理^{ちよう り}したのはもちろんレモだ。

ゆっくりとはしを口に運んだウイスは、「すばらしい！」と目^めを見開^{み ひら}いた。

「いったいなにをしたんですか!? まるで魔法^{ま ほう}ですよ、レモさん！」

「スパイスをいろいろ、ちょいと……」

ほめられたレモはうれしそうだ。

ビルスも料理^{りょう り}の^の伸びる手^てが止まらない^と。

けれど悟空^{ご ぐう}たち三人^{にん}は、いままでとなにがちがうのかわからなかった。

「おい、なにか変^かわったか？」

「全然^{ぜん ぜん}わからん」

「うが？」

目の前^{め まえ}の料理^{りょう り}をひたすら胃袋^{い ぶくろ}に流^{なが}しこんでいだけだ。



そんな三人を無視して、ビルスが大きな声で宣言した。

「気にいったぞ！ これから料理はレモが担当だ！ ウイスはクビ！」

「まあ、くやしい～」

そう言いながらも、ウイスはなんだかうれしそうにレモの料理をほおばっていた。



たいりょう りょうり た お し あい はじ
大量の料理を食べ終われば、いよいよ試合の始まりだ。

にわ ごくう いわ うえ た かる ふ
ビルスの庭へともどった悟空は、たいらな岩の上に立つと、軽くステップを踏んだ。

じゅん び ばんたん い まん ぶく はら
準備万端とでも言うように、満腹の腹をポンとたく。

たい ふる たい ぼく うえ ごくう み
対してベジータは、古い大木の上から悟空を見おろす。

よ ゆう かん かお ごくう たい せん
余裕を感じさせる顔には、ひさしぶりに悟空と対戦できるうれしさがかくしきれていない。

ごくう
それは悟空もおんなじだ。

はじ
「始めてください！」

おお うで し あい かい し せん げん
ウイスが大きく腕をふりあげ、試合開始を宣言する。

「だりゃあああゝゝゝ!!」

ごうれい どう し と ごくう
号令と同時に飛び出したのは悟空だった。

ベジータめがけてスピードをつけジャンプする。

こぶし
つきだした拳は、けれどしっかりふせがれた。

なん ど ごくう ごう げき う なが
何度もくりかえされる悟空の攻撃を、ベジータは受け流す。

いき はげ ごう ぼう
息もつかせぬ激しい攻防だ。

わら ごくう ぐう ちゅう と
ニヤリと笑った悟空は、空中でいったんうしろへ飛んだ。

「とりゃあああっ！」

ぜんでん お み ま
いきおいをつけて前転し、かかと落としをお見舞いする！

どごおおおおおおんんん！

たい ぼく ま わ
すばやくよけたベジータにかわり、大木が真つがたつに割れた。

ま ふん じん なか ごくう そら と
舞いあがる粉塵の中から、悟空が空へと飛びだしてくる。

お
そのあとをすかさずベジータが追う。

「だりゃああっ！」

お おも ごくう け
追いついたと思わせておいて、悟空はカウンターで蹴りをだした。

うま ようりょう
ベジータは馬とびの要領でひょいとキックをかわしてみせる。

「ふんっ」

「うりゃああっ！」

からだ ふ と
けれどすかさずくりだされたパンチに、ベジータの体が吹っ飛ばされた。

「くっ！」

ぐう ちゅう きゅうてい し お ごくう まえ げ
空中で急停止したベジータに、追いついた悟空が前蹴りをくりだす。

あし
だが、その足はベジータにつかまれてしまった。

じ めん な
ぐるんぐるとぶんまわされて、地面へとほうり投げられる。

「うわあああ!!」

ふ と さき き えだ
吹っ飛ばされたその先で、木の枝をつかみスピードをこらす。

ついでに反動を利用して、ふたたびベジータへとつこんでいく。

「うりゃああっ」

「ふんっ！」

くりだした拳は、ベジータのひじと激突をくりかえす！

前へ、前へとパワーで押しこむすばやいパンチが、とうとうベジータの胸にあたった。

「くっ！」

ひるんだスキを見逃さず、悟空はもう1発を顔面へ！

耐えきれずに吹っ飛ばされたベジータが、それでも楽しそうにニヤリと笑う。

戦闘を好むサイヤ人の本能だ。



「だりやあー!!」

そんなベジータへ、悟空は間髪いれずに蹴りをはなった。

いなしたベジータが、さそうように森の中へと飛んでいく。

木々のあいまをおたがい高速で飛びながら、悟空とベジータは激しい攻防をくりかえした。

組みあいながら森から上空に飛びだし、悟空が重たいパンチをベジータにはなつ！

「だりやあつ！」

「ぐっ……」

片腕でガードしたベジータの体が、じりっとうしろに押されていく。

「まだまだあ!!」

ふたたびくりだされたパンチを、今度は両腕でガードする。

だが、いきおいに押されて吹っ飛ばされて、ベジータは大木に打ちつけられた。

「ぐああつ……！」

ベジータはまだ新しい闘い方に慣れていない。

ここぞというときだけに全力を注ぐという戦法を、実戦で使うのはこれが最初だ。

力では悟空に分があることはわかっている。

だからベジータは、悟空のスタミナぎれを待っていた。

「うりやああ！」

「!？」

だが、悟空の攻撃の手はゆるまない。

まっすぐむかってきた悟空は、パンチラッシュをくりだしてきた。

「うららららっ！」

大木を背に逃げられないベジータは、重いパンチに防戦一方だ。

「調子に——」

けれど一瞬のスキをついて、ベジータは悟空の拳をとらえた。

「乗るなよ、カカロットーツ!!」

頭をあげてふりかぶると、悟空に頭突きをお見舞いしてやる。



「!!!」

ものすごい音がして、悟空が後ずさる。

ベジータは太木で反動をつけ、悟空の胸に両足蹴りをお見舞いする。

吹っ飛ばされた悟空はなんとか空中で止まるが、さっきまでより息があらくなっていた。

「なめるな!!!」

勝機を感じたベジータがつっこむ。

悟空は拳をふりかぶるが、簡単にかわしたベジータはすかさず背後にまわりこむ。そこにはなたれた裏拳もまわし蹴りも、ベジータは最小の動きでよけ続け、空いたボディにすばやい連打を打ちこんでいく。

「うがっ!!」

腹にきめられうめいた悟空に、さらにベジータのアッパーがきまった！

たまらず吹っ飛ばす悟空の様子を、ブロリーはごくりと息をのんで見つめていた。

「……わずかだが、ベジータの動きが変わったな」

うしろのソファで見あげていたビルスが、となりで正座するウイスに言った。

「トレーニングの成果でしょうかね」

「……長くなりそうだな」

目まぐるしい攻防戦に夢中のブロリーとは反対に、ビルスはつまらなそうにあくびをした。

「なにかデザートでもいただきますでしょうか」

「例えば？」

「ベジータさんが持ってきたアイスクリームがたくさんありますが」

「じゃあ、あたしが持ってきてやろ……あげましょうか」

ウイスの提案に、横で座っていたチライはさっと手をあげた。

闘いになんか興味はないし、ビルスと話すこともとくにない。

「……え？　じゃあ手伝ってやる」

けれどビルスは、スッとソファから立ちあがってしまった。

「え」

「あら……」

この星の主であるビルスにそう言われれば、チライにことわることはできない。

しかたなしにいっしょに行った厨房で、ビルスはうれしそうにシippoをふりながら、巨大な冷凍庫に頭をつっこんだ。

「アイスクリーム……アイスクリーム……お、これだ。おい、レモ」

見つけたアイスカップを大量にかかえて顔をあげると、洗い物中のレモを呼ぶ。

「あ、はい」

「皿洗いはあとでいいから、おまえもアイスクリームを食べろ」

「……ど、どうも」

とつぜんやさしい言葉^{ことば}をかけられて、レモはとまどったようにチライ^みを見た。

料理^{りょうり}係^{がかり}にこの対応^{たいおう}はどういうことだ。

けれどチライもわからないとばかりに、ピルスのうしろで肩^{かた}をすくめてみせたのだった。



「あ！ あったあった！」

ビルスがチライとアイスにご満悦^{まん えつ}だったころ。

ブルマは自分の研究室で、やっと見つけた通信機^{み つう しん き}に大きな歓声^{おお かん せい}をあげていた。

「ちゅ！ あった————！」

通信機^{つう しん き}にキスをして、ブルマはさっそく呼びだしボタンをタップする。

これでようやくウイスに連絡^{れん らく と}を取ることができる。

けれども、ビルスの星^{ほし}ではそんなこととはつゆしらず。

庭先^{にわ さき}に運んだアイス^{はこ}を、ビルスがもりもりと食べていた。

すでにうしろには、空^{から}になったアイスカップが山^{やま}とつまれている。

「ブローリー、おまえも食べろ^た」

「……………」

ビルスの言葉は、熱心^{こと ば}に見入っているブローリーには聞こえないようだ。

悟空^{ご くう}とベジータ^{はげ}の激しい闘い^{たたか}は、延々^{えん えん}とくりひろげられている。

高速^{こう そく}で移動した悟空^{い どう}がベジータ^{ご くう}の背後^{はい ご}にまわり、バックドロップの体勢^{たい せい}を取ると、そのまま湖^{みずうみ}にむかって落ちてくる。

「どりゃあゝゝゝ！」

大きな水柱^{おお みずばしら}と波^{なみ}があがった。

どっばああああああああん！

豪雨^{ごう う}のように水しぶき^{みず お}が落ちてくる。

「うわっ!？」

思わず頭^{おも}をかかえたチライに、ビルスは「ふん」とつぶやくと、指^{ゆび}をパチンと鳴らした。

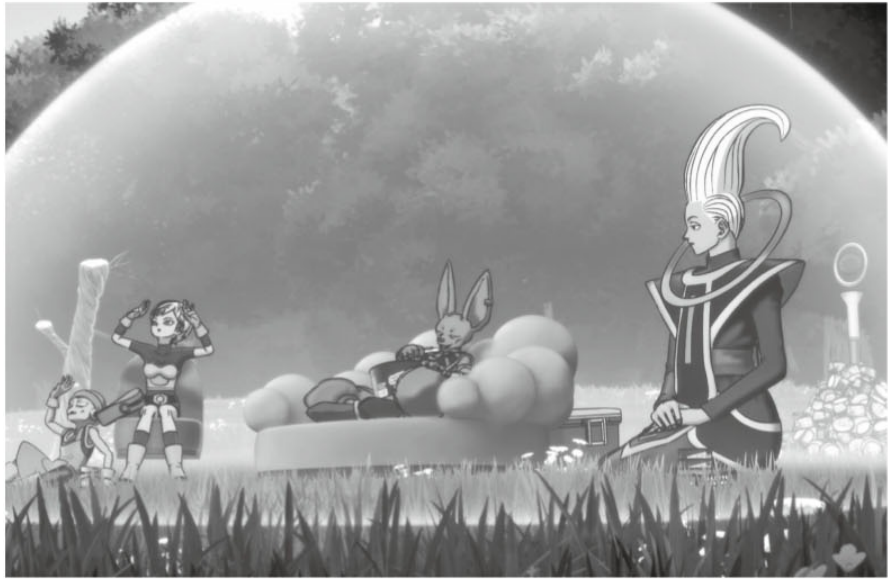
とたんに、バリアの幕^{まく}ができる。

「あらあら」

バリアからはずれてしまったブローリーだけはびしょぬれだが、瞬^{まばた}きもしないほど戦闘^{せん どう}に釘づけ^{くぎ}なので問題^{もん だい}はない。

ウイスはにっこりとビルスにほほえんだ。

「ビルスさま、おやさしいんですね。もしかして、だれかさん^{い しき}を意識^{い しき}して……」



チラリと視線をむけた先では、レモとチライが驚いて呆然としている。

図星をさされたビルスは、ごまかすようにアイスを一気にほおばった。

「だまって食べろ！ んが！」

食べおえたカップを、またうしろにほうり投げる。

空のカップの山のそばに、ウイスは杖を立てていた。

その杖の頭についた玉が、ブルマからの通信を受けてチカチカと点滅を始めた瞬間——

カラン、とビルスの投げたカップがかくすようにかぶさった。

「ウイスさん！ ウイスさん!!」

地球で何度も通信を送っているブルマは、そんな事情を知るよしもない。

「……もお！ なんでちっともでないのよー！」

ブルマの叫びは、だれにもとどくことはなかったのだった。

その
5

いでよ
神龍^{シエンロン}



いっ ぼう
一方、そのころカリン塔では。

「……なるほど、そんなことが……気がつきませんでした」

ピッコロから話を聞いたカリン様が、仙豆のに入った袋をさぐっていた。

「ありや〜。すみません、いまは2粒しか……」

「2粒か……、それでいい、すまん」

もうしわけなさそうにさしだされた仙豆を、ピッコロはありがたく受け取る。

「神様、お気をつけて」

「もう神じゃない」

「そうでした……」

すかさず指摘したピッコロのポケットで、スマホのバイブが鳴った。

ハツとしてつまみあげると、画面にブルマが映っていた。

「ブルマか！ どうだ、連絡はしてくれたか」

「それがさあ、何度連絡してもでてくれないのよー。もう少し続けてみるけどさあ」

「……そうか、すまん。そうしてくれ」

不満げなブルマに礼を言ってスマホをきる。

期待した応援は、もう少し先になりそうだ。

肩を落とすピッコロに、カリン様が心配そうに声をかけてきた。

「連絡が取れませんか……」

「ああ。悟空とベジータ抜きはキツイな。闘った感じだと、あのガンマという人造人間たちの実力は、あの二人にも匹敵しそうだ……」

「そいつはマズいですな……」

思わず言葉を失ってしまったカリン様は、ふと思いついて顔をあげた。

「孫悟飯は？ いつかあなたが言っておられたじゃないですか。あいつは、その気になれば地球にいるだれよりも強いんじゃないと」

「……いまのあいつはあてにならない」

「そうですか……」

いらだたしげな様子に、カリン様の耳とシッポもうなだれる。

「17号と18号は、ドクター・ヘドのデータで弱点を知られているかもしれん。そして魔人ブウは休眠期に入ってしまったている……」

「ということは……」

カリン様がごくりとのどを鳴らした。

ピッコロも、自分の言葉でいろいろ気づいてしまったらしい。

思わずがくりとしゃがみこむ。

「なんてことだ……オレがなんとかしないと……」

うつむいたまま考えて、

「そうだ！」

ひらめいた可能性に顔をあげ、ピッコロはカリン塔から飛び出した。

むかった先は、カリン塔のはるか上にある神様の神殿だ。

「ピッコロさん！」

うれしそうに駆けよってきたのは、地球の神になったデンデだ。

「デンデ！ 事情はわかっているか!?」

「はい、上から見ていました！ 大変なことに……でも僕にはなにもできませんが……」

心配そうに言うデンデに、ピッコロは自分の考えを伝える。

「以前、ナメック星で、クリリンと悟飯が最長老様に潜在能力を引きだしてもらったと聞いたが」

「はい、僕も見ていました」

「このオレにやってくれ」

「え？ ……僕がですか？」

驚くデンデにうなずいて、ピッコロはその場にドカッと腰をおろした。

「ああ、そうだ。おまえは最長老様と同じタイプのナメック星人だ。できるはずだ！」

デンデはナメック星人の中でもめずらしい、龍族タイプ。最長老様と同じ力があるはずだ。

だが、デンデはもうしわけなさそうにうつむいた。

「……残念ですが、あの能力はある程度の年齢にならないとできないんです」

「な、なんだと……」

絶望の表情でうめくピッコロに、デンデがぽんと手を打った。

「そうだ！ ドラゴンボールの力を借りては？」

「ドラゴンボール？」

「レッドリボン軍を消してくれと願えば」

明るい表情をむけられて、ピッコロはむうっと顔をしかめる。

その態度で、デンデには察しがついてしまった。

「……それはプライドが許さないようですね。では、最長老様のように、神龍にピッコロさんの潜在能力を引きだしてもらえば——」

「できるのか！ 神龍にもそんなことが」

新たな可能性に、ピッコロがいきおいよく立ちあがる。

「アップグレードすれば、たぶん……」

「アップグレード？」

「ほら、かなえられる願いも、ひとつから3つになったでしょ？ あれと同じですよ。ちょっとお待ちください」

そう言って、デンデは神龍の置物が入ったガラスドームを持ってきた。

トレーの上には、液体の入った瓶もある。

デンドは瓶の栓をきゅぽんと抜くと、ガラスドームの上から液体をかけた。



「！」

見るまに神龍の像がまばゆい光をはなち、渦を巻いたような形にかわる。

「……はい。これで神龍のアップグレードができたと思います」

誇らしげなデンデにそう言われ、ピッコロはただただ感心してしまった。

「オレも神だったが、知らなかったな……」

「あなたはずいぶん昔に地球にきていますからね」

そう言われれば、たしかにそうだ。

神龍のことは、まだまだ知らないことがあるのかもしれない。

デンデの言葉にうなずきながら、ピッコロはむずかしい顔で腕を組んだ。

これで神龍に自分の潜在能力を引きだしてもらうことはできそうだ。

けれど、そのためには神龍を呼びだすドラゴンボールが必要だ。

「しかし、ドラゴンボールを集める時間があるかな……」

「いまでしたら、ちょうどブルマさんが7個すべてを持っていると思います。ここ何年かは、ブルマさんが人手を使ってボールを集め、良からぬことにドラゴンボールを使われないうちに、あえてどうでもいい願いをかなえてもらっているようですから」

「……あえて願いをかなえることもないだろうに」

ただ保管していればよさそうなものだが、ブルマの考えはよくわからない。

いぶかしむピッコロに、デンデが「ほら」と話を続ける。

「少し前にフリーザ軍に盗まれてしまったことがあったじゃないですか」

それはまさに、いまビルス星にいるはずのプロリーとの闘いのときの話だ。

「願いをかなえてドラゴンボールをまた散り散りに」

「なるほど、しかしそれはラッキーだったな」

ドラゴンボールをそろえてくれているなら、これほど手間のはぶけることはない。

ピッコロはすぐさまスマホをつまみあげると、ブルマに電話をかけた。

「ブルマ！」

「はいはい、聞こえてるわよ」

「どうだ、連絡は？」

「それがまだ取れないのよ～」

画面に映るブルマはむすっとくちびるをとがらせる。

悟空たちに連絡がつかないというのなら、やはりドラゴンボールにたよるしかない。

「……ブルマ、もしかしてドラゴンボールを持っているか？」

「ドラゴンボール？ 持っているわよ。ちょうど7個全部」

「よし！ せっかく集めたのに悪いが、今回はオレにゆずってくれないか？」

「え～」

ふ ふく こえ き か
不服そうなブルマの声を聞きながら、ピッコロは駆けだした。

て め が お わ か つ し ん で ん ち じ ょ う
手をふるデンドに目顔で別れを告げて、神殿から地上にむかってダイブする。

「たのむ。どうせ、どうでもいい願^{ねが}いをかなえているんだろ？」

「どうでもいいことなんかじゃないわよ！ まあ、ピッコロのたのみならしょうがないけど」

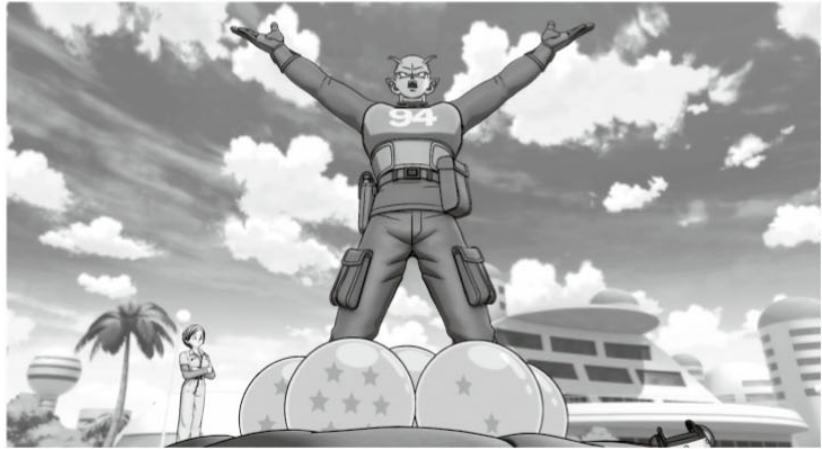
「すまん、すぐにそっちに行く！ 庭で待っていてくれ」



もう
猛スピードでむかった先は西の都のカプセルコーポレーション。

たどりつくなり、ピッコロは庭先にならべられたドラゴンボールに両手をかけた。

「いでよ、神龍。そして願いをかなえたまえ！」



ピッコロの言葉に呼応して、ドラゴンボールが光をおびはじめる。

晴天だった頭上の空が、そこだけ墨をはいたような分厚い雲におおわれた。

やがてドラゴンボールは燦然とかがやきを増して、神々しい光のすじが天にのぼる。

その光が天に吸いこまれていくと同時に、激しい落雷があたりをひびいた。

濃い雲におおわれた空に浮かびあがったのは、神龍の姿だ。

『さあ願いを言え。どんな願いも……あ！ ピッコロ様!?』

おごそかな声で話しはじめた神龍が、ピッコロに気づく。

驚く神龍にむかってピッコロが叫んだ。

「神龍!! ナメック星の亡くなられた最長老様のように、オレの潜在能力をめいっぱい引きだすことはできるか？」

『……ええ、もちろん。それがひとつ目の願いですか？』

「ああそうだ、やってくれ」

いどむように見あげていると、神龍は長い体躯で空に弧をえがくように旋回を始めた。



み じ ぶん なか つよ ちから かん
見つめるピッコロは、自分の中から強い力があふれでてくるのを感じた。

ねむ ちから かく せい
眠っていた力が覚醒していくのがわかる。

「こ、これは……!! オレの力は……これほどまで……」

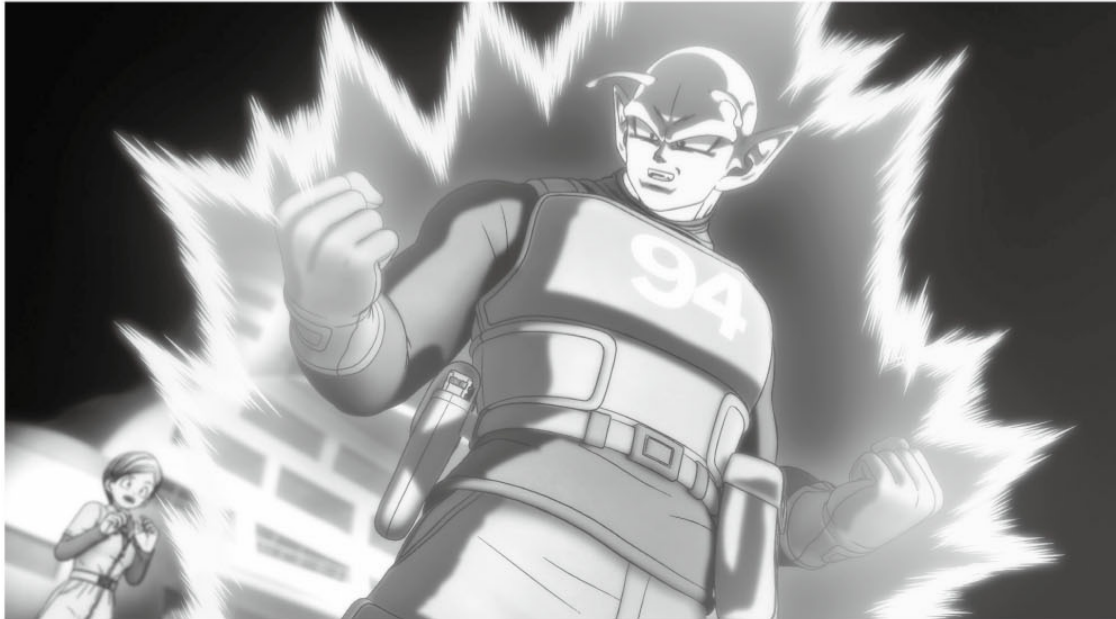
シェン ロン ちい
神龍がクイツと小さくあごをあげる。

すこ
『少しオマケをしておきました』

み まえ シェン ロン かがみ しゅつげん
いぶかしげに見あげたピッコロの前に、神龍は鏡を出現させた。

みどりいろ からだ すこ き いろ み
緑色の体が少し黄色味をおび、かがやかしいオーラをはなっている。

へん か じ ぶん からだ かく にん わら
変化した自分の体を確認し、ピッコロはニヤリと笑った。



『では、あとふたつの願^{ねが}いをどうぞ』

「オレはもういい」

「え、そうなの？ それだけ？」

気^きをおさめていつもの緑^{みどり}色^{いろ}の体^{からだ}にもどったピッコロのうしろから、ブルマの驚^{おどろ}く声^{こえ}がする。

「じゃあ、あとふたつは私^{わたし}がつか^{つか}使^{つか}っちゃっていい？」

「ああ、当^{とう}然^{ぜん}だ。かまわない」

もともとドラゴンボールを集^{あつ}めたのはブルマだ。

うなずくピッコロに、ブルマは「うふふふ≡」と喜^{よろこ}んだ。

「じゃあ、おしりをもうちょっとキュッてあげてもらおうかな。若^{わか}い女^{おんな}の子^こみたい」



「……え？」

しり？ しりと言ったのか、いま？

ブルマの^{ねが}願いに、ピッコロは^わ我が^{みみ}耳を疑った。

『たやすい^{ねが}願いだ。はい、かなえた』

「じゃあ3つ目は、またお肌の^め小じわを^{はだ}自然な^こ感じで^し取って^{ぜん}いただ^{かん}こうかしら」

「ちょ、ちょっと^ま待った！」

やはり^き聞きまちがいでなかったようだ。

どうでもいいような^{ねが}願いを^{シエンロン}神龍にかなえさせたブルマを^{おも}思わず^み見つめる。

「そんなことに……ほかにもつとなにか……」

「そんなことで^{わる}悪かったわね！　じゃあ、まつ毛を^げ2ミリぐらい^{なが}長くしてもらおうかな」

『かなえた』

まるで^{てい}ちがいの^どわからない^{へん}程度^かの変化に、ブルマは^し至極^{ごく}満足^{まん}そうだ。

^{きょう}驚愕^{がく}の^{ひょうじよう}表情をむけるピッコロのことは、まったく^き気にならないらしい。

『ではピッコロ様、さらばです』

^{ねが}願いをかなえ終わった^お神龍^{シエンロン}は^{こえ}おごそかな^い声でそう言うと、ふたたびドラゴンボールへと^す吸いこまれていく。^{そら}空高くのぼったドラゴンボールは、また^せ世界各地へと^{かい}飛び^{かく}散^ちっていった。

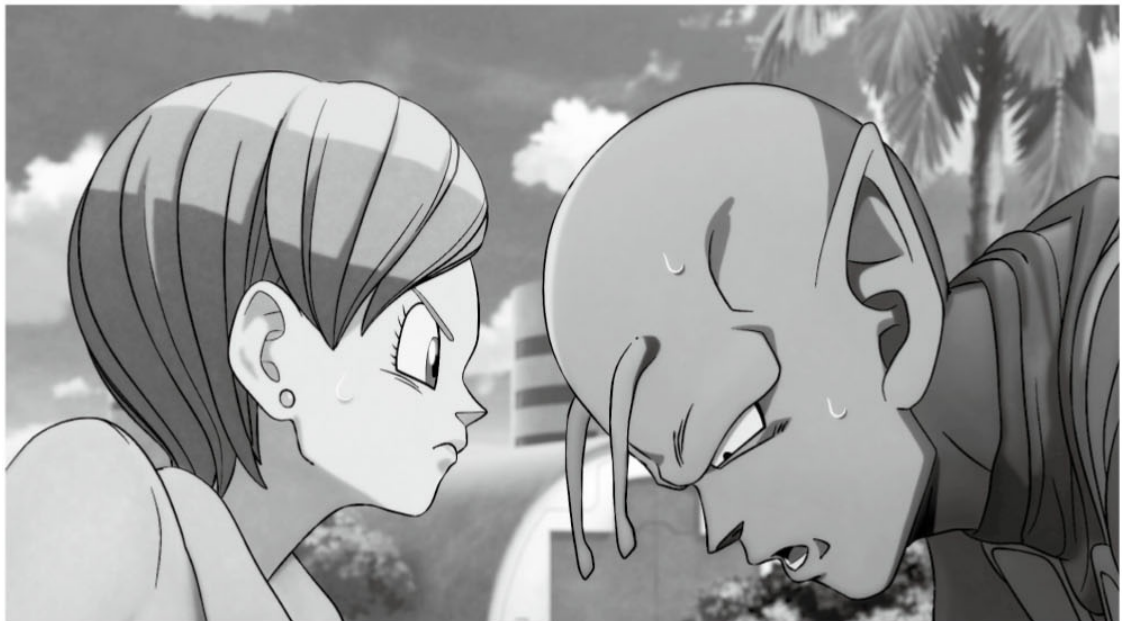
^{そら}空はふたたび^{あお}青空^{ぞら}にもどる。

「……い、いつも^{ねが}願いは、^{かん}あんな感じなのか」

^{わる}「悪い？」

^と問われたブルマは、じろりとピッコロをにらみつけ、

「い、いや、別に^{べつ}自由^じだが……」



「あゝゝっ!! しまったゝゝゝっ!!」

それからとつぜん^{おお ぐえ}大声をだした。

「な、なんだ！」

驚^{おどろ}くピッコロをじつと^み見つめる。

「ベジータたちを^よ呼びもどしてって、たのめばよかったんじゃない……」

「……あ！」

自分の^{じ ぶん}潜在能力^{せんざい のうりょく}を解放^{かいほう}することに夢中^{む ちゅう}で、その願^{ねが}いを考^{かんが}えつかなかった。

いまさら後悔^{こう かい}がやってくる。

「おまえのしりが^{すこ}少しだけあがったせいで！」

「なによ！ あんただって^{おも}思いつかなかったじゃない！」

責任^{せき にん}のなすりつけあいになってしまったが、ブルマの言^いいぶんはもっともだ。

「……オ、オレは、ふたたび^{せん にゅう}潜入してなんとかしてみる」

ピッコロはしおれたようになだれて、もう一度^{いち ど}レッドリボン軍^{ぐん き ち}の基地にもどることにしたのだった。

その

6

パン

誘拐ゆうかいされる



ピッコロはふたたびレッドリボン軍の基地に潜入すると、整列する兵士たちの列にもどった。
「次のターゲットは、孫悟空かベジータというのはどうだ。敵に対策を練られないうちに、一気にボスクラスをつぶしておくんだ」

マゼンタが新たな作戦を立てている。しかしその提案には、カーマインが首を横にふった。
「スパイによると、現在その二人は居場所がつかめないようです」
「ちい。では、裏切り者の17号か18号にするか、それとも、真の力を見せない不気味なミスター・サタンか……」

二人の作戦などまるで興味なさそうに、ヘドはクッキーを食べ牛乳を飲んでいる。
もどってきたピッコロに気づいた79番の兵士が、小聲で話しかけてきた。

「どこ行ってたんだ？」
「あ……ちょっとお腹痛くてトイレに……」
「とっさにウソをつく。が、79番は心配そうな顔をむけた。
「え、だいじょうぶか？ 顔色悪いぞ？」
「え、いや……。だ、だいじょうぶです！」
「……ガマンできなかつたらすぐ言えよ？」
「は、はい……」

ピッコロはいっとアイシールドをおろし、緑色の顔をかくす。
悪の組織の兵士から、本気で心配されてしまった。
そんなピッコロたちを気にもとめず、カーマインが新たな提案をだした。
「孫悟空の息子の孫悟飯というのはどうでしょう？ 生物学者のフリをしています、スパイカメラによればその昔、子供でありながらセルを倒したというおそろしい存在。ピッコロが頻繁にヤツのアジトに出入りしていたところを見ても、悟飯がかけのボスの可能性も」

いつのまに撮られていたのだろう。
モニターに、今朝悟飯の家をおとずれたときのピッコロの画像が映っている。
「いまのうちにつぶしておかないと、やっかいなことになるかもしれません」
「なるほど……しかし世間的にはセルマックスが完成するまで、軍の存在は知られたくない。街での騒動は避けねばならん」
葉巻をふかしながら、マゼンタがむずかしそうに顔をしかめた。

ヘドとはいえば、あいかわらずクッキーに夢中だ。おてつだいロボが、追加のクッキーを持ってくる。
「むずかしいですね……ヤツはめったにアジトからでてこない……」

うなるカーマインに、マゼンタはにやりと下卑た笑顔をむけた。
「それではここで闘ってもらおうか」
「ここで？」

「孫悟飯にはたしか、幼稚園にかよう娘がいたはずだ。そいつを誘拐して、悟飯ひとりをここへおびきよせればいい。ガンマの闘いぶりをこの目で見るのもおもしろそうぞ」
マゼンタの提案に、ピッコロがぴくりと顔をしかめる。



「なるほど、それは兵士たちの士気もあがるかもしれませんね」

カーマインも賛同する。だが、ヘドは気に入らなかったようだ。

クッキーを持ったまま、ムツとしたようにマゼンタをにらむ。

「敵とはいえ、その子供を誘拐というのは感心しないね」

けれどマゼンタは煙をはきながら、じろりとヘドをにらみかえした。

「……科学者がよけいな口だしはしないでもらおう。オイ」

言うなり、とつぜん3番の兵士に声をかける。

「は、はい！」

声をかけられた3番は、あわてて一歩前にでる。

「二人ほど使って、孫悟飯の娘を誘拐して連れてこさせろ」

「了解しました！ 15番、いけるな？」

マゼンタにピシッと敬礼で返し、大柄な15番に指示をだす。

すかさずピッコロも一歩前にでた。

「それならオレも行かせてください」

「なんだおまえは。勝手に口をはさむんじゃない！」

けれどすぐに注意され、あわてて理由をつけくわえる。

「オ、オレはたまたま……その孫悟飯の家の近くに住んでいて、その娘を見たことがあります」

「見たことが？ おかしいな……なぜ孫悟飯の娘のことを知ってるんだ？」

「え？ あ、あの……」

しまった。そんなところまでつっこまれるとは考えていなかった。

ピッコロは頭をめぐらせて、ハツと思いつく。

「！ そ、その娘は有名なミスター・サタンの孫でもあるからです！」

ピシッと敬礼をしてもっともらしくそう言うと、3番は納得したようだ。

「なるほど……だが人選は私がする。94番といえばまだ新人だ。おまえはだまって見張りを続けていろ」

だが、マゼンタが煙をはきながら3番に言った。

「いや、顔を知っているなら好都合じゃないか。行かせてやれ」

「……はい、わかりました」

総帥直々の命令に3番が敬礼で返し、作戦はすぐに動きだした。



15番とピッコロの二人は、小型飛行機でパンのいる幼稚園へとむかっていた。

さて、これからどうするか——そう考えていたピッコロは、ハッと目を見開いた。

（そうか……これはもしかしたら、悟飯を覚醒させるいい機会かもしれんぞ……！）

地球のピンチには動かなくても、娘のピンチにはさすがの悟飯も動くはずだ。

マスクの下でニヤリと笑ったピッコロに、操縦席から15番が声をかけた。

「おまえ無口だな。緊張してるのか？」

ピッコロはあわててごまかした。

「あ、はい……あの、どうやって誘拐しますか？」



「そろそろ幼稚園が終わる時間だ。たぶん母親がだれかが迎えにくるだろう。移動中に適当なチャンスをねらって、母親もろとも誘拐すればいい」

ニヤッと笑う15番に、ピッコロは静かにうつむいた。

これがパンに対してでなかったとしても、いけすかない計画だ。

だまるピッコロを不審に思ったのか、15番がチラリと目をむける。

「……79番に聞いたぞ」

「え？」

気づかうように目をそらされ、

「もうすぐつくから、うんこもらすなよ」

「……う、うん、こ……」

ピッコロはさらに無言になるしかなかった。

そんなピッコロを乗せて、15番は幼稚園のすぐそばの路上に飛行機をとめた。

幼稚園をかこむ塀から、そっと中をのぞきこむ。15番の予想どおり、幼稚園はちょうど帰りの時間らしい。お迎えがきた園児から、次々と園を去っていく。

とりのこされたパンは、さみしそうな表情でうつむいていた。

パンの今日の迎えはピッコロだ。

そのピッコロがここにいるせいで、パンにあんな顔をさせてしまっている。

「あの娘か？」

「……はい」

なんともいえない気持ちでうなずくと、15番が立ちあがった。

「ほかの園児はもういないな……よし、母親はきていないが、さっさと誘拐してしまおう」

「なっ!？」

「ガキひとりくらいワケないだろう」

驚くピッコロをよそに、スタスタと園内に入っていく。

「ママ、もうすぐくと思うよ？」

先生がパンにやさしく声をかけた。

——と、15番はわりこむように、猫なで声で話しかけた。

「パンちゃ～ん、おそくなってゴメンね～！ オジちゃんはママにお迎えをたのまれたんだよ～。さあ、いっしょに帰ろうか。先生にサヨナラをいっ——」

「たあーっ」

ドゴッ！

ずいっと手をさしだした15番の腹に、パンのするどいパンチがきまった。



(!! マズイ！)

あわてるピッコロをよそに、15番が前のめりに倒れこむ。

パンの一撃で気を失ってしまったらしい。

「ま、まあ！ どうしたの!？」

「こんなひと、知らないもん」

驚く先生を見あげたパンは、くちびるをとがらせて主張する。

ピッコロがあわてて飛びだすと、パンはすぐさま身構えた。

が、すぐにかまえを解いて、きょんとした顔になる。

「あれ？ ピッコロさん？」

「！ ほう、よくわかったな」

変装を見抜いたパンに感心する。

パンは当然だと言わんばかりに、ピッコロをまっすぐ見あげて言った。

「わかるよ。かんたんじゃん。だってピッコロさんの気だもん」

「ふっ。さすがだな」

「あら！ じゃあそちら、ピッコロさんのお知りあいでしたの？」

何度も迎えにきているピッコロだとわかり、先生もホッとしたようだ。

「驚かせてすまない。これは訓練だったんだ。ほら、大金持ちのミスター・サタンの孫だし」

「あら、そうでしたの。よかった～」

安心させるように説明して、パンといっしょに幼稚園をあとにする。

気絶した15番は肩にかついで道路にでると、ひどい渋滞になっていた。

「だめだよ。こんなところにとめちゃあ」

「ああ、早くでないと」

パンの純粋でまっとうな意見には同意しかない。

ピッコロはジャンプしてやじ馬をとびこえ、タラップの前に立った。

「これ、だれの飛行機？」

続いたパンが聞いた。

「レッドリボン軍という悪いヤツらのだ。パンはうしろに乗ってくれ」

「どういうこと？」

「飛んだら話す。一応手錠をするが、こんなのいつでもはずせるだろう？」

ポケットから手錠をだして見せると、パンがニヤッと得意げに笑った。

「らくしよだよ」

レッドリボン軍が誘拐用に用意したものだが、パンに通用するわけがない。

けれど敵をあざむくためには必要なものだ。

き ぜつ ばん こう ぶ ざ せき ひ こう き じょうしやう
気絶した15番を後部座席にほうりこむと、ピッコロは飛行機を上昇させる。

ひ こう き
が、飛行機はすぐになぐんとかたむいた。

よ だ こう おく じやう かん ばん
ふらふらと酔っぱらいのように蛇行して、ビルの屋上の看板をつきやぶる。

「ピッコロさん、そうじゆうヘタだね」

にが て
「こういうのは苦手なんだ」

ひ こう き き かい とく い
スマホといい、飛行機といい、機械はあまり得意ではない。

そう じゆう かん も うん てん み の
操縦桿をつまむように持ってフラフラと運転していると、パンが身を乗りだしてきた。

「それで？」

じん ぞう にん げん ぐん わる そ しき せんにゆう せ かい せい ふく
「ああ。オレはあるおそろしい人造人間のあとをつけて、レッドリボン軍という悪い組織に潜入した。そこで世界征服のために
じゃ ま われ われ け けい かく し
邪魔な我々を消す計画を知ったんだ」

「せんにゆう？」

ごし そう じゆう つづ くび
へっぴり腰で操縦を続けるピッコロに、パンがこてんと首をかしげる。

さい すこ こと ば つか
3歳のパンには少しむずかしい言葉を使ってしまった。

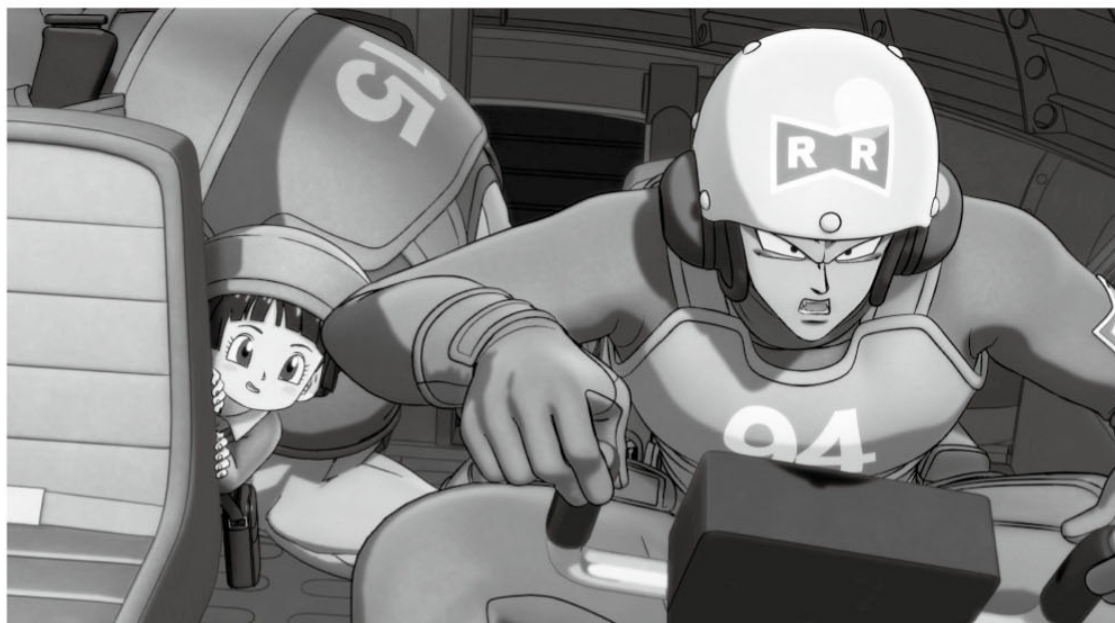
なか ま よう す さぐ
「こっそり仲間のフリをして様子を探ることだ」

「あ、それでそんなかっこうなんだ」

い なっ とく
わかりやすく言いかえてやると、パンは納得したようだ。

「ああ。それでヤツらはまず、おまえのパパをおびきよせて倒すために、誘拐しようとしたワケだ」

「ヘー。でもおもしろそう！」



「なめるんじゃないぞ。ほんとにヤバイヤツらだ」

パンはゲームのように感じているのかもしれない。

ピッコロは声に真剣さをにじませた。

「パンは誘拐されて怖がっているフリをするんだ。オレが守ってやるから心配しなくていい」

けれど、必要以上に怖がらせたいわけじゃない。

安心させるように笑いかけると、パンもにこりとほほえんだ。

それから、うーん、と考えるように上を見る。

「でもパパ、いそがしいみたいだし、きてくれるかなあ」

「あたりまえだ！ これでこないようだったら、オレが半殺しにしてやる」

ピッコロの声音が、思わずきつくなる。

そのときだった。

「う、うう……イテテテ……」

15番が目を覚ましたようだ。

すかさず目配せしてやると、パンは自分で手錠をかけた。

そして、誘拐されておびえている子供のフリをする。

「たすけて～、こわいよ～……」

ハッとした15番を見ると、パイプに手錠でつながれたパンの姿が目に入った。

「目が覚めましたか？」

ピッコロが操縦席から声をかける。

「お、おまえがやったのか……？」

「はい」

うなずくピッコロに、15番はずいっと顔を近づけた。

「……みんなにはだまっとけよ」

「え？」

「ガキに、やられたことだ……っ」

「……わかりました」

必死に威圧してくる15番にうなずいてやる。

さっきまで泣きまねをしていたパンは、おもしろそうに笑いながらピッコロを見ていた。



基地にもどると、パンはメインタワーにある牢屋がならぶろうかの奥へ連れていかれた。

つきあたりにあるドアをあけ、部屋の中央に置かれたイスにほうり投げられる。

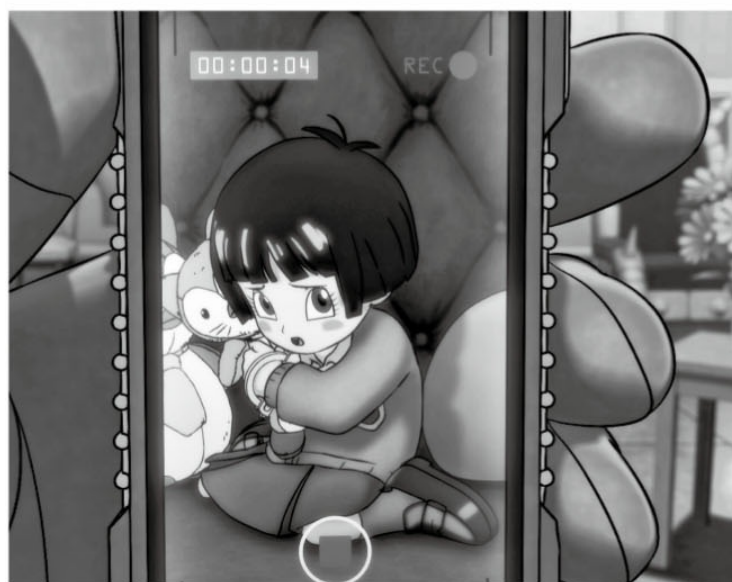
「うわっ！」

乱暴なあつかいに一瞬ムツとしたパンだが、15番にスマホをむけられ、ピッコロに言われたことを思いだした。

——怖がっているフリをする。

「パパ、こわいよ～、たすけて～」

イスに置かれたペネンコのヌイグルミを抱きしめて、上目づかいでカメラを見つめる。



「^{さつ えい}撮影しました」

^{ばん}15番が^いそう言^{おや ゆび た}うと、うしろでピッコロがそつと親指を立ててみせた。

それに^き気づかず、カーマインは満足^{まん ぞく}そうにリーゼントをくしでとかしながら^い言^いった。

「よし、それを^{そん こ はん み}孫悟飯に見せて、ここに^つ連れてくるんだ」

「わかりました」

きょろと室内を見まわしたパンは、テーブルの^{うえ お}上に置かれたクッキーに^き気がついた。

立ちあがり、^た食べようと手^てを伸ばす——が、カーマインがさつと皿^{さら}ごと^と取りあげた。

「おいおいおい、おまえにやるお菓子^{か し}じゃない。調子^{ちょう し}にのるな」

「……………」

むすっとほっぺたをふくらませたパンに、ピッコロはあわてて^{あい ず おく}合図を送った。

^{おこ}怒^てって手錠^{て じょう こわ}を壊さないよう、おさえるようにとジェスチャーでしめす。

「おい^{ばん}94番」

そんなピッコロに、^{ばん こえ}3番が声^{こえ}をかけてきた。

「え？ あ、はい」

「おまえ、もう^{いち ど い}一度行^いってこい。あのあたりにくわしそうだ」

「わ、わかりました」

にらみあうパンとカーマインに若干の不安を感じながらも、ピッコロは^{じゃっかん ふ あん かん}今度は^{こん ど}悟飯^{ご はん}の家^{いえ}へとむかうことになった。同行者^{どう こう しゃ}はさっきと同じ^{おな}15番^{ばん}だ。



到着するなり、15番は正面玄関のチャイムを鳴らした。

「ムダですよ。こっちです」

それを止め、ピッコロはさっさと悟飯のいる研究室のほうへと案内する。

部屋の窓から中をのぞけば、ピッコロに変えられたかっこのまま、真剣な顔でパソコンに打ちこんでいる悟飯が見える。

窓をキッとひかくと、悟飯が気づいて顔をあげた。

「なんですか？ あなたたち……」

不審そうな表情で窓をあけた悟飯に、15番が問いかける。

「孫悟飯か？」

「はい、そうですが……」

「な、なんだ？ そのみょうなかっことは」

「え？ ああ、これ？ いろいろあって——」

マント姿をつっこまれ、照れくさそうに話す悟飯に、ピッコロはいらだっていた。

（……オレに気づいてない……なんてことだ！ パンでさえすぐに気づいたのに……）

こんな体たらくで、はたしてパンの窮地に本気になったりできるのだろうか。

と、15番が腰のホルスターから銃を抜いた。

「死にたくなかったら、オレたちについてきてもらおう」

カチャリと銃口をむけられた悟飯は一瞬だけ反応したが、すぐに窓に手を伸ばす。

「いまいそがしいんですよ」

窓をしめながらそう言う悟飯に、15番が窓をおさえて銃口をつきつける。

「おまえ、こいつが見えないのか!? ——あ！」

だが、目にもとまらぬ速さで悟飯は銃を指ではじいた。

くだらないことはごめんだとでも言いたげに、忠告する。

「帰ってください。警察呼びますよ」

「クッ……！」

力の差は歴然だ。実力行使はできそうにない。

悟った15番は、すぐにポケットからスマホをだした。

「こ、これを見ろ！」

『パパ、こわいよ～、たすけて～』

流されたのは、先ほど基地内で撮った動画だ。

おびえたようにヌイグルミを抱きしめるパンの姿に、悟飯が前のめりになる。

「パン！」

「そういうことだ。娘はあずかっている。悲しい目にいたくなかったら、おとなしくついてくるんだな」

あわてる悟飯の姿に安心して、15番ははじかれた銃をさがしにいった。

これでおとなしく基地までついてくるはずだ。

が、悟飯はわなわなとふるえだすと、手元の窓枠をバキッと壊した。

バツと外へと飛び出した悟飯は、地面に転がる15番の銃をいきおいまかせに踏みつぶす。

「！」

「うおおおお!!」

気合いとともに、金色のオーラが一瞬で悟飯の体をつつみこんだ。

悟飯が超サイヤ人になったのだ。

爆発する気におされ、15番がしりもちをついて後ずさる。



悟飯^{ごはん}の怒^{いか}りをあらわすように、地面^{じめん}がドゴツとへこみ、家^{いえ}がかたむいてしまった。

「パンになにをした!!」

「ひいいい!!」

おそろしいほどの悟飯^{ごはん}のいきおいに、15番^{ばん}は叫^{さけ}びながら土下座^{どげざ}する。

「だ、だいじょうぶです！ まだ、な、なにしちやいません!! あ、あの……ついてきてもらえますか？」

「いそげ!! パンになにかあったらタダじゃすまないからな！」

「は、はい!!」

いつもの学者然^{がくしゃぜん}としておだやかな悟飯^{ごはん}とはまるでちがう。

(よーし……いいぞ!!)

その様子^{ようす}に、ピッコロはニヤリと笑^{わら}ってグツと拳^{こぶし}をにぎったのだった。

その
★7

倒す^たべき敵^てはだれだ



ごはん どうちゃく ま ひ みつ き ち しょうくう おも くら くも た
悟飯の到着を待つ秘密基地の上空には、重く暗い雲が垂れこめていた。

ふ あめ はげ ごう う か
いつからか降りはじめた雨が、激しく豪雨に変わっていく。

て しょう じょうかい つ
手錠をかけられたパンは、メインタワーの上階にあるテラスへと連れだされていた。

した ひろ ば ごはん ま
マゼンタやカーマイン、それにヘドは、下の広場で悟飯がくるのを待ちわびている。

「まもなくやってきます！」

む せん へい こえ どう じ しょうくう ひ こう き き
無線兵の声がとどくのと同時に、パンも上空の飛行機に気づいた。

か き ない み ごはん ど き
フェンスに駆けよったパンを機内から見つけ、悟飯の怒気がふくれあがる。

「あそこか！」

ドオン!!

い ひ こう き しょう ぶ ばく はつ と
言うなり、飛行機の上部を爆発させ飛びだしてきた。



ピッコロは^{き ぜつ}気絶した15番をかかえ、^{ばん}気づかれぬように^き飛行機から脱出する。

^{ひろ ば}広場にいるマゼンタとたくさんの^{へい し}兵士たちの前に、^{まえ}悟飯は^{ご はん}怒気をまとって^{ど き}着地した。^{ちやく ち}

パンはうれしそうにフェンスから^{み の}身を乗りだして「きた！」と^{さけ}叫んだ。

「パパきた！」

「パン！」

その^{こえ}声に、^{ご はん}悟飯が^{いっ き}一気に^とテラスへとむかって飛びだす。

^{かぜ}風にあおられたガンマ1号が、^{ごう}小さな^{ちい}声で「^{こえ}速い」と^{はや}感嘆の^{かん たん}声をあげた。^{こえ}

「2号！」

すかさず^{し し}ヘッドが指示をだす。

^{し めい}指名されたガンマ2号は、^{ごう}すばやい^{うご}動きで^{ご はん}悟飯を^{よこ て}横手から^{ひろ ば}広場へと^け蹴りおとした。

「パパ！」

^{じ めん}地面に^{しょうとつ}衝突した^{ご はん}悟飯に、マゼンタは^{はな}ガッツポーズをし、^{わら}カーマインは鼻で笑う。

^{かん}感じの悪いおとなたちを、^{わる}パンはムツとにらみつけてやった。

「このヤロウ……」

^{いか}怒りをまとわせた^{ご はん}悟飯が、^{しず}静かに^た立ちあがり^{ぬ す}マントを脱ぎ捨てる。

「1号」

と、^よヘッドに呼ばれた1号が、^{ごう}右の^{みぎ}拳を^{こぶし}左の^{ひだり}手の^てひらに^う打ちつけながら、^{まえ}前にでてきた。

「おまえの^{あい て}相手は、この^{わたし}私がする！」



「ふっふっふ。^{むすめ すく}娘を救いたければ、そいつを倒^{たお}してみろ」

うしろから指をつきつけてきたのはマゼンタだ。

「……おまえたち、なにものだ……」

にらむ悟飯^{ごはん}にガンマ1号は無言^{ごう む こん}のまま、パキパキと首^{くび}を鳴らした。

激^{はげ}しい雨^{あめ}に打たれながら駆^うけだすと、一^{いっ}気に加速^きし殴^かりか^{そく}かる！

「っ！」

想像^{そう ぞう い じょう}以上のパワーだった。

両腕^{りょううで}でガードはしたものの、悟飯^{ごはん}は驚^{おどろ}きをかくせなかった。

ガンマ1号^{ごう}がさらに拳^{こぶし}をくりだす。

が、悟飯^{ごはん}はそれをふせいでまわし蹴^げりをはなつ。

直撃^{ちよくげき}したガンマ1号^{ごう}が、ゆっくりうしろへ倒^{たお}れこんだ。

「！」

と、思^{おも}った瞬間^{しゅんかん}、地面^{じめん}ギリギリで止^とまったガンマ1号^{ごう}は、予備動作^{よび どう さ}なしで体^{からだ}をもどす！

それ^ずを頭突^づきで受け止^うめて、悟飯^{ごはん}は1号と両手^{ごう りょう て}をがっしりと組^くみあわせた。

力^{ちから}くらべはほぼ互^ご角^{かく}。

と、1号^{ごう}が悟飯^{ごはん}の足^{あし}をはらった。バラン^{ごはん}スをくずした悟飯^せを背負^{せい}投^おてた^{なげ}たたきつけると、上昇^{じょうしょう}し、ねらいをさだめて急降^{きゅうこう}下^かする。

悟飯^{ごはん}は上空^{じょうくう}からのキックはふせいだものの、衝撃^{しょうげき}で広場^{ひろば}の地面^{じめん}が大き^{おお}くくずれた。

「う、ウソだろ……」

「ひえええ……」

闘^{たたか}いの激^{はげ}しさに、兵士^{へいし}たちが後^{あと}ずさる。

マゼンタとカーマインは見^みくだしたようにニヤリと笑^{わら}った。

悟飯^{ごはん}の劣勢^{れつせい}に、パンはくやしそうだ。

「きてくれてよかったな」

テラスへとやってきたピッコロが、そんなパンに小^こ声^{こえ}で話^{はな}しかけた。

「うん。でもあいつ強いね。パパ勝^{つよ}てるかな」

「無理^{むり}だ」

「……え？」

いまの悟飯^{ごはん}では、ガンマ1号^{ごう}の強^{つよ}さには勝^かてない。

スーパ^{スーパー}ー人^{じん}になっても勝^かてるかどうか。

一^{いち}度^どガンマ2号^{ごう}と闘^{たたか}ったピッコロにはよくわかる。

「悟飯^{ごはん}が勝負^{しょうぶ}の勘^{かん}を完全^{かんぜん}に取りもどし、目覚^めめること^きに期待^きしよう」

そうすれば、可能^{かのう}性は見^みえてくるはずだ。

くずれた地面^{じめん}の底^{そこ}で、悟飯^{ごはん}はガンマ1号^{ごう}をギッとにらみつけていた。

「……なんだ、おまえは！」

「スーパーヒーローだ」

「はあっ!？」

まじめこえ い ごはん こえ
真面目な声でそう言うガンマ1号に、悟飯がいぶかしげな声をあげる。

むすめ
ひとの娘をさらっておいて、よくそんなバカバカしいことが言えるものだ。

いか ごはん ごう と
怒りをたぎらせ、悟飯はガンマ1号にむかって飛びだした。

こうげき ぎゃく げ はら
だが、くりだす攻撃はかわされて、逆にひざ蹴りを腹にきめられてしまった。

「うっ……！」

ごはん ごう しょうてい
うめく悟飯を、ガンマ1号はすかさず掌底でつきあげる。

りょうあし くび じょうくう な
さらに両足首をつかまれて、はるか上空へと投げられる。

くうちゅう たいせい た ごはん ごう み
どうにか空中で体勢を立てなおした悟飯は、1号をじっと見おろした。

じん ぞう にん げん
「ロボットじゃないな……。人造人間か」

「さすがにかわいいな」

ひ きょう
「なるほど……だがなぜこんな卑怯なことをするんだ」

たたか き ごはん ごう ふく く うで
闘いのいきおいでずれたメガネをなおしながら聞く悟飯に、ガンマ1号は不服そうに組んでいた腕をほどいた。

ゆうかい わたし わたし せいぎ めいれい じっごう
「誘拐は私のアイデアじゃない。私はただ、正義のために命令を実行するだけだ」

せいぎ めいれい
「……正義？ 命令？」

まゆ ごはん ごう ゆび
眉をよせる悟飯を、ガンマ1号がビツと指さす。

あく ひ みつ そしき
「おまえたちのような悪の秘密組織をつぶすこと」

「なに？」

い もう と
言うなり猛スピードで飛びだしてくる。

はら い じ めん け
つきを腹に、ひざをあごに入れられ、すかさず地面へと蹴りおとされる。

ごはん かいてん しょうげき じ めん お
悟飯は回転して衝撃をやわらげ、地面に降りたった。

あしもと きんいろ た かみ け さかだ きんいろ
足元から金色のオーラが立ちあがり、髪の毛が逆立ち金色にそまる。

ごはん スーパー じん
悟飯が超サイヤ人になったのだ。



「なっ、なんだと……!？」

メガネを投げ捨てた悟飯ごはんの姿に、マゼンタが驚愕きょうがくの声をあげた。

「トリックじゃない！ ホントに宇宙人うちゅうじんか……！」

そばで見ているヘドも、興奮こうふんしたように拳こぶしをにぎる。

パワーをあげた悟飯ごはんは1号へ飛びかかり、連続れんぞくで蹴りをお見舞みまいした。

「たりやあああっ！」

続いて右アッパーではねあげて、左ストレートで殴り飛ばす。

が、ガンマ1号はダメージなどないかのように、空中くうちゅうで動きを止めた。

「その変身へんしんは、想定内そうていだ」

猛然もうぜんと悟飯ごはんにタックルをかますと、そのまま岩壁がんぺきへとつつこんでいく。

ドゴゴゴッ！

岩肌いわはだをけずるようにおさえつけられて、悟飯ごはんはグッと手をつきだした。

「はあっ」

気を飛ばして、ガンマ1号をはね飛ばす。

「はあああっ！」

そのまま連続れんぞくで気功波きこうはを打ちはなつた。

けれどガンマ1号は軽々ごうかるとかわし、すかさず光線銃こうせんじゅうを撃ってきた。



「っ！」

悟飯^{ごはん}はすばやくビームを地面^{じめん}へとはじく。

「ヒイツ！」「わあああ!!」

ビームは広場^{ひろば}に激突^{げきとつ}して、兵士^{へいし}たちから悲鳴^{ひめい}があがる。

「しまった！」

その様子^{ようす}に、ガンマ1号^{ごう}はあわてて銃^{じゆう}をしまった。

気^きを取られたのか、悟飯^{ごはん}のひざ蹴^げりをガードしきれず蹴^けり飛^とばされる。

そこから、地上^{ちじょう}で一進^{いっしん}一退^{いったい}の攻防^{こうぼう}が続^{つづ}いた。

両者^{りやうしゃ}ゆずらず、殴^{なぐ}ってはさがり、ふたたび飛^とびだしてはたがいの攻撃^{こうげき}をガードする。

力^{ちから}くらべてにらみあう二人^{ふたり}に、パンがテラスから大きな声^{おおこえ}で声援^{せいえん}を送^{おく}る。

「パパ、いいぞ！ ガンバレー！」

「くそ……マズいな……」

「え？」

けれどピッコロは、苦い顔^{にが}で二人^{ふたり}の闘^{たたか}いを見ていた。

「あいつは闘^{たたか}いながら相手^{あいて}の戦^{せん}力^{りよく}や動^{うご}きを学^{まな}んでいるようだ……」

はたしてその予想^{よそう}はあたったようだ。

悟飯^{ごはん}から重^{おも}たい蹴^けりの1発^{ぱつ}をふせいだガンマ1号^{ごう}が、スッと上体^{じょうたい}を起^おこして胸元^{むなもと}の汚^{よご}れをはたいた。

「……これがおまえのすべての力^{ちから}か？」

「なに？」

「そうであれば、おまえに勝^かち目^めはない」

「なんだと……！」

次^{つぎ}の瞬間^{しゆんかん}、高速^{こうそく}で目の前^めへせまった悟飯^{ごはん}だが、今度^{こんど}はガンマ1号^{ごう}にかわされ、頭^{あたま}から地面^{じめん}にたたきつけられた。

「ぐっ……！」

悟飯^{ごはん}は蹴^けりをくりだすが、いなされて、背^せ中^{なか}にひざ蹴^げりをくらう。

「い、いいぞ！ すばらしい！ それでこそボクのガンマだ……！」

ヘドがうれしそうに歓声^{かんせい}をあげる。

またたくまに防戦^{ぼうせん}一方^{いっぽう}となった悟飯^{ごはん}に、ピッコロは内心^{ないしん}イラだっていた。

まだまだ悟飯^{ごはん}の真価^{しんか}はこんなものではないはずだ。

ピッコロはそっとかがむと、パンに小さく耳打^{ちいみみう}ちをした。

「痛いとか言って叫^いべ」

「……！」

パンはすぐに察^{さつ}したようだ。

遠^{とお}くで倒^{たお}れている悟飯^{ごはん}にも聞^きこえるように、大きな声^{おおこえ}で叫^{さけ}びはじめる。

「いったーい!! キヤー！」

その声に、悟飯が顔をあげた。

ピッコロ扮するレッドリボン軍の兵士が、パンの胸倉を持ちあげているのが目に映る。

真実は、胸倉をつかんだふりをしているだけで、ピッコロの右手にパンが立っているだけだ。

「パン!!」

だが、娘の悲鳴で頭に血ののぼった悟飯にはわからない。

必死の形相でこちらをにらむ悟飯に、ピッコロがしてやったりと思った瞬間。

「やめろ！ なにをしているんだ！ 子供に手をだすんじゃない！」

なぜかガンマ2号があわてたようにこちらを見た。

「「……え……」」

誘拐をした時点で、じゅうぶん手をだしている。

なにかおかしいと感じたピッコロの耳に、悟飯の天をつくような叫び声が聞こえてきた。

「うおおおおー!!」

気合いとともに、悟飯の怒気がものすごいきおいではねあがった。

充満したオーラが天へとほとばしり、分厚い雨雲さえも吹き飛ばす。

太陽の光が降りそそぎ、地上にいる悟飯の髪が金から黒にしずまっていた。

だが、まとうオーラは湯気のように立ちのぼっている。

内に秘めていた潜在能力を解放した姿——アルティメット悟飯になった証だ。



いっしゆん せいじゃく ごはん じめん け
一瞬の静寂を置いて、悟飯がドン、と地面を蹴る。

スピードのあがった悟飯にひるむことなく、ガンマ1号は手をつきだしてその拳を受け止めた——が、拳はそのまま1号の顔面に押しこまれた。

もう1発の拳が顔面を襲い、さらに蹴りあげられて、ガンマ1号の体が宙を舞う。

「くっ……！」

どうにか体勢をもどしたが、今度はうしろにまわられ、地面に蹴り飛ばされる。

「な……なんだ……？」

まるで別人のような速さとパワーだ。

「いいぞ！ ついに覚醒した！」

「わーいわーい」

ピッコロはパンをおろすと、二人で拳をつきあわせ、グータッチする。

けれどとつぜんの劣勢に、ヘドは混乱するばかりだった。

「そんなバカな……」

マゼンタは言葉もなく、じりじりとうしろにさがりはじめる。

その横で、ガンマ2号はヘドを守るように立ちながら、ガンマ1号と悟飯の闘いを真剣なまなざしで見つめていた。

三者三様の思いで見つめる先で、悟飯はガンマ1号の攻撃をふせぎながらにらみつけた。

「悪の秘密組織ってなんだ！」

言いながら、ガンマ1号の左蹴りを足の裏で止め、腹にひじを打ちつける。

ガンマ1号はくるとターンして着地しながら光線銃を抜いた。

「おまえたちのことだ！」

「ふざけるな！」

射出されたエネルギービームを、怒声とともに打ちはらう。

四散したビームが基地内のあちこちを破壊し、もうもうと煙が立ちこめた。

「それが子供を誘拐したヤツの言うことか！」

上空から、悟飯が指をつきつける。

「悪の組織は、そっちだろう！」

「……ちがう！」

とまどうように銃をしまったガンマ1号が、じりじりとうしろにさがりはじめる。

その様子に思わずヘドは声をかけた。

「お、落ちつけガンマ！ 2号！ おまえも加勢するんだ！」

「はっ！」

「おっと！」

飛びだそうとした2号の頭^{ごう あたま}に、ピッコロがヘルメットを投げつける。

パンもかけられていた手錠^{てじょう}をバキンッ^{かんたん}と簡単に割^わってはずした。

「邪魔^{じゃま}はさせないぞ」

ピッコロは軍服^{ぐんふく}をオーラではじき飛ばし、変装^{へんそう}を解^とく。

悟飯^{ごはん}は、そこでようやくピッコロがいることに気づいたようだ。

だが、すぐにガンマ1号のパンチに攻められて、こちらにくる余裕^{よゆう}はさすがにない。

闘^{たたか}う彼^{かれ}らをうしろに、ガンマ2号が不敵^{ごうふてき}に笑^{わら}ってピッコロを見あげた。

「……なんと！ ピッコロ大魔王^{だいまおう}だったか」

「大魔王^{だいまおう}じゃない。ただのピッコロだと言^いっただろ」

潜在能力^{せんざいのうりょく}を解放^{かいほう}すると、ピッコロの緑色^{みどりいろ}の体^{からだ}はいつもよりうっすら黄色^{きいろ}味^みがかった。

「ホントに生きていたようだな。まさか、こりずにボクにやられにきたのかな？」

両手^{りょうて}をひろげるおおげさなジェスチャーで、挑発^{ちょうはつ}するように肩^{かた}をすくめる。

「さっきとはひと味^{あじ}ちがうつもりだ」

「……今度^{こんど}は逃^にげるなよ！」

軽快^{けいかい}に叫^{さけ}ぶと、ガンマ2号は両手^{ごうりょうて}を地面^{じめん}につけてクラウチングスタートの姿勢^{しせい}を取り、弾丸^{だんがん}のように飛びだした。

いきおいのあるパンチがピッコロへとくりだされる。

が、それを片手^{かたて}で受け止^とめると、横^{よこ}に引き、空いたわき腹^{あばら}へとひざ蹴^げりをきめた。

そのまま右^{みぎ}の拳^{こぶし}を顔^{かお}にめりこませ、広場^{ひろば}へと殴^{なぐ}り倒^{たお}す。



ガンマ1号の攻撃をガードしながら、その闘いを見ていた悟飯は思わずつぶやいた。

「なんでピッコロさんが……」

「説明してる場合か！ 闘いに集中しろ！」

「はっ、はい！」

けれどすぐに怒鳴られて、悟飯はバツと顔をもどした。

ピッコロとガンマ2号の足元がぐずれだし、二人は深い谷底へと落ちていく。

「なにをしたんだ、こんな短時間で……それともかくしていたってのか？」

「フン。教えてやるもんか」

「またか。しかし、それでもボクの実力には残念ながらおよばないようだよ」

「なに……？」

いぶかしむピッコロに、ガンマ2号がスピードをあげて距離をつめてきた。

上の広場では、悟飯が1号との闘いに集中していた。

ピッコロに言われたとおり、攻撃の手をやすめずに、すばやい蹴りをくりかえす。

いまの攻撃力なら悟飯が上だ。

が、1号はまるでひるむ様子もなく、悟飯にひじをくりだしてきた。

「くっ……おまえ、つかれ知らずか……」

「人造人間だからな。エネルギーがきれるまで全力がだせる」

「のこりのエネルギーは……？」

そのひじを腕で受けてはじき飛ばし、悟飯は1号と距離を取る。

「まだ82 % のこっている」

「げ！ マジか……」

でてきた具体的すぎる数字に、悟飯は引き気味にそうつぶやいた。

基地のはるか谷底で闘うピッコロは、驚きをかくせないでいた。

「——くそっ、たいしたヤツだ！ これほどパワーアップしても追いつけない！」

「ヘド博士の傑作だからね！」

2号は胸をはってポーズを取りながら、壁を蹴ってむかってくる。

まっすぐ突進してくるガンマ2号に、ピッコロは近くのカレキを念で集めて投げつけた。

「おいしいな」

「おいしい？ なにがだ」

投げられたカレキを銃でくわいて、ガンマ2号が眉をよせる。

ピッコロは右手を額にあてた。指先にピッコロの気が集中し、パチパチと音を立てる。

「おまえは……^{わる}悪いヤツじゃない。^{めい れい}バカな命令にしたがっているだけだ！」



い ひつ さつ わざ ま かん こう さつ ぽう
言いながら、ピッコロは必殺技の魔貫光殺砲をはなつ！

「ハッ。それがどうした！」

と ごう きょうれつ と
飛びながらガンマ2号は、強烈なエネルギーをバリアではじき飛ばした。
ま かん こう さつ ぽう し めん き ち にわ は かい
はじかれた魔貫光殺砲は、地面をつらぬき、基地の庭を破壊する。

「ボ、ボクたちは、そのために創られたんだ……！」

ごう はかせ めいれい
2号にとって、博士の命令はぜったいだ。

しかしピッコロは魔貫光殺砲をはなった指先をそのままに、2号をまっすぐににらみつける。

「その命令をだしたドクター・ヘドも、マゼンタからまちがった情報を伝えられていたとしたら……？」

「そんなことはない！」

じ ぶん まよ ごう おお ごえ さけ
自分の迷いをふりきるように、2号が大声で叫んだ。

どう じ りょうあし と はら
同時に両足で飛びこんできたキックが、ピッコロの腹にきまる。

「うすうす、きがついているはずだ……」

「……だまれ！ くそっ！」

うめくようにそう言って、ガンマ2号はピッコロの顔面に右ストレートを打ちつけた。

てい ごう がん めん なん ど なぐ りょうあし じょうくう な
抵抗できないピッコロの顔面を何度も殴り、両足をとらえてふりまわすと、上空に投げあげる。

そのまま上にもわったガンマ2号は、谷底にむけて、ピッコロを思いきりたたきおとした。

「……っ」

きょ だい ふか たに そこ やみ おも ま くら
巨大な深い谷の底は闇を思わせるように真っ暗だ。

なか す お からだ きん いろ ひかり なが
その中を吸いこまれるように落ちていくピッコロの体に、金色の光が流れはじめた。

い しき とお みみ シェン ロン せりふ
意識が遠のきそうになっていたピッコロの耳に、神龍の台詞がよみがえる。

すこ
『少しオマケをしておきました』

シェン ロン ほう こう
神龍の咆哮があたりにとどろく。

じょうしやう シェン ロン ひかり えん えん なか せい めい い ぶき かん き は えだ
上昇した神龍が、ぐるりとアーチをえがき、ひとつの光の円になった。その円の中に、生命の息吹を感じる木が生える。枝
ふ は せい き えん こく いん せ う
を増やし、葉がおいしげったそれは、ナメック星のアジッサの木だ。その円が刻印のようにピッコロの背に浮かびあがり――

「――！」

じ ぶん なか かん
ピッコロは自分の中にあふれだしてくるパワーを感じた。

たに ぞこ げき とつ ちよくぜん からだ ばく はつ
谷底に激突する直前、ピッコロの体からオレンジのオーラが爆発する！

ドオンッ！

じ な おと た たに ぞこ じょうしやう からだ いろ へん か
地鳴りのような音を立て谷底から上昇したピッコロは、体がオレンジ色に変化していた。

にく たい ひと い じょうおお かお か
肉体は一まわり以上大きくなり、顔つきもいかついものへと変わっている。



「^{こん ど}今度は、なんだー！」

^{おどろ}驚きながら、それでもガンマ2号はピッコロにむかって^{ごう}突進した。

スピードをあげ、^{こん しん}渾身のパンチを^{はら れん だ}腹に連打する。

「だりやああああ！」

けれどピッコロは^{び どう}微動だにしない。呆然とする2号にむかって、^{ぼう ぜん}大きく^{ごう}拳を^{おお こぶし}ふりかぶる。



「!!」

圧倒的なパワーで殴られ、ガンマ2号の体が吹っ飛ばされた。

地面にめりこんでしまった2号を、ヘドが心配そうに見つめている。

「知るか。……神龍のヤツ、ずいぶんオマケしやがったな」

ピッコロはオレンジ色にかがやく自分の手を見つめながら、ふん、と鼻をならした。

その変化に、マゼンタが驚いたように声をあらげる。

「な、なにをしているおまえたち！ 撃て！ 撃ち殺せ！」

おびえる兵士たちに命令して、自分はそろそろとうしろにさがる。

へっぴり腰で撃ちこまれるふつうの銃は、もちろんピッコロに傷を負わせられるわけもない。

「総帥」

「ああ、こうなったら……！」

ささやくカーマインにうながされ、マゼンタはそと走りだした。

兵士たちも恐怖で散り散りに逃げだしていく。

その状況に困惑しながら、ヘドはマゼンタをさがしていた。

こんな状況になったときこそ、ヒーローのリーダーはしっかり指揮を取るべきだ。

と、逃げまどう兵士たちのあいだをぬうように、マゼンタとカーマインの姿が見えた。

「……？ あ、あいつら……！」

メインタワーのわきを走る二人の先には、移動用の飛行メカがある。

まだガンマたちが闘っているというのに、逃げるつもりか。それとも——

「！」

思いついた可能性にハッとして、ヘドは走りだした。

「こらーっ！ にげるなー！」

かわってマゼンタたちに叫んだのはパンだった。

おかしい動きに気づいたパンが、二人を追いかけて走ってきたのだ。

「ひい！」

「総帥はおさきに——このガキっ！」

そう言うやいなや、カーマインは銃を取りだし、なんの躊躇もなくパンにむけた。

「わっ！ わわっ！」

タン、タタタ、と撃たれる銃を、タップでも踏むかのように軽快な動きでパンがよける。

この程度の攻撃は、パンにとっては屁でもない。

が、そのとき。

バシュ!!

倒れていたはずのガンマ2号のビームが、カーマインの銃を直撃した。

「な、なにをするガンマ！」

「……たったいま、確信した。どっちが悪か……！」

驚きふりかえったカーマインに、ガンマ2号は怒りの表情をむける。

子供に銃口をむけるヤツらが、正義であるわけがない。

「ていつ！」

と、パンがカーマインに飛びかかった。

小さな体で重たい顔面キックをお見舞いし、よろめいたカーマインの腹にも1発。

「お、おおおお……ぐほお……」

うめきながら、カーマインがどしゃりと地面に倒れる。

悪のひとりばちは打ちやぶった。

その一部始終を見ていたピッコロは、気を静めると、元の緑色の体にもどった。

それから、とっくみあいを続けている悟飯にむかって声をはりあげた。

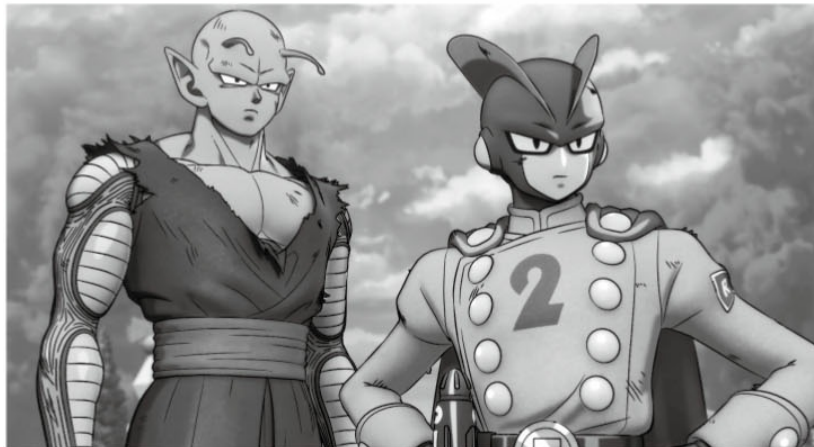
「悟飯！ もういい！ 闘いをやめろー！」

ハッとした悟飯が顔をあげる。

「……いったい……どうしたんですか？」

「どうやら、双方に誤解があったようだ……」

そう言うピッコロのとなりで、2号が深くうなずいた。



その

★
8

目覚める怪物



ガンマたちがようやく真の敵を知ったころ。

メインタワーからはなれた地下の研究室では、マゼンタがコントロールパネルを操作していた。

あわてて追いかけてきたヘッドが大声で呼びかける。

「なにをするつもりだ！ まさか！」

「そうだ！ セルマックスを起動してやる！」

せわしくキーボードをたたきマゼンタは見むきもしない。

視線の先には、未完成のセルマックスの入った丸い培養カプセルがある。

「バカなことはやめろ！ ガンマたちはまだ闘っている！」

叫ぶヘッドをふりかえり、マゼンタは銃をかまえた。

「バカはおまえだ。楽勝じゃなかったのか！ きさまなんかを信じたせいで、このピンチだ！」

「ガンマたちは混乱しているんだ。倒すべき敵に悪意が見えてこないから」

必死で説明するヘッドを、マゼンタは鼻で笑った。

「フン。それはきさまがくだらないヒーローの要素なんかを植えつけたせいだ！」

「ぬっ、く……」

「いつか息の根を止めてやることを楽しみにしていたぞ」

そう言うと、迷いなく引き金を引く。

パン、と乾いた銃声がして、ヘッドはガクリとひざを折り倒れた。

その背に、もう2発、銃声がひびく。

そしてマゼンタは、悪びれることなくコントロールパネルにむきなおった。

パスワードを入力し、起動プロセスを開始する。

フイイン……

培養カプセルがうなりだし、光の点滅が激しくなった。

——と、マゼンタのうしろで、ふいになにかの動く気配がした。

ハッとしてふりかえれば、殺したはずのヘッドが、くるくるとバレリーナのように回転してピタッと止まり、おかしいポーズをとっている。

「！ ドクター・ヘッド!？」

「忘れたのか？ ボクの皮膚は、ある程度の衝撃なら耐えられるように改造したって……」

驚くマゼンタの前で、ヘッドが白衣を脱ぎ捨てた。

「!? ……そうか、そういえばそんなことを言ってたな」

フードをかぶり、マントをなびかせ、まるでスーパーヒーローのようなかっこうになる。

光線銃を持ってにやりと笑うヘッドから、マゼンタはおびえたように後ずさり——

「だが……私もそれに近い改造はしていてね」



「え？」

ニタリと笑^{わら}って顔^{かお}をあげる。

驚^{おどろ}くヘドの前^{まえ}で、マゼンタも服^{ふく}を脱^ぬぎはじめた。

「天才^{てんさい}から見^みればたいした改造^{かいぞう}じゃないかもしれんが、おまえよりは強^{つよ}いはずだ」

お落^おちつきはらって、脱^ぬいだジャケットをハンガーラックにかける。

服^{ふく}の下^{した}からでてきたマゼンタの上^{じょう}半^{はん}身^{しん}は、メタリックなかがやきをはなっていた。

ひと目^{ひとめ}で肉^{にく}体^{たい}改^{かい}造^{ぞう}したのだとわかる。



「ククククッ……^{こん ど}今度こそおまえは^お終わりだ！」

^い言いながら一^{いつ}歩^{ちか}ずつ近づくマゼンタに、ヘドはさがって左^{ひだり}手^ての甲^{こう}を口^{くち}元^{もと}によせた。

「——ハチ丸^{まる}」

「……？ ん？」

どこからともなく飛んできたハチ丸^{まる}が、マゼンタの首^{くび}にプスッと細^{ほそ}い針^{はり}を刺^さす。

「グオオオオー!？」

そのとたん、マゼンタは苦痛^{く つう}に叫^{さけ}び声^{こえ}をあげた。

ヘドが勝^かち誇^{ほこ}ったように片^{かた}目^めをつぶり背^せをむける。

「言^いった^{かい}だろ。改^{かい}造^{ぞう}しても人^{にん}間^{げん}の部^ぶ分^{ぶん}がのこっていたら、ハチ丸^{まる}の毒^{どく}でイチコロだ^どって。……くく、あ^{ばく}ん^{だい}た^しの莫^{もく}大^{だい}な資^し金^{きん}は、研^{けん}究^{きゅう}者^{しゃ}からす^みれば魅^み力^{りよく}的^{てき}だ。ボクはいくらか^にい^{おも}た^{おも}だ^{おも}いて、ガ^にン^にマ^にた^にちと逃^にげよう^にと思^{おも}う」

「ぐぎ……ぐぎぐぐ……ううう……」

そのうしろで、マゼンタはのたうちまわりながらコントロールパネルへとたどりついた。

最^{さい}後^ごの力^{ちから}をふりしぼり、拳^{こぶし}を思^{おも}いきりふりあ^おげ^おる。

「うおおおおお！」

「!？」

起^き動^{どう}ボタ^んに、マゼンタのグーパンチがたたきつけられた。

「ああ！ しまったあああ!!」

頭^{あたま}をかかえるヘドの目^{もく}前^{ぜん}で、培^{ばい}養^{よう}カプセルからまばゆい光^{ひかり}がはなたれはじめ——

レ^{ぐん}ッド^きリ^ちボン^{ない}軍^ふの基^き地^み内^なに、不^ふ気^き味^みなサイ^なレンが鳴^なりひびいた。





「どうなってるんだ、2号」

「どうやら雲行きが変わってきたみたいだ」

非常事態を知らせる音に、ガンマたちがけわしい顔になる。

ピッコロから事情を聞いた悟飯は、ようやく再会できたパンを抱く腕に力を込めた。

と、そのとき。

上空に、1機の飛行機があらわれた。操縦席に見えるのはブルマだ。

「よっと！」

メインタワーを旋回し、トランクスを先頭に、悟天、クリリン、18号が降りてくる。

最後にでてきたブルマが、悟飯たちにぶんぶんと大きく手をふる。

「たのもしい助っ人にきてもらったわよ！ クリリン以外は」

「傷つくなあ。こう見えても警察署じゃ超人って言われてるんすからね」

サタンシティの警官服を着たクリリンが、不満そうに口をとがらせる。

そんなクリリンをよそに、悟飯を見つけた悟天が驚いたように目を丸くした。

「めずらしいな。兄ちゃんも闘いにきたんだ」

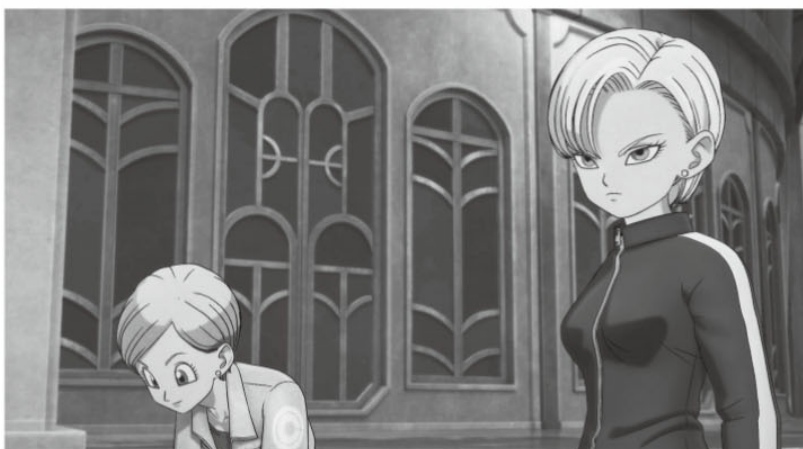
「悟天か……？ あ、お、おう」

弟のとなりに立つトランクスに、目をしばたかせながら手をあげる。

超サイヤ人になったときメガネを投げてしまった悟飯は、気をおさめているいま、どうやらよく見えていないようだ。

遅れてやってきたブルマが、「あ、ちょっと！」とうれしそうな声をだす。

「パンちゃんまでいるじゃないの！ いくつになったのー？」



「えっとね、3さい」

ほのぼのとした二人の会話を聞きながら、18号がガンマたちに目をむける。

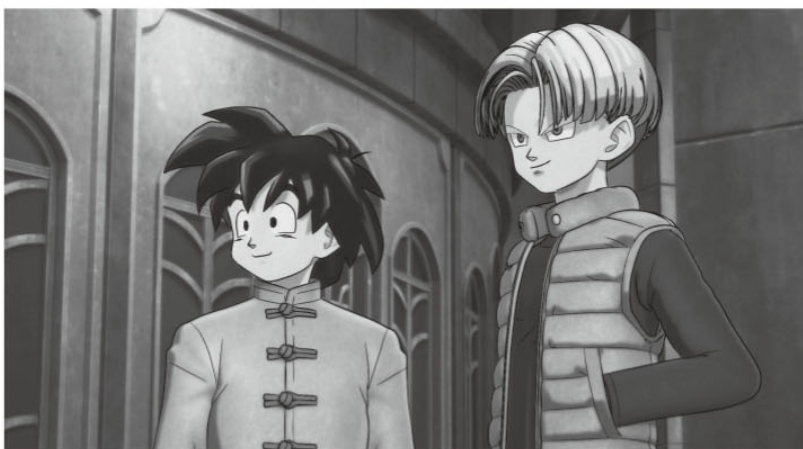
「そいつらが新しい人造人間かい？」

「ああ」

うなずくピッコロのそばで、トランクスと悟天もソワソワとガンマたちを見ている。

「ちょっとカッコイイな」

「うん」



しょうねん かん そう い ふたり め
少年らしい感想を言いたう二人に目をとめたピッコロに、

「トランクスくと悟天くんだよ」

パンがすかさず教えてくれる。

「しばらく会ってないと思ったら、急に大きくなりやがったな」

「サイヤ人はずっと小さくて、あるときから急に大きくなるんですよ」

悟飯にも言われ、ピッコロはあらためて思いだした。

そういえば悟空も悟飯もそうだった。

「ど、どうなってるんだ？ 闘ってたんだろ？ あいつらと」

と、クリリンがとまどうようにガンマたちを見た。

闘いの助っ人にきたつもりだったが、いまは休戦状態だ。

「ええ。ところで、どこかにボクのメガネって落ちてません？ よく、見えなくて……」

それにのんびりとした口調で答えた悟飯が、基地の階段をおりながらメガネをさがす。

ピッコロはあきれたように悟飯を見た。

「おまえ、変身すると視力ももどるのか？」

「いやあ……あはは……」

あいまいな笑顔で答えた悟飯が、ハッと思いだしたかのようにピッコロを見る。

「さっきのピッコロさん、なにが起こったんですか？ すごかったですよ！ オレンジ色に変わって……おそろしく気が上昇してました！」

興奮したようにかがやく顔でそう聞かれ、ピッコロは首をひねった。

「オレンジ色？ ……そうか。自分ではわからなかったが。まあ、おまえのようにオレも覚醒したってことかな」

「ちょうカッコよかったよ！ ピッコロさん」

パンも興奮したように拳をにぎって、ブンブンとふる。

「名前つけてくださいよ。超サイヤ人みたいに」

「名前……？ どうでもいいがな……まあ、つけるとすれば、オレンジピッコロだな」

「オレンジピッコロって……」

あまりにもそのままなネーミングに、悟飯はぼかんと口をあけてしまった。



そこち　か　けんきゆうしつ　い　き　た　よこ
その地下の研究室では、息絶えたマゼンタの横で、ヘドがあわただしくコントロールパネルを操作していた。このままではセルマックスが起動してしまう。

「くっ、ううう……」

ばい　よう　ふ　き　み　こえ　つづ
けれど培養カプセルは、不気味なうなり声をあげ続けている。

「あああ……」

やく　えき　ちゆうにゆう　め　ひか
薬液がカプセルに注入され、セルマックスの目が光った。

もうだめだ。ま
もうだめだ。間にあわない。

けい　ほう　おん　な
あたりには警報音が鳴りひびいている。

いっ　ぽ　いっ　ぽ　あと
ヘドは一步、また一步と後ずさった。

ガコンッ！

ばい　よう　なか　あば
培養カプセルの中で、とうとうセルマックスが暴れだした。

がい　へき　き　れつ　はい　ばい　よう　えき
カプセルの外壁に亀裂が入り、培養液がふきだしてくる。

うち　がわ　なぐ　おと　えき　たい　よう　き　つ　め
ガコン、ガコン、と内側から殴りつけられるにふい音とともに液体があふれ、容器の継ぎ目がさけるようにひろがっていく。

「ヴガアアアアア！」

さけ　と
そしてとうとう、セルマックスが叫びながら飛びだしてきた。



よう き そと きょ だい すい そう お
容器の外にある巨大な水槽へズルリと落ちる。

ぜん しん あ すい そう かつ
しぶきを全身に浴びながら、ヘドはおそろおそろ水槽へと顔をむけた。

うご きょ だい て すい そう
のたうちまわるように動いていたセルマックスの巨大な手が、水槽のフチにかけられる。

「オオオオオオオオオオ！」

くう き お たけ う
空気をもちるがす雄叫びが、生まれたてのセルマックスからはなれた。

ぜっ きょう てん じょう けん きゅう しつ ほう かい はじ
そのすさまじい絶叫で、天井のパネルはくずれ、研究室が崩壊を始める。

じ ぶん つく きょ だい ば もの み かん ぜん こと ば うしな
ヘドは、自分の創りだした巨大な化け物を見あげ、完全に言葉を失ってしまった。

「……………」

かお うえ ち じょう ご はん き かん
と、セルマックスが、ふいに顔を上へとむけた。地上にいる悟飯たちの気を感じたようだ。

こん ちゅう はね ふ き み そら じょうしやう
昆虫のようなかたい羽をひろげると、不気味に空へと上昇していく。

けん きゅう しつ ほう かい に て ちか と
ヘドは研究室の崩壊から逃げるように、手近のフライングバイクに飛びのった。

ち じょう と
エンジンをふかし、どうにか地上までは飛びだせた。

「んぐっ！」

どう かい しやう げき ふう あつ ふ と はげ おう てん
だがすぐに倒壊の衝撃と風圧で吹っ飛ばされて、バイクごと激しく横転してしまう。

「セルが……」

からだ いき む せん
シートに体をはさまれながら、ヘドはあらい息でガンマたちに無線をつなげる。

き どう
「セルマックスが起動した！」

その

9

決死^{けっし}の突撃^{とつげき}



「なんだ？」

とつぜんあがった轟音に悟飯たちがふりかえる。

ガンマたちはヘッドからの無線に、驚愕の声をあげた。

「セルマックスが!？」

いそいで顔をあげれば、地下研究室のあった方向に横転したバイクが見えた。

視覚データを拡大すると、下敷きになったヘッドの姿も確認できる。

その上空には、起動したばかりの巨大なセルマックス——！

「グオオオオオ！」

のけぞって叫ぶセルマックスの全身から、邪悪なエネルギーのかたまりがはなたれた！

巨大なエネルギー弾の爆発は、すべてを飲みこむようにしてヘッドのいる場所にせまっている。

「博士！」

叫ぶガンマ2号の声と同時に、ガンマ1号がヘッドのもとに飛ぶ。

だが、エネルギー弾から放出されたすさまじい爆風に吹き飛ばされた。

あとを追いかけるガンマ2号もまた、激しい爆発にはじかれてしまった。

その爆風は、悟飯たちのいるすぐ近くまでもやってきていた。

「うお!？」

「ひいひい……」

地面をゆるがす震動と大きな光を、なすすべもなく見ているしかない。

やがて爆発がおさまると、レッドリボン軍の秘密基地は一部をのこして吹き飛んでいた。

あとには驚くほど大きなクレーターができています。

ヘッドが倒れていた場所もまた、むきだしの地面へと姿を変えていた。

「な……なんだよあれ」

「まさか……デカイセルか!？」

空中に浮かぶ巨大な赤と緑の化け物に、クリリンが絶望の声をあげた。

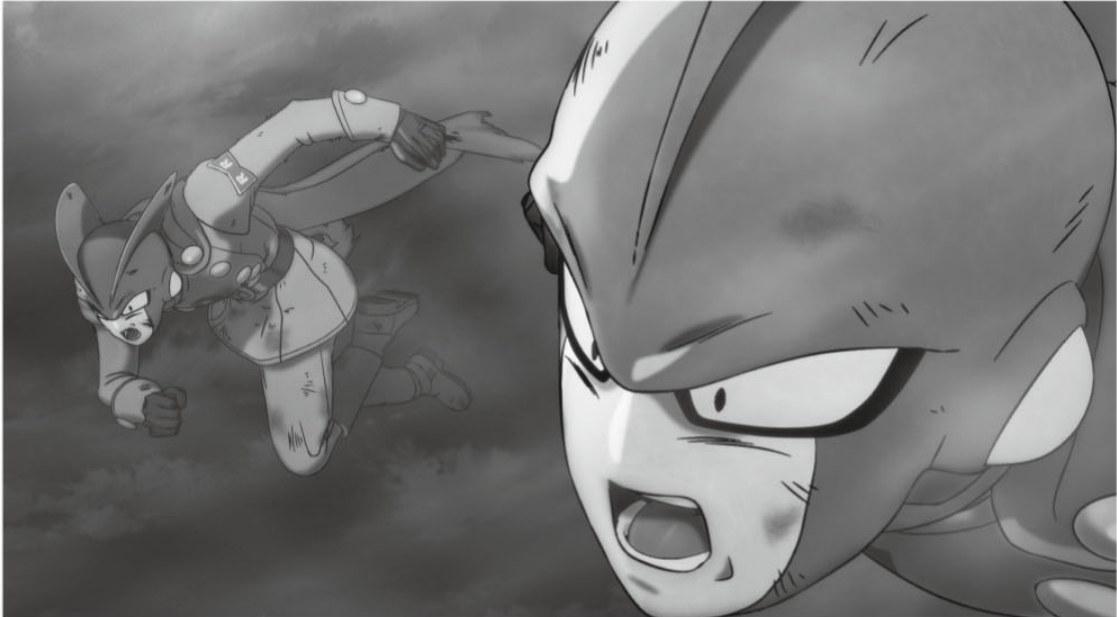
18号が信じられないとばかりに目を見開く。

ピッコロは顔をしかめた。

大きく息をはきながら浮かぶセルマックスからは、尋常じゃない強さを感じる。

「くっ、くそ……！」

ガンマたちは怒りにふるえた表情で、空中にたたずむセルマックスをにらみつけた。



「2号^{ごう}……、やるぞっ！」

ヘド^{はかせ}博士のかたきをうつ！

爆煙^{ばくえん}の中^{なか}を飛び^とだしたガンマ^きたちに気づいたピッコロ^{さけ}が叫ぶ。

「オレたちも行くぞ!!」

「オレたちも行くぞって……」

が、その呼びかけにクリリン^{かお ひ}は顔を引^ひきつらせた。

サイヤ人^{じん}でもナメック人^{じん}でもない、地球人^{ちきゅうじん}のクリリンにだってわかる。

セルマックスの強^{つよ}さはいままで闘^{たたか}ってきたどんな敵^{てき}よりもはるかに上^{うえ}だ。

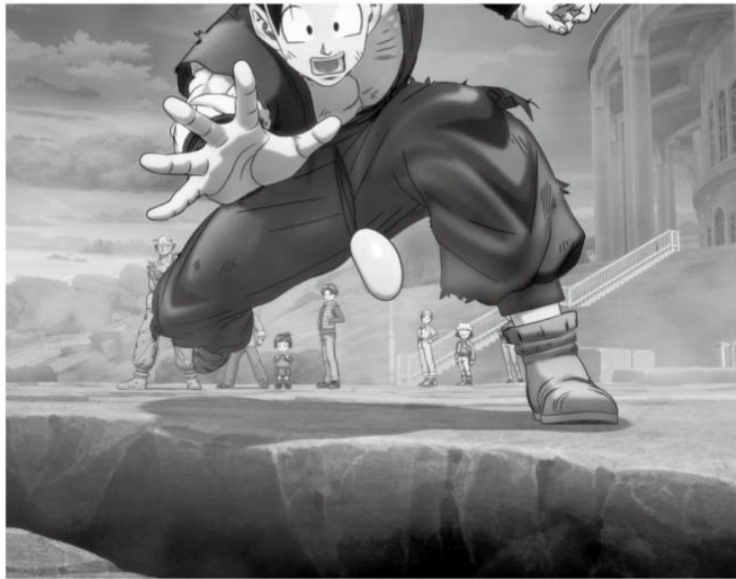
そんなクリリン^{む し}を無視^{む し}して、ピッコロ^{せん ず}は仙豆^{せん ず}のひとつを悟飯^{ご はん}に投^なげた。

「悟飯^{ご はん}、仙豆^{せん ず}だ！」

「え？ ……わっ、わっ、……わわわっ……!!」

だが、なんと、悟飯^{ご はん}はうっかり取りそこねてしまった。

仙豆^{せん ず}はコロコロと転^{ころ}がって、あっというまに崖^{がけ}の底^{そこ}へと吸^すいこまれていく。



「なに落^おとしてるんだ！」

「すみません……メガネがなくて……」

ぺこぺことあやまる悟飯^{ご はん}に、ピッコロはハアと息^{いき}をついた。

「もういい！ 仙豆^{せん ず}なしで鬪^{たたか}え！」

最後の仙豆^{さい ご せん ず}を自分の道着^{じ ふん}の帯^{どう ぎ}にしまい、そのまま駆けだしていつてしまう。

「え……はい！ ブルマさん!! パン^{ねが}をお願いします！」

「まかせて!!」

あわてて悟飯^{ご はん}も超サイヤ人^{スーパー じん}になって飛びだしていく。

のこされたトランクスと悟天^{ご てん}はたがいに顔^{かお}を見あわせた。

「おもしろそう!! 行^いこうぜ！」

「おう！」

飛^とんでいく二人^{ふたり}を見て、舌^みを鳴らした18号^{した な}もしかたなさそうに続^{ごう}く。

「……チッ。しょうがないね……」

飛びだしていく仲間^{なか ま}たちを、クリリンはオロオロと見^みおくっていた。

クリリンも強^{つよ}い。だが、彼^{かれ}らは強^{つよ}さのレベルがケタ^{つよ}ちがいなのだ。

「えっ？ あ、あ……よし！ いけ～っ！ オレはブルマさんとパン^{まも}を守る!!」

「……いい役^{やく}まわりを見^みつけたわね」

拳^{こぶし}をふりあげ応援^{おう えん}にまわったクリリンに、ブルマがもの言^いいたげな目^めでつつこむ。



みんなの飛^とんでいったほうを見^みつめながら、クリリンは苦笑^{にが わら}いでごまかした。



さき はげ くう ちゅう せん
先に激しい空中戦をくりひろげたのはガンマたちだった。

らん き りゅう なか こう せん じゅう ごう きょ だい て お
乱気流の中、光線銃をはなつガンマ1号をセルマックスの巨大な手のひらが追いまわす。

「ぐっ……！」

「とおおお〜っ!!」

すかさずガンマ2号がセルマックスの頭上からキックをはなつ。

が、かる みぎ て
軽く右手ではじかれる。



ふりまわされる両手を右に左によけた2号だが、セルマックスのしっぽがしなるようにたたきつけられた。

「ガアア〜ッ！」

雄叫びをあげて口から熱線をはこうとするセルマックスに、左から気弾がぶちあたる。

「!?」

スーパーじんごはんこうげき
超サイヤ人になった悟飯からの攻撃だ。

みこうとうぶせんざいのうりよくかいほうけさくれつ
見あげたセルマックスの後頭部に、潜在能力を解放したピッコロの蹴りが炸裂する。

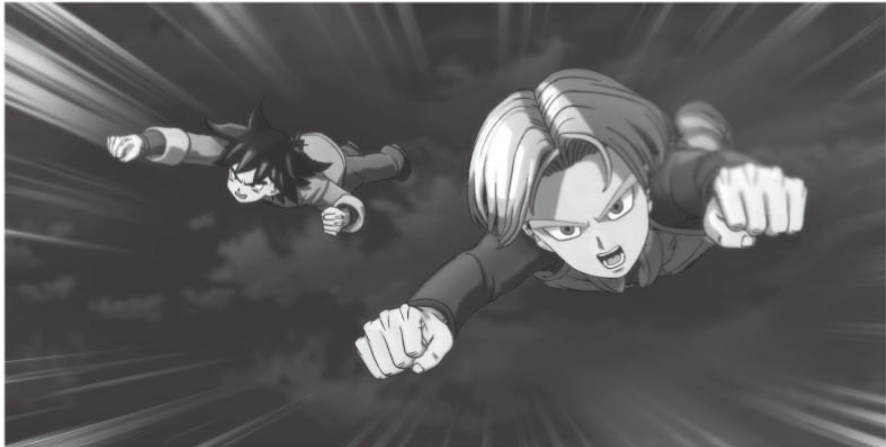
「オレたちもいるぜー！」

「とう〜!!」

「たあだだだだ！」

「かめはめ波はくくく！」

ごてんつぎつぎこうげき
やってきたトランクスと悟天も、次々と攻撃をくりだしていく。



18号もくわった五人で波状攻撃をしかければ、セルマックスが怒りの雄叫びをあげた。

「ガアアアッ！」

うるさいハエにいらついたかのように、セルマックスは両拳を地面にたたきつけた。
巨大な体で暴れはじめたセルマックスに、なかなか効果的な攻撃ができない。

「くそ……」

「頭のでっぺんをねえ！　そこがゆいいつの弱点だ！」

うなる悟飯に上空でそう言ったのは、光線銃をかまえたガンマ1号だった。



「^{あたま}頭のてっぺん!？」

く たい てき ば しょ し て い おも ぜん いん
具体的な場所の指定に、思わず全員ふりかえる。

「こういうことであろうかと、ヘド博士はセルマックスに弱点を作っておいたんだ」

「弱点……！」

おどろ
驚くピッコロのうしろで、セルマックスをにらみつけたままガンマ2号が続けた。ごう つづ

「ただし^{かく}覚^ご悟^{てん}しておけ！ 弱^{さい}点^{ぼう}をついたとたんに、セルマックスの細胞^{さい}さえ^{ぼう}のこさないような大爆^{だい}発^{ばく}を起^{はっ}こし……自^じ分^{ぶん}の命^{いのち}も助^{たす}からない……」

「え!?!」

その言葉に、トランクスたちが声をあげた。

もろ刃の剣もいいところだ。けれど、やるしか道はない。

「はっ！」

ガンマ1号が銃をかまえたままで飛びだした。

ふりかぶってつきだされたセルマックスの右手をよけて、頭をねらって銃をはなつ。

はんたい がわ ごう じゅう れんしゃ
その反対側からガンマ2号もスピードをあげて銃からビームを連射した。

「ガァ!？」

「はああゝゝ！」

き あ ご はん ご てん こう だん
 気合いをためた悟飯にならんで、ピッコロ、悟天、トランクスもいっせいに光弾をくりだす。

が、気づいたセルマックスは超高速で消えると、悟飯たちの背後にあらわれた！



「なっ!？」

おどろ　ご　はん　　からだ　おな　　おお　　こぶし　　なぐ　　じ　めん
驚く悟飯を、その体と同じくらいの大きさの拳でうしろから殴り、地面へとたたきつける。

きょ　り　　ご　てん　　ふたり　どう　じ　　こう　だん
あわてて距離をとったトランクスと悟天が、二人同時に光弾をはなった。

「くっ！」

「はっ！」

こう　そく　　こう　だん　　とお
しかしふたたび高速でよけられ、光弾はかすりもせず通りすぎてしまう。

あたま　　い
「しかし……頭をねらえて言っても……これじゃあ……」

すこ　　い　ち　　こう　　て　　こう　だん
少しはなれた位置でねらっていた18号も、手にした光弾をはなつタイミングがつかめない。

おな
それはガンマたちも同じだった。

こう　そく　　じゅう
高速でせまるセルマックスに、なかなか銃があたらない。

とう　ちよう　ぶ　い　がい　　こう　か
しかも頭頂部以外では、あたってもほとんど効果がないのだ。

れん　けい　　こう　せん　じゅう　　もう
連係して光線銃をはなつガンマたちに、セルマックスが猛スピードでせまってくる。

ドゥン！

「ガァ!!」

よこ　がお　　いち　げき
と、セルマックスの横顔に、トランクスのはなった一撃が当たった。

はん　たい　がわ　　ご　てん　　こう　げき
ふりむいたセルマックスの反対側から、悟天がすばやく攻撃をしかける。

した　　ご　はん　　こう　だん　　う
さらに下から悟飯が光弾を撃ちつけた。

「ガァァァ～」

いか　　くび　　ほう　こう
セルマックスが怒りのあまりに首をふって咆哮をあげた。

そのうしろにあらわれたのはピッコロだ！

「もらったあ！　はあああ～……ッ！」

ひだり　て　　こう　とう　ぶ　　はげ　　こう　だん
かまえた左手からセルマックスの後頭部に、激しい光弾がはなれる！

ズガァァァッ！

「ガ……ガガ……」

「やったあ！」

ひか　　かん　せい
ガクガクと光りながらふるえはじめたセルマックスに、トランクスが歓声をあげる。

おも
だがしかし、そう思ったのもつかのま。

あたま　　ひかり
セルマックスの頭の光は、あっというまにおさまってしまった。

「……きいてない……!?!」

「ガアアアア～!!」

おどろ まえ おお さけ ごえ
驚くピッコロたちを前に、セルマックスがいっそう大きな叫び声をあげる。

どう じ さき あな ひかり すじ なん ぽん
同時に、ふりあげたしっぽの先のいくつもの穴から、光の筋が何本もはなたれた。

ゆび さき かた はら からだ ば しょ いち めん ふ
さらに指先、肩、腹と、体のあらゆる場所からも、あたり一面に吹きだすようにはなたれる。

「ぐあっ！」

「うわあああ～!!」

「ひいひい～っ！ こっ、こんなのありかよ!!」

じゅうおう む じん かい こう せん ひ めい
縦横無尽にふりかかる怪光線に、トランクスたちは悲鳴をあげるしかなかった。



その光は、上空からはなれたブルマたちのもとへも降りそそいでいた。

クリリンはブルマをかばいながら、前のほうで闘いを見ていたパンを呼んだ。

「くっ……パーン！」

怪光線で起きた爆発から、パンが必死に逃げている。

が、その足元がくずれおちた。

「パーン！ 飛ぶんだ～!!」

クリリンが必死に叫ぶ。

その声にこたえるように、パンの体が浮かびあがった。

「！」

爆炎の中から飛び出したパンは、飛べた自分に驚いているようだ。

きょんとした顔で、空中に浮かぶ自分の体を見おろしている。

「パン、だいじょうぶか？」

「うん……」

パンの答えにホッとして、クリリンは背中中のブルマに声をかけた。

「ほらー、オレがいてよかったじゃないすか」

「……まあね。いつでも逃げられるように飛行機で待機していたほうがよさそうね」

苦笑いをするブルマを連れて、三人は飛行機へといそぐことにした。

そのころ、怪光線に破壊され煙におおわれた現場では、トランクスがある秘策を思いついていた。となりの悟天に話しかける。

「おい悟天、フュージョンだ！ フュージョンするぞ！」

「フュージョン……!? お、覚えてるかな……」

不安げな悟天を連れて、トランクスは足場のある岩場に立った。

奥ではセルマックスが暴れている。確認している時間はない。

二人は腕を大きく上にまわした。同時に足をちょこちょこと動かし左右に移動する。伸ばした腕を思いきり外側に引いて、片足をあげてピタリと止まる。

そのポーズをきめたまま、二人で大きく腰をひねり――

「「フュー……ジョン！」」

つきだした指と指をチョンツとくつつける。



「「はっ！」」

だが、その動きはひさびさで、指先が微妙にずれてしまっていたようだ。

不完全なフュージョンで光の中からあらわれたのは、でっぴり太ったゴテンクス。

「「……し、失敗だ……くそ、しょうがない！」」

けれどやりなおしている時間はない。

ゴテンクスは汗をかきながら、気を高めた。

「「超サイヤ人！……あ、あれ……？」」

中途半端にフュージョンしたゴテンクスは、一瞬だけオーラをだしかけ、すぐに元にもどってしまった。まさかの様子に、ピッコロが啞然とした表情をむける。

「「くそ……こうなったら、突撃だ！」」

がむしゃらに飛びだしたゴテンクスを、セルマックスのしっぽが簡単に一蹴した。

「「わゝゝゝ！」」

「!？」

まっすぐつつこんできたゴテンクスを、邪魔だとばかりに18号がはじき飛ばす。

「「おわっ！ わっ、わああああっ！」」

ゴテンクスが飛んだ先にいたのはガンマ2号。彼にも思いきり蹴りあげられる。

その先にいたガンマ1号は、ゴテンクスをそのまま下へとたたきおとした。

「「ひいいいゝゝゝ、……おっ!？」」

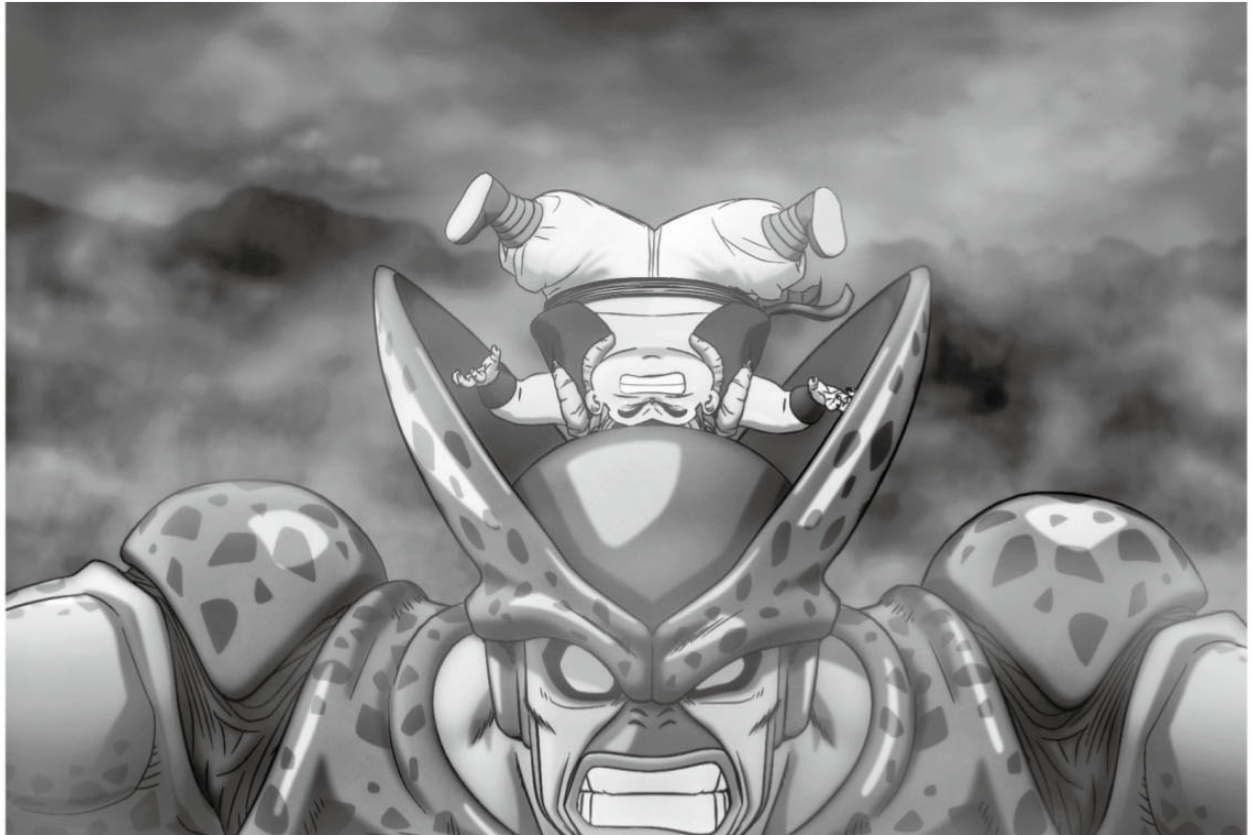
しかしちょうどその真下に、セルマックスの頭が見える。

「「しめた！」」

ガンマ1号から殴られたいきおいで、重力を増して落下するゴテンクスが、盛大な頭突きをお見舞いする！

「「だ〜!!」」

ガン!!



おお おと あたま はい
大きくぶい音がして、セルマックスの頭にヒビが入った。

「「おお～！」」

まさかそうなるとは思っていなかったガンマたちが、感嘆の声をあげる。

はじ しっ ばい やく た
「初めてフュージョンの失敗が役に立ったぞ……！」

おどろ こえ よろこ いろ
ピッコロも驚きつつ、声に喜びの色がのる。

はい あたま いか かお
だが、セルマックスはヒビの入った頭のまま、怒りにそめた顔をあげた。

とう ちよう ぶ こう げき た
頭頂部への攻撃はできたが、パワーが足りなかったようだ。

「ガアアアッ!!」

おお くち かい こう せん れん ばつ
ガバリと大きく口をあげ、怪光線を連発する。

ばく はつ お ふ と まる
いたところで爆発が起こり、ゴテンクスは吹き飛ばされてしりが丸だしになってしまった。

つよ こう げき
「ハア……ハア……もっと強い攻撃じゃないと……」

いき こ はん かんが
あらく息をつきながら、悟飯は考えをめぐらせる。

こう こえ
と、ガンマ2号が声をはりあげた。

と どう ぐ こう げき からだ
「おい！ おまえたち、はなれたところからいっせいに飛び道具でセルマックスを攻撃してくれ！ 体のどこでもいい！」

「え？ ……どうするつもりだ!？」

こ はん き ごう ごう かお
悟飯が聞くと、ガンマ1号がガンマ2号に顔をむけた。

「……おまえ、まさか」

こた ごう わら
答えない2号がニヤリと笑う。

「やめろ!!」

「もうおそい」

「だったらオレも……！」

せつ とく はな ごう ごう お く ちょう い
説得しようと話すガンマ1号に、ガンマ2号は落ちついた口調で言った。

ごう はかせ たす
「1号はヘド博士を助けてあげてくれ」

「……なに!？」

こと ば ごう み
その言葉にハッとして、1号はいそいであたりを見まわした。

せいたい み はかせ し
「生体スコープで見てみろよ。博士は死んでいない……」

せいたい はん のう
いそいでサーチにきりかえると、生体スコープに反応がでた。

「……あ！」

さい しょ ばく はつ ふ と なか たお
最初の爆発で吹っ飛ばされていたヘドが、ガレキの中で倒れている。

き うしな いき
気を失ってはいるが、どうやら息はあるようだ。

「慎重さが足りないな」

喜びと驚きの表情を浮かべる1号に、2号はいつも彼から言われていた台詞を言った。

フツと笑い、すかさず気合いを入れて拳をにぎる。

「……ハアアアア～！」

ガンマ2号の体が光りはじめた。

「さあやれ!! そしてボクが攻撃をしかけたら、思いっきり遠くに逃げるんだ!!」

驚く悟飯たちにそう叫ぶと、ガンマ2号はぐんぐん上昇を始めた。

「あいつはなにをするつもりだ！」

「突撃する気だ！」

見あげるピッコロに、ガンマ1号が叫ぶ。

空高く上昇を続けた2号の体は、成層圏にでて止まった。

邪魔の入らない場所で、パワーを極限まで高めるつमりのようだ。

2号の決意を受けて、悟飯たちはいっせいにセルマックスへの攻撃を始める。

その様子は、はなれた上空にあるブルマの飛行機からでもはっきりと見えた。

「な、なにやってるのかしら」

「いっせいに攻撃を浴びせているですよ！ オ、オレも!!」

そういうことなら、攻撃の手はたくさんあるにこしたことはないはずだ。

走りだしたクリリンに、ブルマがあわてて声をかける。

「クリリン！ 気をつけなさいよ！」

クリリンは親指を立てると、後部ハッチから飛びだしていく。

下では、怒りのセルマックスへ、全員がいっせいに攻撃をしかけている真っ最中だ。

「はゝゝっ！」

「うおおおおお～!!」

「はっ!!」

悟飯とピッコロが気功波をはなち、ガンマ1号が光線銃を連射する。

「「ペロペロペー!!」」

物理的な戦力にならないゴテンクスも、アカンペーをしてセルマックスの気をそらそうと必死だ。18号も光弾をはなつ——
が、次の瞬間、高速移動したセルマックスの手がせまった。

「くっ……しまった……！」

「気円斬!!」

「ガッ……」

^{き き いっ ばつ}
危機一髪。

^{き えん ざん} クリリンのはなった気円斬が^{ひたい}セルマックスの額にあたる。

^{ちゅう い} 注意がそれたその^{しゅん かん}瞬間、^{じょう くらみ}上空を見あげたガンマ1号が^{ごう こえ}声をあげた。

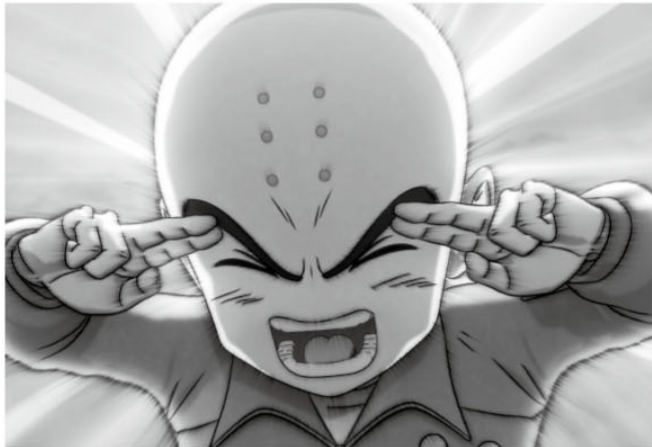
「きたぞ！ はなれろ!!」

^{ごう} ガンマ2号がフルパワーになった^{あい ず}合図だ。

^{こえ} その声に、いち早く^{はや はん のう}反応したのはクリリンだ。

「みんな、目をつぶって！ ^め太陽拳!!」

^{りょう て} 両手の人差し指と^{ひと さ ゆび}中指を^{なか ゆび}額にあてて^{ひたい}そう叫ぶと、^{さけ}カッと^{はげ}激しい^{ひかり}光があたりに^み満ちる。



とつぜんのまぶしさを直視してしまったセルマックスが、目をおさえてよろめいた。

「グオオオ……ッ」

いまのうちに、できるだけ遠くへはなれなければ！

悟飯はゴテンクスの襟首をつかみ、ピッコロたちもそれぞれセルマックスから距離を取る。

ガンマ1号は地上にむかうと、倒れているヘドをかばうようにおおいかぶさった。

まばゆさに目をおおっていたセルマックスが、上空の気配に気づいて顔をあげ――

「……!？」

その顔が驚きにそまった。

雲をつき破りながら、ガンマ2号が猛スピードでつつこんでくる。

「はッッッ!!」

ねらいはセルマックスの頭のとっぺんだ。



「いけえ！っ！」

ピッコロが^{さけ}叫ぶ。

ドゴーン!!

あたりにひびく^{はげ}激しい^{しょうとつ}衝突音^{おん}。

だがそれは、セルマックスが^{ひだりうで}左腕で^{ごう}ガンマ2号の^{とつげき}突撃を^{おと}ふせいだ音だった。

「おおおおっ！」

それでも^{ごう}ガンマ2号はあきらめない。

^{じしん}自身の^{しゅつりょく}出力を^{さいだいげん}最大限まで^ひ引きあげて、セルマックスの^{うで}腕ごと^{つよ}強く^お押しこんでいく。

^{しょうげき}衝撃で^{ばくはつ}爆発が^お起き、^{あつりょく}圧力に^お押されたセルマックスの^{うで}腕に^{はい}ミシミシとヒビが入った。

「グオオオ……!？」



さらに押されて、地面がへこむ。2号の顔にもビキビキと亀裂が生じはじめる。

「ガアアアア！」

驚愕に目を見開くセルマックスが、耐えきれなくなった左腕を右手で支える。

2号も最後の力をふりしぼって、全圧力をセルマックスへと押しこんでいく。

「オオオオオオ!!」

バキンッ！

衝撃に耐えきれず、セルマックスの左腕が音を立てて地面に落ちた。

「やっ、やった……！」

はなれた場所から勝負のゆくえを見守っていたクリリンが、思わず歓声をあげる。

2号の決死の攻撃が、きまったように見えたのだ。

だが、不気味な静けさをまとって立ちつくすセルマックスの姿が、じょじょに浮かぶと——

「まだだ！」

その姿に、ピッコロはギリッと奥歯をかみしめたのだった。

その
10

孫^そ悟^ん飯^ごの^{はん}本^{ほん}当^{とう}の^ち力^{から}



ガンマ2号の決死の攻撃は、セルマックスにふせがれてしまった。

けれど、ハアハアとあらい息をつくセルマックスの左腕は、ひじから先がない。

渾身の一撃は、さすがのセルマックスにもそうとうなダメージをあたえたようだ。

セルマックスの視線が、力なく地面に落ちたガンマ2号にむけられた。

「グアアアア！」

怒りのままガンマ2号を踏みつぶそうとする左足に、ピッコロは叫びながら飛びだした。

「やめろ～!!」

一気に加速するピッコロの体が、ボンツとオレンジ色に変わる。



ガンマ2号にとどく直前、どうにか両手でその足をおさえる。

だが、セルマックスはピッコロごと踏みつぶそうとするかのように、さらに足に力を入れた。

「……!? グッ!!」

オレンジピッコロになってさえ、パワーの差は歴然だ。

耐えるだけで精一杯のピッコロへ、超サイヤ人になった悟飯が光弾を撃って助け船をだす。

「ガアアッ!!」

左から激しい連弾を受けて、セルマックスが怒りに咆えた。

その反対側から、今度はクリリンが全身を使ってキックを見舞う。

ほとんど同時にゴテンクスが巨体であごへと頭突きした。

不意をつかれた連続攻撃に、セルマックスがわずかによろめく。

「どうだ！ ……、わわわ～っ!?」

けれど次の瞬間、口や目から怪光線の反撃がきた。

逃げまどう二人に、セルマックスが怪光線をはなちまくる。

そのスキに、1号はぐったりと倒れたガンマ2号を助けだした。

ていねいに抱きおこし、まだ意識のないヘドのそばへとそっと寝かせる。

「……………」

そうしてすぐに自分は闘いの場へともどる。

セルマックスの足元では、踏みつぶされまいと耐えているピッコロのそばに、クリリンが援護にやってきた。すべりこんでいっしょにセルマックスの足を支える。

「ぐおおお～」

「ピ、ピッコロ……デカくなれよ……」

重さに必死で耐えながら、クリリンはピッコロにそう言った。



「昔、デカくなったことあっただろ……天下一武道会で」

そう言われて、ピッコロはふと思い出した。

ピッコロがまだピッコロ大魔王だったとき、悟空との闘いでたしかに巨大化したことがある。

「……そうか、忘れていた」

なつかしい思い出にニヤリと笑うと、ピッコロは気合いを入れた。

「うおおおお～っ！」

見るまにピッコロが巨大化していく。

「ガァ……？」

ぐいっと左足を持ち上げられたセルマックスがバランスをくずした。

そのままピッコロに投げられたセルマックスは、自分と同じ大きさまで巨大化したオレンジピッコロを警戒するように距離を取る。

「グガァアアアツ！」

「ウオオオオオツ!!」

怒りの雄叫びをあげるセルマックスの正面から、ピッコロも気合いの雄叫びをあげかえす！

にらみあうピッコロの横に、飛んできた悟飯がならんだ。

「ピッコロさん、大きくなれるなんて……もしかして、勝てるんじゃないですか？」

「……あまいな」

「え？」

うれしそうな悟飯に、巨大ピッコロは前を見たままで答える。

「デカくなっても、強さはたいして変わらない。ただのハッターだ……」

ということは、そのハッターでセルマックスをひるませているということだ。

驚く悟飯をよそに、巨大ピッコロは、ハッと思い出して帯をさぐった。

「そうだ！ んっ？ んっ？ ……デカイとさがしにくいな……あつた！」

悟飯の前にさしだされた指の先には、ちよこんと仙豆がのっている。

「オレが食べようと思っていた仙豆だ。おまえが食べ」

「えっ？ さっき食べなかったんですか？ そんな、ピッコロさん、食べてくださいよ」

元はといえば、もらった仙豆を落としてしまった自分が悪い。

こま
困ったように言った悟飯を、ピッコロはじろりとらんだ。

く
「いいから食べ！」

「でも……」

さく せん おも
「作戦を思いついた」

はなし お い たい ど ご はん せん ず た
話は終わりだと言わんばかりの態度に、悟飯はしぶしぶ仙豆を食べた。

「はっ!!」

の からだじゅう き
飲みこんだとたん、体中から気があふれだす。

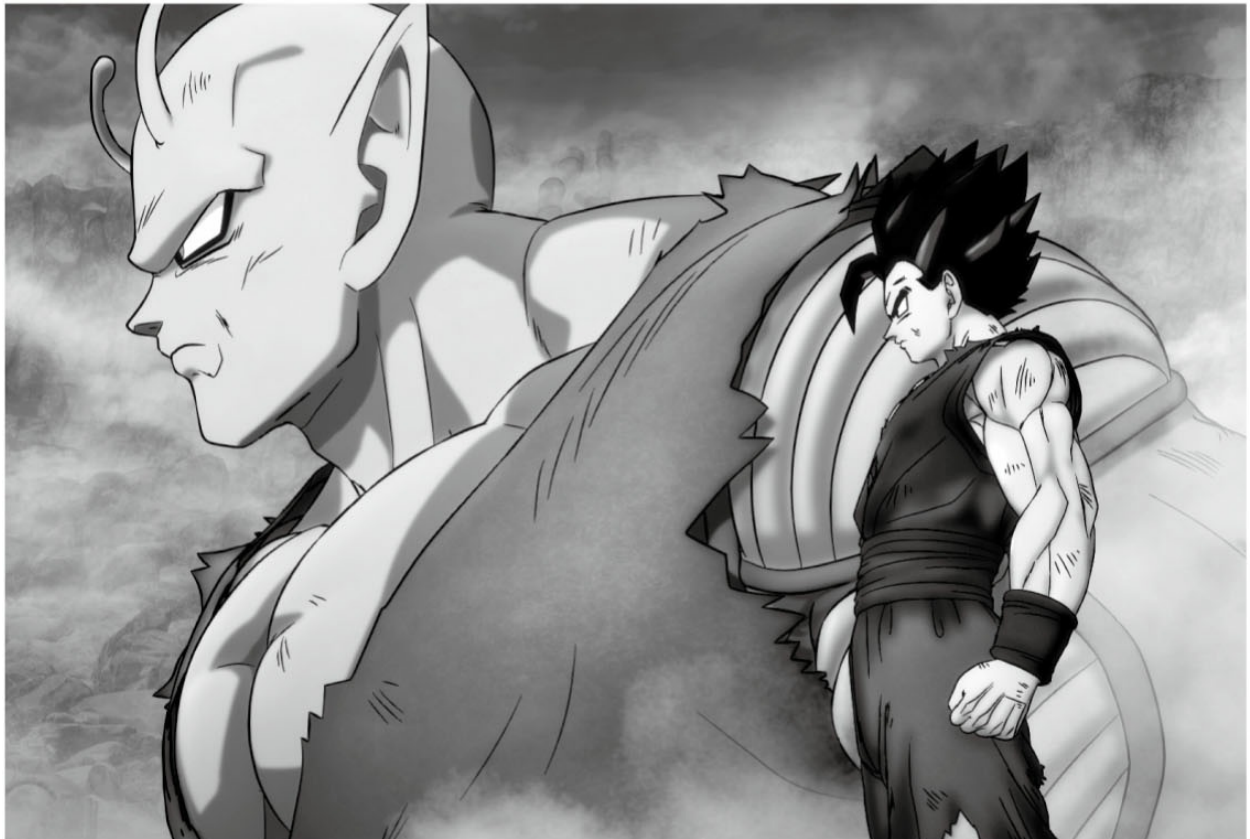
き あ い ご はん つちけむり
気合いを入れた悟飯のまわりから土煙がひろがった。

きん いろ しず かみ め くら
金色のオーラは静まって、髪も目も黒へともどっている。

スーパー じん ご はん
超サイヤ人のときよりもさらにするどいひとみの、アルティメット悟飯だ。

ご はん き き よ いち ばん つよ じ ぶん しん かい ほう
「悟飯、よく聞け！ おまえがその気になれば、この世で一番強い。自分を信じて、すべてを解放するんだ！」

ご はん きょ だい かた
アルティメット悟飯に、巨大なオレンジピッコロが語りかける。



「^み見せてくれ、^{ほん}本当の^{ちから}力を。その^{ちから}力で^{ちきゅう}地球を^{まも}守るんだ！」

「……はい！」

^{よこ}横目で見つめる^みピッコロに、^ご悟飯は^{しょうめん}正面を見すえながらうなずいた。
そのときだ。

「ガアアアア〜ッ」

「くるぞ！」

^き気合いの^{はい}入った^お雄叫びをあげ、^{とっしん}セルマックスが^{かいし}突進を開始した！

^{きょだい}かまえた巨大^{みぎ}ピッコロが、^{みぎ}右の^{こぶし}拳で^{おく}奥へと^ふ吹っ飛ばされる。

そのいきおいのまま、セルマックスは^ご悟飯に^{みぎ}右ひじをくりだした。

が、ふせいだ^ご悟飯は、^{うで}すかさずその^け腕ごと蹴りあげる。

そのまま^{がんめん}顔面へと^{たい}体あたりされたセルマックスは、^ごかみつように^ず悟飯に^つ頭突きをしようとした。よけた^ご悟飯に、^{さき}先の^{ひだりうで}ない左腕
をぶんまわしてたたきつける。

「うおおお〜！」

^{はし}走ってきた巨大^{きょだい}ピッコロが^{みぎ}右キックをくらわせて、さらに^{れんぞく}連続で^け蹴り^{つづ}続ける。

「……………」

だがセルマックスに^{こうげき}攻撃がきいたようすはない。

^{おどろ}驚く^{はら}ピッコロの^{おも}腹に、^{みぎこぶし}重たいセルマックスの^{みぎ}右拳がめりこむ。

「ぐはあっ！」

^{おも}思わずうめいた^{ひだりうで}ピッコロへ、セルマックスはさらに^{ひだりうで}左腕をふりあげた。

^{くう}空をきったと思った瞬間、^{おち}下からの^{しんかん}ひざ蹴りが^{した}ピッコロを^げ空へと^{そら}吹っ飛ばした。

「ぐはあっ！」

^{あし}足を取られ^と地面に^{じめん}たたきつけられた^おピッコロを追うように、セルマックスがジャンプする。

^{こうだん}すんでのところでよけた^てピッコロは、^{つく}光弾を手^てに作り、それでセルマックスの^{かお}顔を^{なぐ}殴った。

ドゴォン！

そこへ、^ご悟飯が^{した}下から^{した}アッパーでつきあげる。

セルマックスが起きあがると、^お眼前を^{がんぜん}悟飯が^ご猛スピードで^{もう}通り^{とお}すぎた。

「！」

^{いか}怒りにまかせてセルマックスが^おあとを追う。

^き基地の^{ちゅうおうぶ}中央部に^{きゅう}ある^{うご}クレーターで^と急に^ご動きを^{みぎ}止めた^ご悟飯に、セルマックスが^{みぎ}右パンチを^{けいさん}ふりおろした。だが、それも計算だ。
^ご悟飯は^{しゅんびん}俊敏な^{うご}動きで、セルマックスの^し視^{かい}界から消える。

「……？ ……」

^{きゅう}急に^ごなくなった^ご悟飯に、セルマックスは^さきよろ^みきよろと^み左右を見まわした。

つぎ しゅん かん
次の瞬間。

セルマックスの足元にビビビビ！ と悟飯のはなった光弾が走り、そこから一気にくずれだす！

「ガア……!？」

あし ば うしな と
足場を失ったセルマックスは、あわてて飛びあがろうとした。

が、そうはさせじと上から光弾がはなたれる。

「ガアアアア！」

ちよく げき う ご はん み お
直撃を受け、くずれおちていくセルマックスを悟飯が見おろす。だが、これで終わりではない。

「ハア……ハア……くそ、おまえら、ちょっとこい！」

あらく いき きょ だい よ
あらく息をつきながら、巨大ピッコロが呼びかける。

ちから つか き うしな ごう い がい すこ おく ご はん
力を使い果たして気を失っているガンマ2号以外が、ふらふらになりながらもピッコロのもとへとやってきた。少し遅れて悟飯もくわる。

「……悟飯！」

「はいっ！」

「オレがなんとかしてあのクソツタレを地面に倒す！ チャンスを見て、かめはめ波でもなんでもいい……めいっばいパワーをためてから、ヤツの頭をつらぬけ！」

「わ、わかりました！」

「めいっばいだぞ、遠慮はするな。すべての力をこの一撃に込めろ！」

「はいっ！」

ねん お ご はん しん けん かお
念を押されて、悟飯は真剣な顔でうなずいた。

けれど、その一撃をあてるために、あのセルマックスをおさえつけるのは一筋縄ではいかないだろう。

あし ど さい ご ご はん いっ かい しん けん しょう ぶ
足止めをするピッコロも、最後をまかされた悟飯も、どちらも一回きりの真剣勝負になる。

ち ちゅう き うご
地中からセルマックスの気が動いた。

「くるぞ！」

ピッコロのかけ声とともに、地面が大きく揺れ、不気味な赤いオーラがふきだしてくる。

それを追うように、地中からセルマックスがのぼってきた。

「ガアアアッ！」

いか さけ まえ た ご はん し じ
怒りに叫ぶセルマックスの前に立ち、ピッコロが悟飯に指示をだす。

「……悟飯！」

「ハイ！」

悟飯は最後の^{ごはん さいご いちげき}一撃のために、^{いっき}一気に^{たか}パワーを高めはじめた。

悟飯から^{ごはん き}気をそらせるように、^{さけ}ピッコロは叫びながらセルマックスへとつっこんでいく。

「うおおおおおっ〜!!」

^{りょうて}両手をつきだす^{みぎ て ひだりうで}ピッコロに、セルマックスは^く右手と左腕でガシッと組みあう。

「ガアア……」

「ぐおお……っ」

けれどやはり、^おピッコロがじょじょに押されはじめた。

と、^{かいてん}すかさずセルマックスがぐると回転し、^うしなるしっぽを打ちつけてきた。

「ぐはっ！」

^{かえ うご みぎ}返す動きで右の^{ひだりうで}アッパーを^{たい}くりだされ、^{つぎ つぎ こうげき}左腕、体あたりと次々に攻撃がきまる。

^{あたま}ピッコロは頭をつかまれ^{じ めん}ふりまわされると、しっぽで地面にたたきつけられた。

「ピッコロさん!!」

「くるな！ ^{き しゅうちゅう}気を集中させろ!!」

^{たす}とっさに助けようとした^{ごはん}悟飯へ^{さけ}ピッコロが叫ぶ。

「ここからが……^{ほん き たたか}本気の闘いだ……」

^たピッコロはフラフラと立ちあがると、^{て こう ち}ぐいと手の甲で血をぬぐった。

「ガアアア！」

「うおおおお〜！」

^{とっ しん}突進するセルマックスの^{みぎこぶし}右拳に、^{こぶし}ピッコロも拳をふりかぶる。

クロスカウンターが、^{が ん めん}おたがいの顔面にめりこんだ！

^{いつしゆん}一瞬ぐらついたセルマックスだが、^{ついげき}すぐさましっぽで追撃してきた。

「ガフツ……！」

^{みぎ ばら}右わき腹にも^げひざ蹴りをくらった^{からだ}ピッコロの体がぐらりとよろける。

が、^{ゆる い}それすらも許さないと^け言わんばかりに、セルマックスがあごを蹴りあげた。



巨大なパワーのぶつかりあい、クリリンたちは手をだせない。

「悟飯、まだか!? ピッコロが死にまうぞ！」

(もう……少し……)

いまずぐにも飛びだしていきたい気持ちをおさえながら、悟飯はギリッと奥歯をかみしめる。

集中して、もっとパワーをあげないと――

「ぐあっ、うおっ、がはっ、おうっ、ぐえ……っ！」

けれどピッコロへの攻撃は、だんだん激しさを増していく。

しっぽで殴りつけられて、よろけた頭にセルマックスのハイキックが飛んでくる。

背中をひじで打ちつけられ、踏みつけられ、殴りつけられる。

「ぐ……ぐぐ……」

あまりに一方的な攻撃に、ゴテンクスはどうも我慢ができなくなった。

「「うおおお～!!」」

「あ、バカ！」

クリリンの制止も聞かず、叫びながら二人のあいだへとつこんでいく。

だがフュージョン失敗のゴテンクスなど、セルマックスの敵ではない。

いともあっさりとガードされ、左腕ののこった部分だけでたたきおとされる。

あわてて追いかけていたクリリンに、セルマックスは矛先を転じた。

「わわっ……！」

そのうしろからやってきたのは18号だ。

さっきのおかえしとばかりに、クリリンにせまるセルマックスを蹴りつける――

が、怒ったセルマックスは、ガシリと18号をつかみあげた。

「くっ……うわあ……」

「がっ!!」

ふりまわすセルマックスの拳が、クリリンに激突し、二人は吹っ飛んだ。

と、セルマックスが、ふとなにかに気づいて顔をあげた。

「!?」

ガンマ1号が、銃口をセルマックスにむけて目前にせまっている。

ドゥッ！

「グオオ……！」

至近距離ではなたれた光線銃の衝撃に、セルマックスがしっぽを大きくふりあげた。

ガンマ1号は、地面にたたきつけられてしまう。パワーはほとんどのこされていない。

すぐそばには、倒れたままのクリリンと18号が、そしてガレキに刺さったゴテンクスの足だけが見える。

「くそっ……」

気を高め、パワーをためることに集中しながら、悟飯は歯がみした。

ピッコロの息もかなり限界まであがっている。

けれど背後に感じる悟飯の気の昂ぶりは、いままでにないほどすごいものだ。

「ヤツを止めれば……」

チャンスはある。

だが、そう思った瞬間、セルマックスに一気に間合いをつめられ、肩で体あたりをくらった。

「ぐお……があ！　ぐふっ！」

さらにボディに左キック、すかさずあごに右ひざを連続できめられ、とどめとばかりにセルマックスのしっぽがピッコロにふりおろされる！

ガッ！

だがピッコロは、しっぽを両手で受け止めた。

ゼエゼエとあらい息をつきながらも、そのしっぽの先でセルマックスを殴りつける。

「ガハ……！」

体勢をくずされたセルマックスが、ふたたび口から怪光線をだした。

よけきれなかったピッコロの左腕が一瞬で消し飛ぶ！

「がっ！」

そのまま体あたりしてきたセルマックスが、容赦なく拳を連続でくりだす。

「ぐあっ、がはっ、ごほっ！」

ほとんどサンドバッグのように殴られ続けるピッコロに、悟飯の集中も限界に近い。

「このままではピッコロさんが……！」

「待て……かならず、止めて、みせる……！」

飛びだそうとした悟飯に、ピッコロがふたたびまったをかける。

並々ならぬ覚悟を見せられて、悟飯はどうにか踏みとどまった。

けれどそんな悟飯の目の前で、ピッコロの体が吹っ飛ばされて、大きな岩にぶちあたる！

「がはっ！」

高速で追いかけたセルマックスは、さらに何度も顔面を殴りつけた。

「ぐあ……がはっ！　ぐわっ！　がああっ！」

苦しげな悲鳴がひびきわたり、あたりに土煙が舞いあがる。

「ガァ……」

やがてぐったりとしたピッコロを、セルマックスはゴミでも投げるように、ポイツと上空へとほうり投げた。
無造作に右手をつきあげる。

ドドドドド……ッ

そうしてはなれる連続の怪光線が、上空のピッコロにこれでもかと撃ちつけられた。

「あ……あああ……」

ボロボロになったピッコロが、重力に逆らえずに落ちてくる。

それを待ちかまえ、受け止めたのは、セルマックスの右手だ。

「……や、やめろ……」

これから起こるだろうことを予測して、悟飯は目を見開いた。

セルマックスの右手が、ブウン、と不気味な光をはなちはじめた。

怪光線の光が、見せつけるようにどんどん強くなっていく。

勝ち誇ったように絶叫するセルマックスが、ニヤリと下卑た笑みを浮かべる。

ぐったりと力ないピッコロの様子に、悟飯の中でなにかがブツンと音を立てて切れた。

「うわあああ～!!」

激しい気持ちを解きはなつように悟飯が叫ぶ。

同時に、悟飯から青白いオーラがこれまでにないほど爆発した。

「!?」

まばゆい光が一瞬であたりをつつみこみ、発生した衝撃波がセルマックスを驚かせる。

「……………」

怒りの表情をたたえた悟飯の髪の毛は、シルバーにそまって逆立っていた。

その髪はあふれるパワーをしめすかのよう伸びている。

ひとみは、すきとおるような赤い色にそまっていた。

アルティメット悟飯の限界を超えて覚醒し、ついに究極の姿へと到達したのだ。



「ガァアアッ！」

セルマックスはあわてたように、ピッコロをわきへと投げた。

同時に右腕をふりあげながら悟飯にむかって突進し、下から右拳をつきあげる！

「……………」

だが、悟飯は微動だにしない。

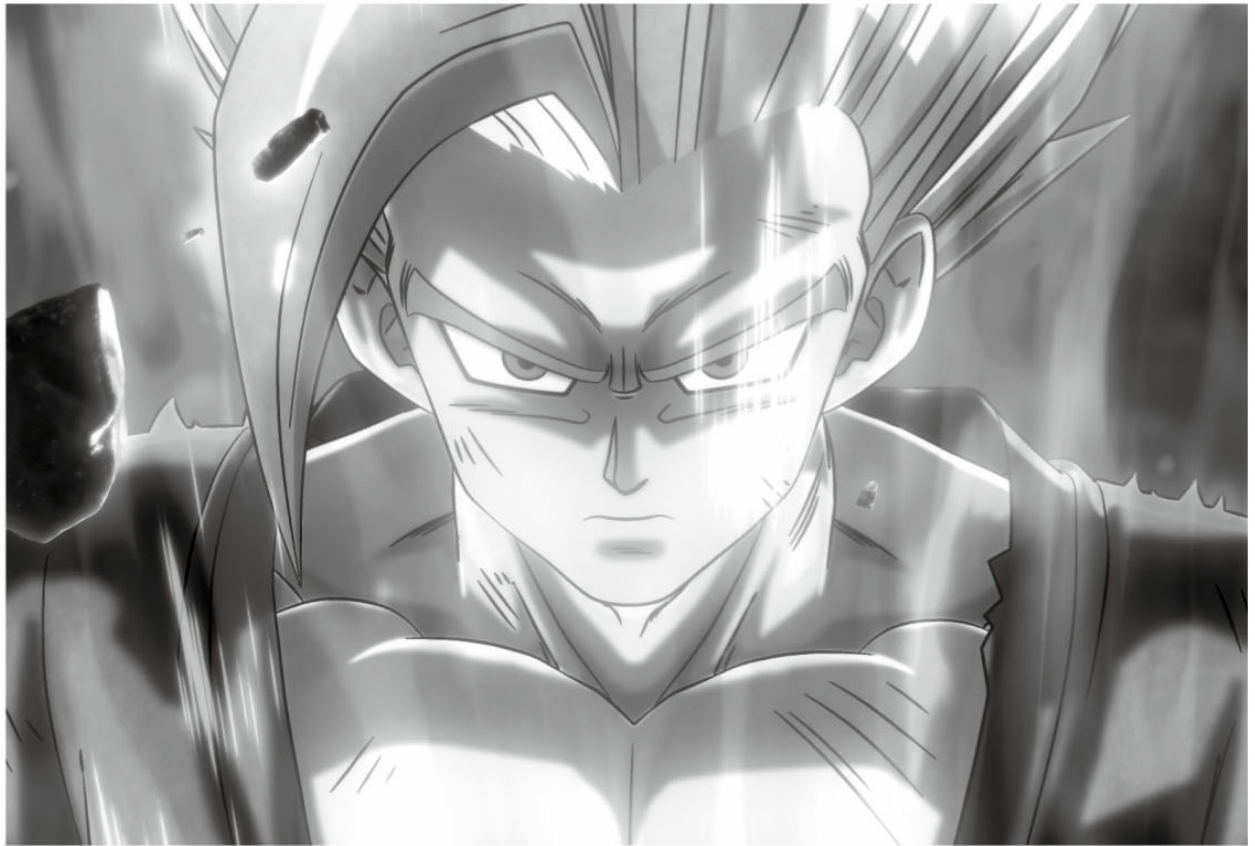
そのうしろに激しい衝撃波と土煙が立つだけだ。

「……この程度か」

「グ……ググ……」

まったくダメージのない悟飯に、セルマックスがあせりの表情を浮かべる。

「今度は、ボクの番だ……」



しず　こえ　せんげん　ごはん　こぶし　かる　お
静かな声で宣言すると、悟飯はセルマックスの拳を軽く押した。

「ハアツ！」

すかさず強烈な飛び蹴りを、巨大な腹にめりこませる。

セルマックスは奥の岩山まで吹っ飛び、激突した。

「グ、ガァァァ.....！」

うえ　み　ごはん　いか　も　め
上から見おろす悟飯に、セルマックスは怒りに燃える目をむけた。

みぎ　て　うえ
のこった右手を上にあげる。

「オオオオオ.....」

く　き　ごえ　し　だい　はげ　ねつりょう　か
空気をゆるがすうなり声が、次第に激しい熱量に変わる。

よう　す　ご　はん　め　み　ひら
様子をうかがっていた悟飯は、ハッと目を見開いた。

「!？」

みぎ　て　ぼう　だい　ひ　こう　だん　き
セルマックスの右手に、膨大なエネルギーを秘めた光弾ができつつあることに気づいたのだ。

み　あん　こく　こう　だん　ち　きゅう　ひょうめん　ちよう　きょ　だい
見るまにふくれあがった暗黒の光弾は、地球の表面をおおような超巨大エネルギーとなる。

しゅう　い　き　だん　いん　りょく　す　きょ　だい　うず　はっ　せい
周囲のガレキがセルマックスの気弾の引力にぐんぐん吸いあげられて、巨大な渦が発生する。

「.....」

ご　はん　どう
けれど悟飯は動じない。

え　う
それどころか、なぜかニヤリと笑みを浮かべてさえいる。

せん　とう　この　じん　ほん　のう　ご　はん
戦闘を好むサイヤ人として本能在悟飯をそうさせているのか。

ちよう　きょ　だい　き　だん　いつ　き　ぎょう　しゅく
超巨大な気弾をうみだしたセルマックスは、エネルギーをギョント一気に凝縮させた。

みぎ　て　も　おお　う　ちゅう　の　ちよう　きょ　りょく　き　だん
右手で持ち上げられるほどの大きさだが、宇宙を飲みこむブラックホールのような超強力なセルマックスの気弾は、まわりからエネルギーを吸収して、さらにどんどんパワーをあげる。



そのときだ。

「ガァッ!？」

気弾をかかげた腕ごと、セルマックスになにかがぐりと巻きついた。

驚くセルマックスの視線の先にいたのは、ボロボロになったオレンジピッコロだった。

腕を伸ばし、鞭のようにしならせ、セルマックスの上半身をがっしりと固定している。

「悟飯！」

「——ハッ!？」

ピッコロの叫びで、悟飯は我に返った。

やるべきことを思いだし、ふたたびすさまじい気が悟飯から発せられる。

「グウ……！」

セルマックスは巻きつくピッコロの腕からのがれようと必死だった。

「!？」

と、セルマックスはただならぬ気配を感じて動きを止めた。

いつのまにか遠くはなれた場所に立った悟飯が、額に指をあてている。

その指先からあふれだした強烈なパワーが、悟飯の体を暴風のように取り巻いて、空高くへと竜巻のようにあがっていた。

「グ、ググ……！」

本能的な恐怖を感じ、セルマックスはあわてて背中中の羽をひろげた。

羽音をうならせ空に逃げようとするセルマックスを、ピッコロが腕で引きとめる。

それでも飛ぼうとがかれて、ピッコロは失った左腕を気合いで再生した。

その腕も伸ばして、さらにセルマックスの右足にからみつける。

「おとなしく、してろ！」

ふりほどこうと暴れるセルマックスは、ピッコロに抵抗されながらも、少しずつ空へと上昇しはじめた。

ピッコロが悟飯に叫ぶ。

「悟飯ー！ 撃てーっ！」

悟飯のまわりですさまじい気が渦を巻き、青白い稲光となって空をつらぬいた。

「魔貫光殺砲！」

悟飯^{ごはん}の人差し指^{ひとさしゆび}と中指^{なかゆび}の先^{さき}が、まっすぐセルマックスへとむけられる！

はなたれた魔貫光殺砲^{まかんこうさっぽう}が、セルマックスへと猛スピード^{もうの}で伸びてきた。



「グガ、ア、ガアア……！」

おそろしいほどのパワーを秘めた光線に、セルマックスはパニックになった。

右手にかかげた気弾を、魔貫光殺砲にむかってぶん投げる！

ブウン！

真正面から巨大なエネルギーがぶつかり、セルマックスの気弾にぐにやりとゆがみが生まれた。

そのゆがみをつきやぶり、悟飯の魔貫光殺砲はセルマックスめがけてつき進む！

ピッコロはその瞬間を逃さなかった。

もがくセルマックスの頭を、はがいじめでおさえつけ——

ズガアアアアアツ!!

セルマックスの頭頂部を、魔貫光殺砲がつらぬいた！



こえ　ち　じょう　お　あたま　こな　こな
声もなく地上へと落ちていくセルマックスの頭は粉々になっている。

そこ　たお　み　いき
クレーターの底へ倒れおちたセルマックスを見て、ピッコロはようやくホッと息をついた。

ご　はん　し　せん　おく　ご　はん　き
なしとげた悟飯にニヤリと視線を送る。と、悟飯もピッコロに気づいたようだ。

「やった……やったぞ……！」

ち　じょう　ごう　よろこ　こえ
地上ではクリリンと18号が、喜びに声をあげる。

ごう　に　けい　こく
だが、そんなクリリンたちにガンマ1号が逃げながら警告した。

ばく　はつ
「爆発するぞ！　はなれろーっ!!」

たたか　お
そう、まだ闘いは終わっていないのだ。

う　ひ　ぜん　そくりく　と
ピッコロはすぐさま埋まっているゴテンクスを引っ張りだし、全速力で飛び出した。

ご　はん　ごう　つづ
悟飯、クリリン、18号もあとに続く。

ま　なか　からだ　き　みょう　うご
クレーターの真ん中で、セルマックスの体が、ブクッ、ブクッと奇妙にふくれて動きだした。

もう　と　に　ご　はん　ひかり　すじ　からだ
猛スピードで飛んで逃げる悟飯たちのうしろで、光の筋がチカチカと体からあふれだし——

つぎ　しゅん　かん
次の瞬間。

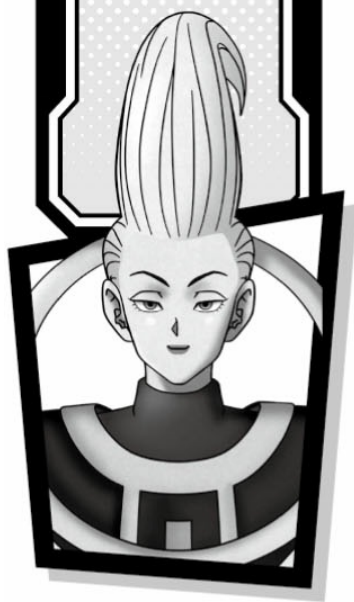
ズガアアアア……ッ！

しゅう　い　の　だい　ばく　はつ　ま
周囲すべてを飲みこむような大爆発が巻きおこった。

その
11

それぞれの
明日

あ
し
た



そのはるか上空で、ブルマの操縦する飛行機は円を描くように飛んでいた。

「よかった～、早めに逃げておいて……」

爆発がおさまった現場へと、グライダーのように旋回しながら近づいていく。

窓にはりつくようにして下をのぞきこんでいたパンが大きな声をだした。

「あっ！ あのかいづつがない」

操縦しながら、ブルマもちらりと下を見る。

「みんなだいじょうぶかなあ……」

心配そうにつぶやくパンの目に、18号の姿が見えてきた。さっきの爆発で吹き飛ばされ、埋まってしまったクリリンを、地面からズボツと引っ張りだしてやっている。

「みんな無事よね！」

ブルマは安全な場所を探して飛行機を着陸させた。

後部扉を開けると同時に、パンがいきおいよく駆けだしていく。

きょろりとまわりを見まわしたパンは、煙の奥に、悟飯とピッコロの気配を感じた。

「オレンジいいですねえ」

「おまえもいいじゃないか。……お？」

聞こえてきた声をたよりに駆けよると、二人もパンに気づいて顔をむける。

「え？」

だがパンは、見たことのない悟飯の姿に、驚いて止まってしまった。

オレンジ色をしたピッコロのとなりに、シルバーの髪を逆立てた姿の悟飯がいる。

とまどったように見つめるパンに気づいた二人は、気を解いて、元の姿へともどった。

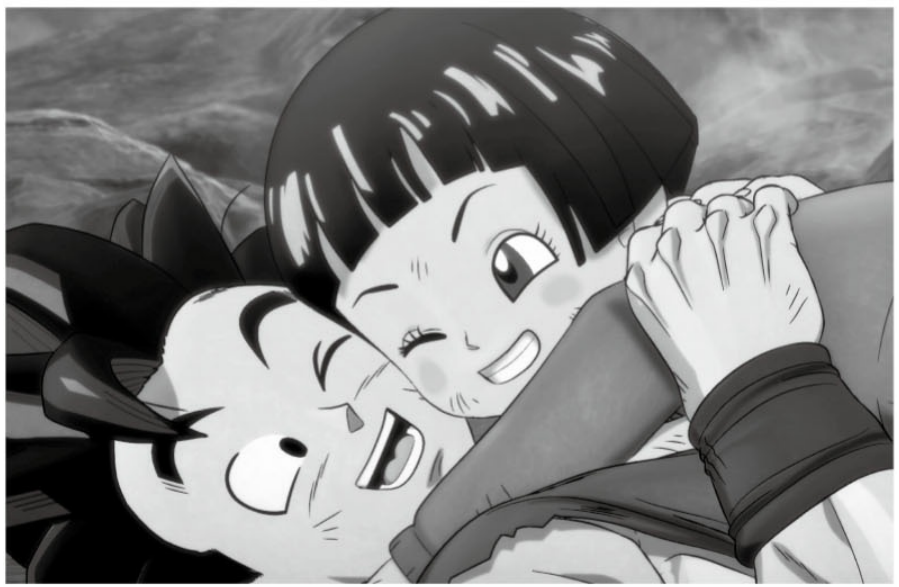
「！」

いつもの姿になった悟飯にしゃがんで腕をひろげられ、パンはうれしそうに駆けだして――

ドオンッ！

途中で音速を超えたパンは、思いきり悟飯を押し倒した。

うれしそうな悟飯と、頬をよせて笑いあう。



その様子を満足そうに見つめていたピッコロは、ふと思いだして顔をあげた。

遠くにガンマ1号とヘドがいる。ヘドもどうやら無事だったようだ。

視線に気づいたガンマ1号が、目顔でうなづく。

それに返したピッコロに、悟飯もパンを肩に乗せて立ちあがった。

「ヤツらがいなければ、倒せなかった……」

「……あんなセルの化け物、父さんやベジータさんがいても倒せなかったかも……」

つぶやくように言ったピッコロへ、悟飯も答える。

そんな悟飯をじろりとらんで、ピッコロは指をつきつけた。

「だから平和に見えても油断はするなと言ったんだ」

「そうですね。すいません……」

パンを降ろしながら言う悟飯は、だいぶ反省しているようだ。

楽しそうに駆けだしていったパンがいなくなってから、ピッコロはチラリと悟飯を見た。

「……ところで、さっき撃ったのは？」

「魔貫光殺砲のつもりでしたが」

悟飯の答えに、やはりそうかとピッコロは思った。

「撃てたのか？」

悟飯に教えたことはなかったはずだ。

と問われた悟飯は立ちあがると、照れくさそうに頭をかいた。

「こっそり練習したことが……」

なるほど、そういうことだったのか。

ピッコロはくりと背中をむける。

「……上出来だった」

その声には、にじむうれしさがかくしきれていなかった。



悟飯^{ごはん}たちがぶじの再会^{さいかい}を喜び^{よろこ}あっていたそのとき。

ヘドは倒れたガンマ2号の手を、ぎゅっと強くにぎっていた。

どれくらいそうしていただろう。

ガンマ2号の体^{ごう}から力^{ちから}が抜^ぬけて、サラサラと光^{ひかり}の粉^{こな}に変わりはじめた。

くずれていく体^{からだ}が、空^{くう}中^{ちゆう}にとけるように舞^まっていく。

祈^{いの}るようにつかんだ手^ても、ヘドのてのひらからこぼれるように消^きえていった。

ヘドは悲^{かな}しそうな表情^{ひようじよう}で、ガンマ2号の最期^{ごう}の光^{さい}を見^ごお^{ひかり}く^みった。

あとには2号のマントだけ^{ごう}がのこされている。

「……死^しんだのか？」

空^{そら}を舞^まう光^{ひかり}の粉^{こな}を見^みつめながら、ピッコロがゆっくりと二人^{ふたり}のもとへとやってきた。

「ああ……。せつかく助^{たす}けてもらったのに残念^{ざんねん}だった」

答^{こた}えたのはガンマ1号^{ごう}だ。

「なにをしたんだ……あのとき……」

セルマックスの弱^{じやくてん}点^{てん}をつくために、ガンマ2号^{ごう}は必死^{ひっし}で闘^{たたか}っていた。

ピッコロたちに足^{あし}どめをたのみ、自^{みづか}らは上^{じよう}空^{くう}で気^きをためていたように思^{おも}う。

「のこったエネルギーを一^{いっ}気^きに使^{つか}ったんだ」

ガンマ1号^{ごう}は静^{しず}かに答^{こた}えながら、ガンマ2号^{ごう}のマントをそつと持^もちあげた。

「おかげで、アイツの攻^{こう}撃^{げき}力^{りよく}が落^おちた」



こん しん いち げき かた うで き
渾身の一撃だったからこそ、あのセルマックスの片腕を切りおとすことができたのだ。

うなだれたままのヘドの背に、ピッコロはそっと手をかけた。

「スーパーヒーローだったな」

「おまえたちこそ……」

なぐさめるように言ったピッコロへ、ガンマ1号が小さくそう返す。

ヘドも深くうなだれたまま、小さな声をしぼりだした。

「ありがとう。おかげで世界は救われたよ」

「礼を言うのはこっちだ」

あの邪悪な化け物を創りだしたのはたしかにヘドだ。

だが、ガンマたちを創りだしたのもヘドなのだ。

ガンマ2号が命をかけて闘ってくれたからこそ、セルマックスの力が落ちた。

ガンマ1号が最後までいっしょに闘ってくれたおかげで、いまこのときがおとずれている。

「ボクのせいだ……ボクがセルマックスを創った。2号はボクの責任を取って……」

とつとつと後悔を語るヘドに、18号と連れだってやってきたクリリンが声をかけた。

「おまえもヤツらに利用されたんだろ？」

「……いや、なんとなくわかっていたんだ……」

ヘドの声が、さらに小さく落ちていく。

「ボクは、研究費が……ほしくて……」

ガンマ1号は、2号のマントを持ったまま、そう言うヘドの表情を見つめていた。

「それにしてもあんた、よく助かったわね」

無言になってしまったヘドたちの会話に、ひょっこり顔をだしたのはブルマだった。

ヒーロースーツが多少すすけているくらいで、ヘドに大きなケガはない。

「……ボクは少しくらい衝撃に耐えられるように皮膚を改造したんだ……」

「皮膚を!? ゲゲ、それってちょっと引くわー」

「「小ジウを取るのも改造じゃん」」

思わず一歩さがったブルマに、すかさずゴテンクスが茶々を入れる。

「いま言ったのトランクスでしょ！」

けれどすぐににらまれて、たじろぐゴテンクスのフュージョンが解けた。

どっちが言ったか、責任をなすりつけあう二人をにらんでいたブルマが「そういえば」と悟天を呼んだ。

「今回のことはチチさんにはナイショよ。こんな闘いにさそったなんて、バレたら殺されちゃうわ」

「ハイ！」

釘をさされて、悟天がしっかりと背筋を伸ばす。

ブルマは小さく息をつく、まだうなだれているヘドのほうへと顔をむけた。

「……で、ドクター・ヘドだっけ？ これからどうすんのよ」

「……ガンマといっしょに警察に出頭します」

「いやいやいやいや、じょうだんじゃない。警察じゃおまえたちを留置する自信がない！」

よろよろと力なく立ちあがったヘドと1号に、クリリンがぶんぶん両手をふる。

そのやりとりに、ピッコロもゆっくりと立ちあがってヘドを見た。

「なににもなかったってことでいいんじゃないのか？」

思いもしなかったその言葉に、ヘドの目が大きくなる。

「おまえたちはいいヤツではなかったが、悪いヤツでもなかった」

ガンマ1号がもうしわけなさそうにうつむいた。

ヘドもふたたび顔をさげ、

「じゃあ……」

意を決したようにブルマを見あげる。

「ボクとガンマをカプセルコーポレーションでやとっていただけませんか？」

「はあ？ ふざけんなよ！ てめえ、よくそんなこと言えるな！」

そのお願いに、怒鳴ったのは18号だ。

いまにも殴りかかろうとする18号をクリリンがあわてて止めに入る。

そんなさわぎをよそに、ブルマは少し考えて、ピッと人差し指を立てた。

「……あんた、美容的なことってどうなのよ？」

「美容って……？」

きょとんとまたたくヘドに、「ちよっと」と近くへくるよう指で指示をだす。

おとなしくやってきたヘドに顔を近づけて、ブルマは声をひそめた。

「肌を若くする、とか……」

「……ああ。まあどうぜん生物学的なこともかわいいですし、医師の免許も持っていますから、そんな程度のことは……」

それを聞き、ブルマはぐいっと体を起こす。

「なるほど。あんたのスゴイ能力は会社としてもたしかに魅力的ね。それに、超優秀なガードマンか……」

また考えるように二人を見て、それからピッコロに矛先をむける。

「どこかでまたヤバいことをたくらんだりされても困るしね……どう思う、ピッコロ」

「……オレは反対しない。ブルマにあんなことでドラゴンボールが使われるより、な」

「うるさいわね！」

あんなこと、を知らないヘドたちは、きょとんとした顔でブルマを見る。

そんなヘドに、ブルマはニコッと笑顔をむけた。

「じゃあ、きまり！ やとってあげる」

「ありがとうございます。ほらっ、おまえも」

「ありがとうございます！」

ヘドとガンマ1号^{ごう}がブルマに^{るか}深々とおじぎする。

これで一件^{いっけん}落着だ。

と、パンがくいとピッコロのズボンのすそ^ひを引っばった。

気づいたピッコロに誇らしげな顔^{ほこ}をむけて、少し^{かお}はなれる。^{すこ}

拳^{こぶし}をにぎって集中^{しゅうちゅう}すると、パンの体^{からだ}がフワッと^う浮いた。



そのまま夕暮れゆうぐの空そらを一回転いっかいてんして、みんなのあいだとおぬを通り抜けていく。

「明日あしたからは次つぎのステップのトレーニングだな」

「ウン！」

ふっと笑わらったピッコロの言葉ことばに、パンはくるくると飛とびながら、満面まんめんの笑えみでうなずいた。



ちきゅう きき ごはん そうで の
地球の危機を、悟飯たちが総出でなんとか乗り越えたころ——

し ごく たたか せい あな つづ
そんなことなど知らない悟空とベジータの闘いは、ビルス星のあちこちらを穴だらけにして続いていた。

「ハアハア……ハア、ハア……」

「ハアハアハア……」

なん じ かん たたか ふたり いき
もう何時間もぶっとおして闘っている二人の息は、どちらもそうとうあがっている。

からだじゅう た
体中ボロボロのフラフラで、立っているのがやっとだった。

さい ご ちから ひだり こぶし
そんなベジータが、最後の力をふりしぼり、左の拳をふりあげる。

「——ガア！」

き あ いっ せん とお ちから め ごく むね
気合い一閃——とは、ほど遠い力の抜けたパンチがどうにか悟空の胸にとどく。

う ごく からだ たお
それを受けた悟空の体が、ふわーっとうしろに倒れた。



ご ぐう た せい いっ ぱい
悟空も、もう立っているだけで精一杯だったのだ。

「ハアハアハア……、^ま負けたあー！」

^{たお}倒れこんだまま、^{ご ぐう ま せん げん}悟空が負けを宣言する。

やりきったその顔は、^{かお ま}負けたというのになんだかうれしそうでもある。

^{こう ちゃ たの き て}のんびり紅茶を楽しんでいたウイスが、それに気づいて手をあげた。

「……あつ、はい、ええと……、^かベジータさんの勝ち～」

ビルスはどうでもいいと言わんばかりに、うしろで大きなイビキをかいている。

^{かた いき}肩で息をついていたベジータが、^{こと ば おお りよう て}ウイスの言葉に大きく両手をつきあげた。

「……やっ、やった……つつ、ついに……カカロットに……^か勝った、ぞお！」

こみあげる喜びをかみしめるように叫びながら、そのままうしろに^{たお}倒れこむ。

^{げん かい}ベジータも限界だったのだ。

^{こ きゅう}あらい呼吸はまだしばらくおさまりそうにない。

「ゼエゼエ……、や、やったぞ……」

「へへッ」

^め目もあけていられないほどへろへろのくせに、^{まん ぞく ふたり おとこ}満足そうな二人の男に、^{ひょうじょう くび}チライはうんざりした表情で首をふった。

「……やれやれ、やっとお終わったか。バツカじゃないのアイツら。なあ、プロリー」

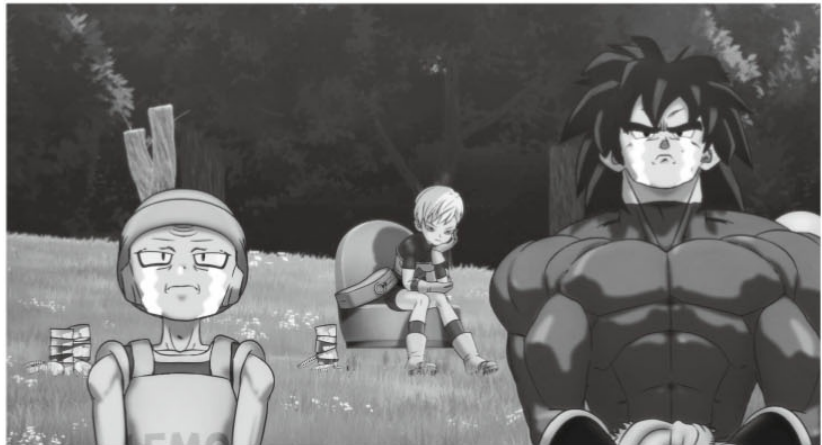
こんなことをしていったい^{たの}なが楽しいのか、チライにはさっぱりわからない。

^{どう い もと}同意を求められたプロリーは、けれどひどく^{かん どう}感動しているようだった。

^{かた}レモといっしょにぶるぶる肩をふるわせて、^{なみだ なが}ダーツと涙を流している。

^{ふたり}そんな二人に、チライは^{こころ}心の^{そこ}底から^びドン引いた。

「……男^{おとこ}って……くだらない！」



「あら？」

彼^{かれ}らのやり取り^とを聞きながら立ちあがったウイスは、ふと、自分^{じぶん}の杖^{つえ}の玉^{たま}が点滅^{てんめつ}していることに気づいた。ピルスが食べたアイ
スのカップがかぶさっていて、まるで気づかなかったのだ。

「なにか御用^{ごよう}でしたか、ブルマさん」

「んもう、おそいわよ、ウイスさ〜ん！」

つなげなおした先^{さき}のブルマは飛行機^{ひこうき}を操縦中^{そうじゅうちゅう}のようだった。

なんだかみように汚^{よご}れてもいる。

「どうももうしわけありませんでした。ところでなにか美味^{おい}しいものでも？」

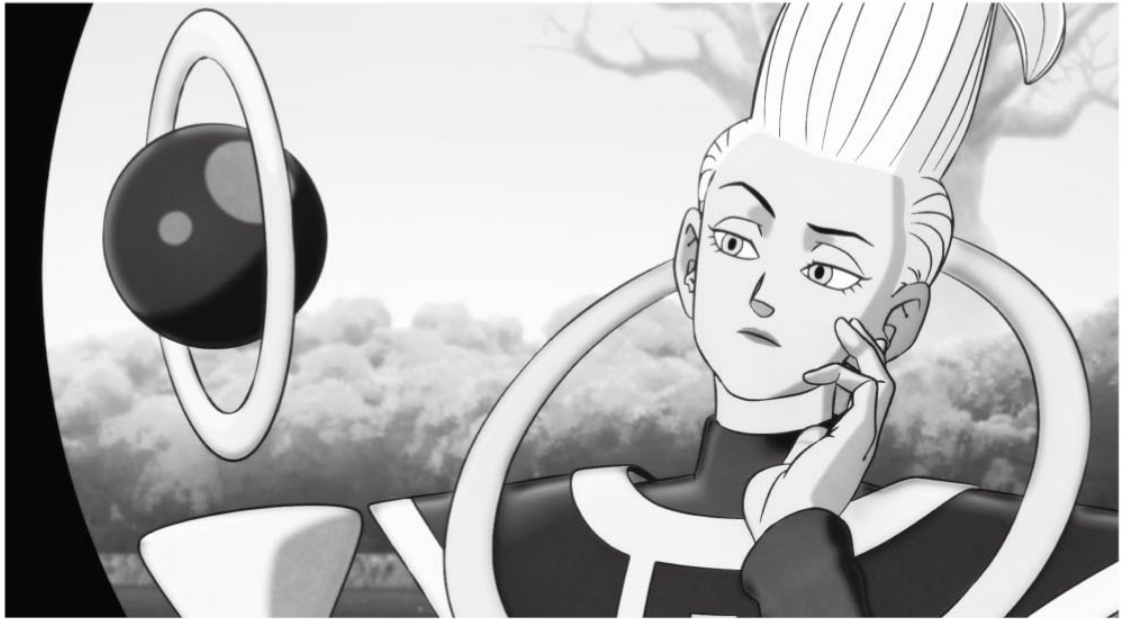
「……う〜ん、まあね……でも料理^{りょうり}が冷めちゃったから、また今度^{こんど}ね〜。じゃ」

「あら。なんだったのでしょうか……？」

あいまいな言葉^{ことば}でにごしたブルマにあっさり通信^{つうしん}をきられてしまう。

ウイスは、はたと首^{くび}をかしげたのだった。

お
終わり



この本は、映画『ドラゴンボール超 スーパーヒーロー』（二〇二二年六月公開）をもとにバリエイズしたものです。

作者紹介

原作 脚本 キャラクターデザイン

鳥山 明 とりやま・あきら

漫画家。1978年に『週刊少年ジャンプ』にて読切作品『ワンダーアイランド』でデビュー。代表作『Dr. スランプ』、『ドラゴンボール』はTVアニメ化され、世界中で今なお人気を博している。

著

小川 曄 おがわ・すい

北海道出身。小説家・コミック原作者。みらい文庫では、映画『僕のヒーローアカデミア THE MOVIE』や、人気テレビ番組『逃走中』のノバライズシリーズなどを執筆している。

「みらい文庫」読者のみなさんへ

言葉を学ぶ、感性を磨く、創造力を育む……、読書は「人間力」を高めるために欠かせません。たった一枚のページをめくる向こう側に、未知の世界、ドキドキの未来が無限に広がっている。これこそが「本」だけが持っているパワーです。

学校の朝の読書に、休み時間に、放課後に……。いつでも、どこでも、すぐに続きを読みたくなるような、魅力に溢れる本をたくさん揃えていきたい。読書がくれる、心がきらきらしたり胸がきゅんとする瞬間を体験してほしい、楽しんでほしい。みらいの日本、そして世界を担うみなさんが、やがて大人になった時、「読書の魅力を初めて知った本」「自分のおこづかいで初めて買った一冊」と思い出してくれるような作品を一所懸命、大切に創っていききたい。

そんないっぱいのおもいを込めながら、作家の先生方と一緒に、私たちは素敵な本作りを続けていきます。「みらい文庫」は、無限の宇宙に浮かぶ星のように、夢をたたえ輝きながら、次々と新しく生まれ続けます。

本を持つ、その手の中に、ドキドキする未来——。

本の宇宙から、自分だけの健やかな空想力を育て、“みらいの星”をたくさん見つけてください。

そして、大切なこと、大切な人をきちんと守る、強くて、やさしい大人になってくれることを心から願っています。

2011年 春

集英社みらい文庫編集部

集英社eみらい文庫

ドラゴンボール超 ^{スーパー}スーパーヒーロー

映画ノベライズ ^{えい が}みらい文庫版

原作・脚本・キャラクターデザイン ^{とり やま あきら}鳥山 明

著 ^{お がわ すい}小川 慧

©BIRD STUDIO Ogawa Sui 2022

©バード・スタジオ／集英社

©「2022 ドラゴンボール超」製作委員会

2022年6月30日発行

この電子書籍は、集英社みらい文庫「ドラゴンボール超 スーパーヒーロー 映画ノベライズ みらい文庫版」
2022年6月19日発行の第1刷を底本としています。

〒100-0001

〒100-0001 東京都千代田区一ツ橋2丁目5番10号

〒100-0001 東京都千代田区一ツ橋2丁目5番10号

〒100-0001

〒100-0001

〒100-0001 (読者係)

大(パナナグローブスタジオ) 中島由佳理

パングラフィックコミュニケーションズ

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、インターネット上に掲載すること、および有償無償に関わらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。なお個人利用の目的であっても、コピーガードを解除しての複製は、法律で禁じられています。